高谷春美 Harumi Takaya

派遣国：マーシャル諸島
職　種：日本語教師
隊　次：平成3年度1次隊（活動期間1991年7月～1993年7月）
出身地：北海道

初　出：「月刊すこーれ」1995.1.1（(株)すこーれ出版）

"こんな国大嫌い"からはじまった!

はっきり言って、私はマーシャルが大嫌いだった。何もない島での生活は時間がピタリと止まっているようにゆっくりと流れ、物悲しく、孤独と疎外感でいっぱいだった。しかし月日は、と言うよりマーシャルの人たちが私を徐々に変え、マーシャルは私の心の故郷のような存在になった。それはまた私の考え方を変え、生き方までをも変えようとしている。

マーシャル諸島はグアムとハワイの間にある総面積180㎢（北海道の利尻島とほぼ同じ）、人口4万8千人、29の環礁と5つの島からなる小さな島国である。環礁というのは、ドーナツ型のサンゴからなる平均海抜1～2の島のことである。

マーシャルには山がない、川もない、土地もない、サンゴで出来ているため土もない、豊富に採れる土地の食べ物もない、ついでに子から子へと受け継がれるべき確固とした文化がない、テレビがない、映画館がない、遊びに行くところがない、と「ない、ない」尽くしである。逆にあるものと言えば、最先端を誇る米軍基地、アメリカの援助、援助によって輸入する物質、車、エアコン、コカコーラ、容易に生まれてくる子供と失業者など、この国に不釣合いなもので溢れ、島全体がゴミ箱化しているようだ。

昔はスペイン、ドイツそして日本に支配されていて、60歳以上のお年寄りの中には、昔強制的に覚えさせられた少し古風な日本語を流暢に話す人も多い。現在はアメリカの自由連合国となっているので、自由奔放で物質文明に翻弄され、アメリカナイズされた若い世代を嘆かわしく思っている人たちも少なくない。

不満で、苦しんで、見えてきたもの

そんな島のマーシャル人の家庭で、私は2年間お世話になった。島の住宅事情は最悪で、土地が狭い上に人口増加で住宅の整備が手付かずの状態だった。私のホームステイ先も約10～12人家族が2LDKで暮らしていた。

私がその1部屋を占領していまうと、そこの主の夫妻を除いては雑魚寝状態だった。

マーシャルにはマニットという、親戚縁者ならどこの家に寝泊まりしても自由、持てるものが持たざる者の面倒をみるのが当たり前の習慣があった。産業のない島ではお役所勤めが主要産業化し、一家に1人公務員がいるとその一家を養っていけるため、人の出入りも激しく、家の中はいつも騒然としていたので、私は不満ばかりを漏らしていた。

うるさい、汚い、暑い、水がない、マーシャル語がわからない、自分の英語が通じない、食事がまずい、物を盗まれる（悪意は全くない軽い気持ちで拝借していくのだろうが戻ってきたためしがない）、ある種の深刻なカルチャーショックに陥っていた。しかし、マーシャルの人たちはそんな状況を気にする様子もなく面倒を掛ける側も掛けられる側も辞することなく助け合っている。それはまるで私が空気を吸って生きているのと同じくらい普通のことで、義理や人情、お金、物質に囚われることなく真の心からの優しさだった。狭い島で円滑に生きていくために、人間本来の優しさをそのまま残しているようだが、貨幣経済が浸透する中で、いつまでもこのマニットに依存していていいのかとも思った。

しかし、私がクッキーにかぶりついている生徒の前を通り過ぎる時「春美、食べる？」とかじりかけのクッキーをくれようとする生徒や、給料を貰うと皆に大判ふるまいをしてしまい、翌週の生活に借金をしてしまう人、お金もないのに誕生日や送別会をしてくれる人、心を込めて歌を歌ってくれる人、私が貝を集めているのを知ると一生懸命に探してくれる人、みーんな救いようのないくらい優しい人たちばかりだった。しかし私はそんな優しさに気づかずに感情を剥き出しにし、マーシャルの人たちを軽蔑したり傷つけてしまっていた。

私はいったい何しに来たの?

日本語教師として、はかどらない授業に焦り、やる気がない、覇気がない、勉強習慣が身に付いていない、忘れ物、遅刻が多い等で生徒をずいぶん怒ってしまったが、自分自身に対して怒るべきだったと、任期も残り1年というところでやっと気づいた。

産業のないマーシャルでは、高校を卒業しても就職先はなく、目に見える自分の人生に対し覇気がなくなるのも当然。高校の教師の半分は外国人であり、

主にアメリカ人によるわからない英語でアメリカの歴史を勉強したところで、やる気がなくなるのも当然だった。

日本がかつてマーシャルを支配し、米の育たない島に米を持ち込み、それを食べることを教えることによって自給自足の生活が少しずつ崩れ始め、それに拍車をかけるようにアメリカが持ち込んだ豊富な物質と自由と援助によってマーシャルの人達のやる気を奪い、もろい文化を飲み込み、自然を破壊した。その全てを受け入れてしまった現在のマーシャルがある。そこに育つ子供たちのことを全く理解していなかった私は協力隊員失格!!

そして私は一体、何をしにマーシャルに来たのだろう、マーシャルに日本語が必要なのか、生徒が日本語を学習して何になるのかと悩んだ。しかし、私の悩みをよそに明るく無邪気に話しかけてくる生徒たちに囲まれて私はハタと気が付いた。私の仕事は心の交流、日本語を学習して話せるようになることも大事だが、私というちょっと変な日本人を通して、マーシャルとは違う文化や考え方に触れることによって、生徒たちの考え方にほんの僅かでも広がりを持たすことができればと思った。

120パーセント自分を生徒の前にさらけ出し、自分を語ったり、日本語や日本の文化を教えたつもりだったが、実ははるかに学ぶことのほうが多かった。優しさ、許すこと、待つこと、時間、自分にとっての教育、そして一番大切なことは心だと教えてくれた。

こう記していくと何だか自分が観音様にでもなったかのようだ。でも日本の生活に戻っていくにつれて、心だけだはどうしようもない現実に多々ぶつかり、マーシャルですっかり洗われた心が歪みそうになることが多い。それでも、やはり心が大切ではないかと思っている。

また時間のたっぷりあるマーシャルで、私は生かされていることい気が付いた。いつも何か目標をもって生きてきたということだった。そこで次の目標として、私はマーシャルで経験したいろいろな事や今の私の考えを整理するために大学でもう少し勉強してみたいと思っている。そしてマーシャルのために何ができるかわからないが、とりあえずマーシャルという国を少しでも多くの人たちに知ってもらいたいと思っている。マーシャル広報課日本支部北海道地区担当者としてマーシャル諸島の大ファンとして。

(了)

岸田　茂 Shigeru Kishida

派遣国：ネパール
職　種：理数科教師
隊　次：平成3年度1次隊（活動期間1991年7月～1993年7月）
出身地：栃木県
初　出：「学園随筆」1994.11.5（(株)学園書房）

青年海外協力隊員レポート

1991年7月20日、赤茶けた煉瓦の町並みの首都カトマンズに降り立つ。「今日からここが第二の故郷になるかも知れない」と思った日から、あっという間に2年が過ぎ去った。ここでは、ネパール派遣 青年海外協力隊員として私が経験したことを、書き記しておきたい。

まず、自分の任地であるサガルマータ県ソルクンブ郡で、中等学校の数学教師をしているサルマさんと出会えたことで、私のネパールでの生活は活気に満ちたものとなった。彼はネパール人にしては珍しく、酒・煙草・賭け事・マグネ（物乞い）を一切やらない真面目な人で、休みの日にも本を読みふける程の努力家だった。

ある日彼に「どうしてそんなに勉強するのか？」と尋ねると、「今から50年経てばネパールも少しは発展するでしょう。しかし日本やアメリカはもっともっと先に行ってしまいます。更に、今この国はやっと民主主義を勝ち取ったばかりで、国民がどうすればもっと良い国づくりができるのか理解していません。だから、私たち教師が子供たちに教えていかなければならないのです。でもそれには限界があります。あなたたちのような先進国の皆さんの助けが必要なのです」と語った。

「今の日本は豊かだし、生活に対する保証も備えられているから、今後も大丈夫だよ」と私が言うと、彼は「それでも仮に日本が駄目になった時、あなたたちはどうするのですか？自分の国なのに他人任せにして逃げるのですか？」と食い入るように質問されたことがあった。

国づくりへ秘めたる闘志

その時、私はとても恥ずかしくて何も言うことが出来なかった。彼の心の中にある世の中に対する不平等感が、重く私にのしかかってきた。というのも、ネパールでは本場のインド以上にカースト制度<ネパールではザードと言い、上からバフン（司祭階級）・チェトリ（武士階級）…と続く。外国人は第3カーストになる>が生活の中に取り入れられており、すべてにおいて階級による差別が罷り通っていたのだ。サルマさんは下の階級という訳ではないが、他の土地から来たということで待遇は良くなかった。

彼は本当に自分の国や家族を愛し、未来を信じていた。また、彼はコミュニスト（共産主義者）でもあった。しかし、私の学校の教師の殆どがコングレス（国民会議派）であったため、コミュニストである彼はコングレスによる迫害を受けていた。だが彼の秘めたる闘志は決して消えることはなかった。私は、「彼のような人がこれからの国を支えていくのだ」と思わずにはいられなかった。

ところで私の現地の仕事というのは、1年目に地方の学校で教育現場の状況を知り、2年目は地方教育事務所に籍を置いて、チャイニーズ・トレーニングと呼ばれる小学校の教師を対象とした、研修のインストラクター（教科は算数）をやるというものだった。

計画通り進まなかったが…

しかし1年目が過ぎた後、お世話になった学校に挨拶を済ませてコシ県タンクッタ郡の地方教育事務所（通称チェシニ）に行ってみると、チェシニでの仕事は既に無くなっていた。このことに私は驚きを隠せなかった。われわれの仕事は現地の人々との共同作業によって育まれるものなのだ。しかし、現地の人々の反応は冷たかった。心の中で「せっかくネパール語も話せるようになりこれからが本番！」と思っていた矢先のことだったので、その落胆の大きさは私のやる気を失わせるのに十分であった。そうした中で、私以外にも3人の理数科教師が、4ヵ月近く行く先が決まらずに途方に暮れていた。

そういう時には悪いことが続くもので、私自身チフスをわずらったり、TG機が墜落して大変な忙しさが襲ってきたりと、本当に散々な目にあった。そういった状況の中、教育文化福祉省でティーチャーズ・トレーニングが算数のみ行われることとなり、私を含めた2名の先生がこのトレーニングに参加し、他の2名の理科専門の先生は、他の所で、教科書改訂の仕事のお手伝いをすることになった。

しかし、3週間にわたるトレーナーの講習を終えていざ蓋を開けてみると、予定されていた50ヵ所の郡がいつの間にか25ヵ所になり、講習に集まったトレーナーをすべて配置することができず、勿論自分

も最初の予定地であったソルクンブには行くことができなかった。実際に、首相の汚職に伴う政府関係の大々的な異動で、このトレーニングを組んだ主要な人もいなくなってしまったので、文句の言いようもなかった。

苦労を乗り越えた喜び

こうして、また途方に暮れるのかな？と思っている所に、一緒に講習を受けたトレーナーの方の誘いがあり、ラリットプール郡パタンで、3ヵ月間の研修に入ることができたのだった。この研修は私にとって事実上任国での最後の仕事となり、目一杯頑張りたかったが途中で体調を崩し、最後の2週間は何もできずに悔いが残った。しかし、ネパールの教科書には出てこない内容ではあるが、どうしてそうなるかという理由を中心に据えて指導したので、算数を得意とする先生方には大いに喜ばれた。

研修後、彼らが見舞いに来てくれたり、ピクニックに誘ってくれたりしたのが大変嬉しかった。お世辞かもしれないが、「サール（ネパールでは、先生のことを英語のSirを使って言う）のような人が今のネパールには大勢必要なのです。私たちの学校を巡回して、一つ一つまた他の先生たちにも教えて頂けませんか？」と言われた時に、本当にこの国へ来て良かったと思えた。

経済的には、殆どが外国に頼っていかなければならない大国に挟まれた弱小国であるかもしれないが、この国の人々と大いなるヒマラヤの荘厳なる自然の中で育まれた何物にも変え難い思い出の数々は、一生この脳裏から消え去ることはないと確信している。現在中学校で数学を教えているが、数学だけではない、様々な体験を少しずつ少しずつ生徒に語りかけていきたいと思う毎日である。

（了）

宮本純子 Junko Miyamoto

派遣国：マレイシア
職　種：幼稚園教諭
隊　次：昭和62年度2次隊（活動期間1987年12月～1989年12月）
出身地：東京都
初　出：「学研ピコロ」1989 8.1（(株)学習研究社）

私の"生徒"は現役の幼稚園の先生たち

こんにちは。常夏の国マレーシアからお便りします。私は'87年12月より青年海外協力隊員として、マレーシア政府の一組織である、フェルダ（連邦土地開発公団）の中央訓練所で活動をしています。訓練所には、技術を身につけるための講習会が20ほど開かれており、その中に現役の幼稚園の先生を対象としたコースがあって、私はそこで主に音楽と体育についての指導をしているのです。マレーシアには、日本のように幼児教育者を養成する教育機関（短大や大学にあたるもの）がないので、全くの素人が先生になるのですが…、フェルダの幼稚園の先生は、順番にこの訓練所で3ヵ月間合宿生活をしながら、幼児教育を学びます。というわけで、私の"生徒"である先生たちは、年齢が19歳～40歳、経験年数も0～17年と大きく差があり、独身者、既婚者、子どもが7人もいる人やおなかの大きい人など、さまざまです。

学校教育に音楽がとり入れられたのはつい5年ほど前

マレーシアでは、学校教育に音楽がとり入れられたのがつい5年ほど前のことなので、生徒たちは楽譜を読むことができず、リズム感も……？でもみんな歌うことはとても好きです。その歌を通してどんなことを子どもたちに教えられるか？ということを指導しています。体育の授業では、ボールやフープ、縄とびなどを使った実技を中心としており、いつもはパジェ・クーロン（マレー服）を着ている彼女たちも、このときはジャージに着がえ、子どものように無邪気になって授業に参加しています。

幼稚園に小学校のような時間割

さて、幼稚園の様子ですが、日本の幼児教育とは大きく違い、小学校のように時間割が組まれています。またフェルダはイスラム教の社会ですので、その勉強も欠かせません。毎日コーランを読み、お祈りをし、金曜日には正装をして礼拝堂へ行きます。

日本の幼稚園では、豊かな心身の発達、創造性、社会性などを養うことを基本としていますが、ここではまず宗教、そして国語、算数、理科などの勉強に力を入れます。日本人から見ればちょっとかわいそうな気もしますが、マレーシアならではの教育方針なのでしょうね。
残りの任期、マレーシアの幼児教育によりふさわしい指導ができるようがんばっていきたいと思っています。

（了）

川口栄一 Eichi Kawaguchi

派遣国:ガーナ
職　種:理科教師
隊　次:昭和63年度1次隊(活動期間1988年7月～1991年7月)
出身地:京都府
初　出:「電気計算」1993.1.12((株)電気書院)

現地の人と同じ言葉を話し、同じところに住み、同じものを食べ、自らの利益を求めることなく、ひたすら開発途上国の新しい国造りに貢献する青年海外協力隊員たちのレポートを紹介。

*　　*　　*

"アフリカの学校"というと日本の人達はどういうイメージを持つのでしょうか。土の壁？　ワラの屋根？　教師が教材を作らなければいけないってこと？まあ、ある程度は当たっていますが私の赴任したガーナでは、そのような我々がイメージするガーナの学校とは少し異なっていました。

ガーナはアフリカ西部、ギニア湾に望む共和国です。かつてはゴールド･コースト（黄金海岸）と呼ばれ、経済の半分はココアの輸出に頼っています。私のガーナでの任地は、ナブロンゴというガーナ最北端の田舎町です。当初は首都から最も遠く、さぞかし環境も悪いのではないかと思っていましたが、予想に反して校舎は鉄筋コンクリートであり、敷地面積2.5㎢と広く、その敷地内にドミトリー（宿舎）6棟、教室3棟、管理棟、実験棟（生物、化学、物理、ジェネラルサイエンス各1室）、図書室、ダイニングホール、教員住宅（約50）、農場、ダム等があり生徒数1200人、教員数56名のガーナ国内でも有名で大変広大な学校でありました。

実験器材も西ドイツからの援助品が山ほど揃っていました。「何だ、これなら何の問題もなく授業ができるじゃないか。」と思ったのは、物の部分でしか見なかった最初の私の認識の甘さでした。いざ、授業が始まってみるとガーナ人の生徒や先生方の教育に対する、日本人（私）との考え方のギャップが段々と見えてきたのです。

例えば･･･最初の授業のとき、ちょうど朝食後だったかと思います。時間どおりに教室に行くと生徒が3人しかいません。「何で他の生徒は来ていないのか」と聞くと、朝食後ドミトリー（この学校では全寮制なので）に帰ってから来るとのこと、それから待つこと15分間、見ていると生徒はドミトリーから、だらだらと歩いて来ます。その後、いくら時間どおりに来るように注意してもそれを正さず、おかげでこのクラスのみ時間外の補修で遅れたところを補わなければなりませんでした。

このような時間に対する価値感の違いの根底には、生活に占める教育の重要性の度合いの低さと同様なものが見えてきます。このことは生徒だけでなく、先生方の態度にも見られます。例えば週1回のマーケットディの日や農繁期には、先生の出席率が50%を割ってしまうという、日本では考えられないことが起こります。

私は決してガーナ教育の悪口を言っているわけではありません。以上のようなことは、長年、教育というものが実生活の中で必要でなかったことと、現在の教育制度や内容がまだまだ実態に側していないからなのでしょう。でもだからといって、昔の学校のない生活に後戻りすることは、途上国をとりまく情勢からいっても無理であり、そのようなところにボランティアの意義があるのでしょう。

日本で教壇に立っていると、教育の方法論しか頭に浮かばないのですが、このような教育というもの自体がどういう意味を持つのかを考えただけでも、この延長の1年を含んだ3年間は（協力隊派遣期間は原則として2年間）大変有意義であったと思います。また、協力隊というものを派遣期間だけにとどめず、「開発教育」といった視点で帰国後も続けていきたいし、協力隊活動は、そのための第1回目の飛躍であると思っています。

まず、生徒達に「世界」を知ってもらうこと、「世界」とはもちろん、国際社会との関係、つまり生徒自身が自国が援助されていて、それに対してどうしたらいいのか考えてほしいこと、そして自分を取り巻く「世界」をどう変えていけば良いか考えることであると思います。

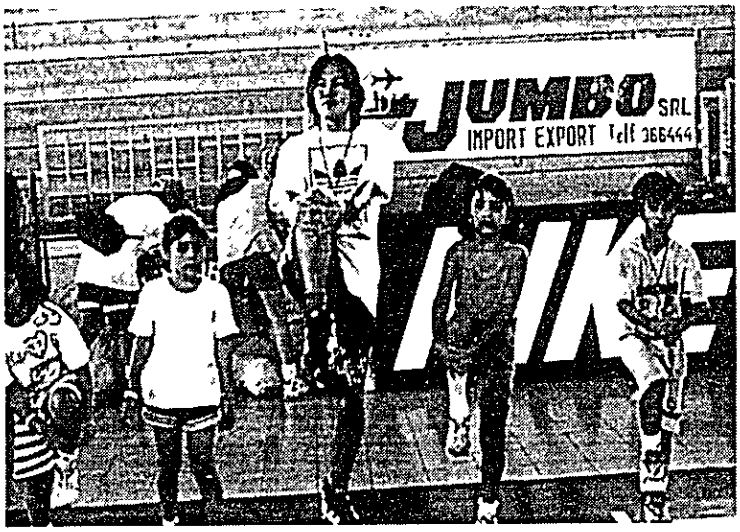
私のように、自分のイメージした途上国というものと、実際に見た途上国は大きな隔たりがあると思います。そこには自分で良いところだと思っている面が、他の国や風土の中では良くないことも多くあります。様々な人がいて、様々な価値観があり、それは実際に行って生活しないと見えないものです。他人の価値観を受け入れなければならない時、いろいろな経験を2年間でするでしょうが、2年後の隊員は確実に何かをつかんでいます。これから協力隊隊員は増えていくと思いますが、協力隊隊員は、ただ途上国でサバイバル生活をするだけなく、自己の向

上のためにも現地の人々との心の交流を大切にして
ほしいと思います。

（了）

Japan Overseas Cooperation Volunteers

体　育



〈体育〉年度別・国別派遣実績

国　名	88年度まで	89年度	90年度	91年度	92年度	93年度	94年度	95年度	96年度	97年度	98年度	総　計
バングラデシュ	3	0	2	3	1	1	1	2	1	1	0	15
ブータン	0	0	0	0	0	1	1	3	3	1	6	15
カンボディア	0	0	0	0	0	0	1	0	0	1	0	2
インドネシア	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	1
ラオス	3	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	3
マレイシア	25	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	25
モルディヴ	3	0	1	0	1	1	0	0	1	0	2	9
ネパール	17	2	1	2	0	1	2	1	1	1	0	28
フィリピン	2	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	3
スリ・ランカ	5	0	1	1	2	0	0	1	0	1	0	11
タイ	2	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	3
〈アジア地域〉	60	2	5	6	4	4	6	8	6	6	8	115
ジョルダン	1	1	0	2	0	0	0	0	0	0	0	4
モロッコ	6	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	7
シリア	1	0	1	1	1	3	1	0	3	1	1	13
チュニジア	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1
イエメン	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	1
〈中近東地域〉	9	1	1	3	1	5	1	0	3	1	1	26
ブルンディ	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	1
エティオピア	2	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	2
ケニア	4	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	4
マラウイ	1	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	2
ニジェール	0	0	0	0	0	0	3	0	1	2	1	7
ルワンダ	3	2	1	0	2	0	0	0	0	0	0	8
タンザニア	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1
ザンビア	6	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	7
ジンバブエ	0	0	0	0	2	5	14	7	10	6	2	46
〈アフリカ地域〉	17	2	2	0	4	6	17	8	11	8	3	78
ボリヴィア	0	0	0	0	2	0	1	1	1	1	0	6
コロンビア	2	0	0	0	0	0	0	0	1	1	0	4
コスタ・リカ	3	0	0	1	0	0	0	1	0	0	0	5
ドミニカ共和国	1	0	0	2	0	1	1	1	1	0	0	7
エクアドル	0	0	0	0	1	1	2	1	0	4	0	9
エル・サルヴァドル	2	0	0	0	0	0	1	3	1	0	2	9
グァテマラ	0	0	0	0	0	0	0	2	0	2	0	4
ホンデュラス	11	1	1	1	1	0	3	0	1	0	0	19
ジャマイカ	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	1
ニカラグァ	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	1
パナマ	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	1
パラグァイ	21	1	3	4	2	3	3	4	0	0	1	42
ペルー	11	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	11
セント・ルシア	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	1
〈中南米地域〉	51	2	4	8	6	6	11	14	5	8	5	120
パプア・ニューギニア	8	1	2	2	0	5	0	3	1	1	2	25
トンガ	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	1
サモア	0	0	0	0	1	0	1	0	0	1	0	3
ソロモン諸島	1	1	1	2	3	4	3	4	0	0	5	24
ミクロネシア	0	0	2	0	0	0	0	0	0	0	0	2
ヴァヌアツ	0	0	1	0	0	0	1	0	1	2	1	6
〈オセアニア地域〉	9	2	6	4	4	9	5	7	3	4	8	61
ブルガリア	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	1
ハンガリー	0	0	0	0	1	0	1	0	0	1	0	3
ポーランド	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	1	2
〈ヨーロッパ地域〉	0	0	0	0	1	0	2	0	0	2	1	6
合　計	146	9	18	21	20	30	42	37	28	29	26	406

福永理和 Michikazu Fukunaga

派遣国：マレイシア
職　種：体育
隊　次：昭和62年度1次隊（活動期間1987年7月～1989年7月）
出身地：熊本県

初　出：「みんなのスポーツ」1989.11.25（（株）日本体育社）

はじめに―国境の街に赴任して―

24時間絶えることなくシンガポールへ、そしてシンガポールから行き来するさまざまな物質、それを運ぶ人、車両。一日に何人の人間が訪れるのか数えられないほどの出入国管理所。街を歩けば、高層ビルと100年以上前に建てられたレンガ造りの家々が並ぶ。中国人、マレー人、インド人、そして外国人観光客、と肌の色、話す言葉も異なった人々とすれ違う。

この国境の街、ジョホールバルの中心地からバスで約20分。州立図書館の隣りに私の配属されているトゥメンゴン イブラヒム教育養成大学がある。学生数約900名、講師数120名。学生の約80%がマレー系で占められ、残りの15%が中国系、インド系は5%にも満たない（これは政府のマレー人優先政策にのっとった結果であり、公務員の人種別比率もこれに準じている）。開学以来、語学教員養成に力を注いできたカレッジだが、一般学生以外に現職教員の再教育コースも併設していて、その学科は体育をはじめ理科、保健、家庭科、中国語などとなっている。私が主に担当しているのは、この体育教員再教育コースの23名の男性体育教師（26歳～35歳）である。

マレーシアのカレッジスポーツ

学内のスポーツ施設はサッカー兼ラグビー場、400メートルトラック、ホッケー場、ハンドボールコート、ネットボールコート。以上が毎日手入れされている芝のグラウンド内にあり、時々クリケットも行われている。その横にセパタクロー（竹製のボールを利用した東南アジアの伝統的なスポーツ）、バレーボール、テニス、バスケットボールのコート。テニスコートには夜間照明設備がついているが、予算の関係上点灯禁止となっている。体育館とプールはなく、バドミントン、卓球はコンクリート床の講堂で行われている。いずれにしても、日本では考えられないほど、広さだけは恵まれている。

赤道付近にあるため「暑い」と一般に思われがちだが、朝夕は比較的涼しく、その短時間に集中して多種目にわたるスポーツが行われる。一般的な日本の学生と異なり、曜日によって各種のスポーツを行うため、「一種目専門」型よりも、「多種目を無難にこなす」型の学生が多い。また、イギリス占領時の名残ともいえるクラブスポーツが発達していて、ゴルフ、テニス、スカッシュ、ポロ等も盛んに行われている。しかし、これらは経済的に裕福な人々にだけ許された特権であり、庶民には縁のない世界といえる。

数あるスポーツの中で、人種を越えて最も盛んなのは、やはりサッカー。マレー語で「マイン・ボラ（プレイ・ボール）」と言えばサッカーを示すほど。毎年開催される州対抗のリーグ戦は国中あげてのお祭りと化す。

以上のような環境の下、赴任当初はおぼつかなかった私のマレー語も、日常生活には差し支えないほど話せるようになり、カウンターパート（現地人パートナー）や学生との交流もずいぶん深まった。

赴任したころ、前転や後転はもとより、ソフトボールをオーバースローで投げられない体育教師やカウンターパートを見て、非常に驚いたものだったが、それを他国の言語と身ぶり手ぶりで教え、実践させることの難しさには二重に驚かざるをえなかった。特に、片手でボールをつかみ、それを投げるという動作のあるスポーツをほとんどしないマレー系の先生に、それを指導するのは一苦労だった（自分にとっては、そういう動作は教えられて身につけたものではなく、ほとんど体験の中で身につけたものであった）。と同時に、子供のころの草野球の偉大さを感じたものだった。

女子体育をとりまく厚い壁

現在、マレーシアの抱えている体育に関する問題は、施設の充実、選手強化等がクローズアップされてはいるが、長期的な目的として最も大きなものは、政府の政策に従えば「人種間格差の縮小」であろう。特に女子体育に関する考えが宗教的、伝統的な習慣によって、偏見とも思えるものになっていることが重大な問題である。

例えば体育の授業において、それに望ましい服装をすることはごくごく当然のことであるが、多くのマレー系女性は「トドン」と呼ばれる布を頭にかぶり、長そで、長ズボンを着用。これは暑くてもそう

でなくても不変。水泳にいたっては、水着の上に長そでのシャツ、スウェットパンツ、頭には毛糸の帽子。もちろんこんな姿で泳ぐのは公共のプールでは禁止（ただし、これは宗教色の強い地域の女性のことで、全員がそうであるわけではない）。この対応策として、男女別のプール、いわば銭湯のようなプールを造ったり、曜日によって男女を分けたりしている。服装等だけでなく、経済的な問題や、また、概して婚期の早いマレー系女性は、一度家庭に入ると子だくさんの家族構成のため、スポーツの機会を失ってしまうことなども格差の存在理由に数えられる。

この点については、幾度か現地側の人々と話し合いをもったが、そのつど私は中国系、インド系の講師同様、一異教徒、一外国人としてしか扱われなかった。やはりイスラム教は男尊女卑、男性にとって、ある意味では天国なのかもしれない。

東南アジア大会を契機に、スポーツの強化を図るマレーシア。それと同時にイスラム教の強化・普及にも努めているマレーシア。はたして、この二つの矛盾を克服してマレー系の女性が中国系に取って代わり、この国のスポーツ界に君臨するのはいつの日だろうか。

おわりに

スポーツに関することだけにとどまらず、多くの問題を抱えるマレーシア。人種問題を筆頭に、折からの一次産品（ヤシ油、天然ゴム）の価格の下落に伴う経済の悪化、治安の悪化。資金枯渇による巨大プロジェクトの中断。対共産主義、麻薬、公害等々、今後のモダン・マレー層の人々に、これらの改善を期待したい。

マレーシアで生活した2年間、私の活動はこの国にとってたいした波紋を及ぼすまでには至らなかったであろう。そうなってしまったのか、あえてそうしたのか。いずれにせよ、マレーシアは自らの機能によって変革を遂げるだけの力を備えている、と信じている。

最後にマレーシアでの生活が私にとってすべてプラスになった、とは言い難いが、この地で働き、休息し、話し、人を知り、考える機会を与えてくださった方々すべてに感謝したい。

（了）

小杉　誠 Makoto Kosugi

派遣国：ネパール
職　種：体育
隊　次：昭和59年度2次隊（活動期間1984年11月～1987年11月）
出身地：東京都
初　出：「みんなのスポーツ」1988.9.25（(株)日本体育社）

ネパールの生活事情

青年海外協力隊に合格し、約130種ある職種の一つ、体育指導のためネパールに渡ったのは、昭和59年12月のことであった。ネパールというと、ヒマラヤ山脈をひかえているために山岳国家のイメージがあるが、インドに接する南部はタライと呼ばれる平野地帯で、うっそうとしげったジャングルもある。私の赴任したディバイヤルという村はとにかく暑い所で、4月頃から気温が30度を超え始めた。暑さの盛りには連日40度を超え、8月までは熱い日が続く。夜も暑くて寝られず、村の人たちは、竹で編んだゴザを家の外に敷いて寝ていた。

首都のカトマンズでは、食料品や日用品などの物資は比較的豊富にある。しかし、地方の村では自給自足がやっとという生活で、生活用品でさえ手に入れるのが難しい。ずいぶん不自由であったが、生活だけを考えれば何とかやっていけた。食生活はけっこう安定していて、食べる物に困るということはない。ダル・バート、タルカリと呼ばれる料理は毎日食べることができたが、タルカリのほうは、ないよりはマシといった代物であった。

それよりも、衛生面の不備のほうが気になった。食器などは水洗いするだけで、どう考えても衛生的とは言えない。もっとも自炊をしても、洗剤もスポンジもないので結局同じことになり、そのうちに慣れてしまった。また、トイレがないのにも驚かされた。村全体でみてもトイレがあるのは1～2軒で、それもオフィスが備えている程度。村人は、川へ行って用を足すのである。水道もないから料理や洗濯も川の水だ。確かに、川の水は絶えず流れてはいるのだが、結局、トイレは下宿先の前に穴を掘って作った。

意外に思えるだろうが、こんな所でも電気はちゃんと通っているのである。雨が降ったりしなければ1～2回の停電があるぐらいで、夜12時までは電気のある文化生活を営むことができた。

ネパールでの体育指導

非常勤の体育指導員として教育文化省教科外教育課の配属になった私の赴任先は、ディバイヤル村の極西地域事務所である。最初の仕事はカトマンズで開かれる陸上大会だった。

ところが予算がなく、いっこうに準備が進まない。しかし、参加しないわけにはいかないので、ダンガリとマヘンドラナガールの2地域だけでセレクションを行い、慌ただしくカトマンズに向かった。予算も時間もないため、男子13名、女子5名を集めるのが精一杯。やっとの思いで参加した陸上大会だった。

参考までに、男子の一位の記録を一部紹介しよう。100メートル12秒19、200メートル25秒00、400メートル54秒62、800メートル2分05秒23、1500メートル4分42秒33。ちなみにその他の種目は、4×100メートル、4×400メートル、砲丸投げ、ヤリ投げ、走り幅跳び、3段跳び、走り高跳びであった。

赴任した当時、他県ではきちんと行われていたビレンドラシールド（郡内スポーツ大会）は、半分も実施していない状態だった。その理由は、①教える人がいない　②ルールがわからない　③用具が手に入らない　④金が足りない　⑤仕事が多く時間が取れない　⑥ケンカになり、混乱するのでやりたくない、といったところが主なものである。

ケンカになるというのは、具体的には次のようなことだ。まず、競技者のマナーが悪く（ルールを知らないということもある）、トラック競技などで相手を妨害することが珍しくないのである。妨害したほうは当然失格だが、収まらないのは妨害された側で、競技をやり直せと主張して引き下がらない。また、観戦者のマナーも似たようなもので、例えば走り幅跳びの競技中、走路の左右にはびっしり人垣ができ、地元の選手を勝たせたいために、手を出すなどして他の選手の邪魔をするのである。競技役員として大会を運営していると、怒りを通り越してあきれるばかりだった。

このような問題点を話し合った結果、私には、①指導のテキストを作ってほしい　②ルール、グラウンドの作り方、運営について教えてほしい　③先生のトレーニングを行ってほしい、といったリクエストが出された。とにかくネパールでは、体育の分野は非常に遅れており、教師には知識がなく、用具もほとんどない。赴任した当時、配属先に備えられていた体育用具は、インド製のバレーボールが5個、バレーネットが10個、バドミントンの羽根が5ケースと

いった状態だったのである。しかも、インド製のバレーボールはサッカーボールと言ってもいいようなものだった。

そんな状況なので、オフィスの近くの学校の指導と並行して、一年間はビレンドラシールドの開催を中心に活動することになった。その甲斐あって、任期終了の頃にはだいぶ順調に行われるようになり、オフィス間の連絡も活発になり、「やらなければいけない」という理解が得られたと思う。

歩きづめの出張

ネパールでの協力活動は、ひたすら歩くことでもあった。山の中のディバイヤルでは、セスナ機が離着陸できる飛行場のほかには交通機関がなく、移動はすべて徒歩。一日に40〜50キロ歩き、二日がかりで任地に到着するといった出張スケジュールは日常茶飯事であった。ビレンドラシールドなどへの出張を利用して、約1万2000人の生徒の体力測定を行った時も、重い測定機器をかついで歩き続ける毎日。「なんで俺はこんな所を歩かなければならないのだろう」と思うこともしばしばであった。

また、出張である村に行った時、雨で山崩れがあって村が陸の孤島になり、身動きできなくなったことがあった。3日ぐらい待ってみたが、いっこうに復旧の見通しが立たない。食糧も心細くなり、とにかく町へ出ようと歩き始めた。問題の山崩れの現場まで行くと、道は寸断され、まだ少しずつ地滑りしている。死ぬ思いでそこを通り抜け、5日ほど歩いてようやく町にたどり着いた。こんなことも、今では懐かしい思い出だ。

体力測定に着手したのが任期終了直前だったため、結局1年延長することになったが、その間、人々の親切に触れることのできたネパールでの活動であった。

（了）

金田英子 Eiko Kaneda

派遣国：ネパール
職　種：体育
隊　次：昭和62年度1次隊（活動期間1987年8月～1990年3月）
出身地：愛知県
初　出：「学校体育」1991.4 25（（株）日本体育社）

ネパールの西部地区教育事務所（所在地・ポカラ）に日本から青年海外協力隊の体育隊員が派遣されるようになって、約10年が経とうとしていた。1987年のことである。それまでネパールへの体育隊員はその活動内容からして男性に限られていたが、この年ついに女性隊員が派遣された。と言っても、現地では女性はズボンははかないし、髪の毛を伸ばす習慣があるのに、ジャージ姿にショートカットのこの人は本当に女なのだろうかと人々は初め半信半疑であった。だが、オフィス側の不安はどうやら取り越し苦労であったようで、赴任して数か月も経つと「この人」はもうすっかり現地に溶け込んでいたのである。

国王夫妻の訪問に向けて

さて、西部地区ではネパール暦2046年（西暦1989～90年）がちょうど5年に一度の国王訪問の年にあたっていた。しかも、国民の祝日として毎年2月にある「教育の日」は、国王夫妻もポカラで過ごされることになった。そのため地区教育事務所では、毎年披露するマスゲームにも数か月前から大変な気の使いようで、例年にない工夫がいくつも凝らされた。

マスゲームの内容は何度にもわたる話し合いの結果、初め女子生徒500人が学年歌に合わせてダンスを、次に女子生徒が左右に待機する中で男子生徒500人が組体操を、最後に男女合同で人間ピラミッドを作るという3部構成にし、スタンドではそれと並行して教育の日にふさわしい絵文字を披露するという案に決定した。衣装色は新調せず制服の色を利用するなどして最小限の金額でできるだけ良い作品をめざすことになった。だが主なスタッフはわずか16名、それで約2000人の生徒指導にあたらなければならなかった。

四苦八苦のマスゲーム

まず最初に、競技場までの交通費は学校負担、生徒にはおやつは出さないという条件で参加校を募る。だが、この条件では校長からの返事はなかった。生徒たちが参加しないというのだ。各校をしらみつぶしに説得して参加の同意を得る。しかし生徒数が確定しないので制服の色が把握できず、フォーメーションを決定することもできない。そのような最悪の状態から、とにかく練習を始めなければならなかった。

初めの1週間は各学校から男女10人ずつリーダーを選出させ、1か所に召集した。男子には1人から2人、2人から3人と最後は10人までの組体操を教える。生徒たちは初めての体験だけに恐さ知らずであった。下になる者がしっかりしないと上の者がどうなるかなど考えないため、あちらこちらで上からバタバタ落ちる。だがみんな平気な顔をして笑っている。今に大惨事が起きて組体操に反対の声が出るのではないか？そのことが唯一の不安材料であったが、その反面子供たちのたくましさに思わず顔がほころぶ場面もあった。カーストによる身分の差別が依然として日常生活に多く見受けられる中で、このように人の上に人が乗ることに抵抗があるのではないかとも思ったが、幸いにしてそのような問題は起きなかった。一方女子ダンスにおいては、跳躍系や後屈の動作をできるだけ避け、前後左右への移動を伴った比較的滑らかな動きを中心にしなければならなかった。体の線が露骨に浮き出るような動作を強いると恥ずかしがるからだ。

1週間のリーダー指導が終わると、今度はリーダーを中心とする学校単位での練習に入る。その間に絵文字に使う紙の準備とスタンドでの紙開き練習に取りかかる。ネパールではそれまで、例えば800枚の紙で文字を作る場合には大型版のノート800枚を床に並べてその上から専門家が文字を書くという方法が取られていた。そのため、パターンが少ない上に人権費が高くついた。だが今回は、1人の生徒が持つ色を4色とし、その組み合わせで文字を作るという方法をとった。これはネパールでは初めての試みであった。現地の紙やテープは質が非常に悪く1度練習に使うと補修に何時間も要するはめになり、ここでも予想外の労力を費やさなければならなかった。

学校単位での練習期間が終わると、今度は市内を3地域に分けた合同練習が始まる。各地域の練習時間をずらし、1日中巡回指導にあたる。ネパールでは女性がバイクに乗るということはまずないと言ってよいが、協力隊から支給されたバイクにまたがっていつも大きなマイクを肩にかけ、背中にテープレコーダーを抱え市内中を走り回るその姿は現地のスー

パーウーマン的存在となった。

地域練習の最終目標はフォーメーションとピラミッドの完成にあった。5段のピラミッドはネパール初の試みであり、教師の誰もが生徒には無理だと決めつけ4段にしようと反対した。途中挫折しかけたが生徒たちは見事期待に応えてくれた。

会場での練習に入ったのは当日までの残る3日であった。だがこの段階になっても国王夫妻が観覧されるかどうかは確かではなかった。前日になってやっと明らかになったものの、予定していた2時間のカリキュラムを1時間以内に納めよとの命令が政府から下った。今さらそんな無茶なと思っても命令には従わざるを得なかった。当初の計画は土壇場で急きょ大幅に変更、神業以外の何物でもなかった。

みんなで力を合わせれば

当日は盛大に花火を打ち上げたかったが、ネパールでは花火は禁止されている。オープニングは国王夫妻の見守る中、国歌に始まった。緊迫した雰囲気の中で生徒たちは最高の演技を披露してくれた。国王の顔から自然に笑みがこぼれ拍手を誘った。そして何一つトラブルが起きず無事幕を閉じたのであった。その時誰もが手を取り合って大きな感激に酔いしれていた。彼らはその中で一つの確かなものをお互いに感じ取っていたのだ。みんなで力を合わせればどんな困難でも克服できるということを。

翌日、政府刊行のゴルカ新聞の1面トップにピラミッドの写真が大きく載った。開けゆくこの国を象徴するかのように。

（了）

星野照美 Terumi Hoshino

派遣国：スリ・ランカ
職　種：体育
隊　次：平成元年度3次隊（活動期間1990年4月～1992年4月）
出身地：東京都

初　出：「みんなのスポーツ」1992.11.25（（株）日本体育社）

スリ・ランカの底辺

青い空、青い海、まぶしい太陽…、常夏の島スリ・ランカ、美しい島である。しかし、その美しい島に一歩踏み込んだ私の第一印象は、ゴミの山、のら牛の群れ、病気の犬、手足のない浮浪者、乳飲み児をかかえた浮浪者風の女、そして売春婦など、社会の底辺を見る思いであった。美しく見えるのは、ほんの一コマだけでその陰にあるこうした風景は、ここスリ・ランカの一部だけなのだろうか。

私が体育隊員として着任したのは、コロンボから南へバスで20分ほどのところにあるガンゴダヴィラ・ハウス・オブ・ディテンションという収容所であった。家のない者、売春で捕まった者などの更正施設である。現在、老人、子供、精神異常者を含めて500人に近い数の女性たちが収容されている。私は、その女性たちの体育の指導者として海を渡ってきた。

何もしない収容者

日本で私はスポーツクラブに勤めており、幼児から老人まで広い範囲での指導経験を持っているので、競技選手を育てるわけではなく、素人の女性を相手に、とにかく身体を動かして運動させればいいのだから、私にもできるだろうと軽い気持ちで仕事にとりかかろうとした。

が、しかし　。彼女たちは何もしないのである。収容者たちは、施設の中にいる限り、何もしなくても、決して満足できるのではないが、1日3回の食事と2回のお茶が与えられるのである。「何を好きこのんで、暑い日差しの下で汗をかく必要があるのか」「それでなくても食事が足りないのに、運動して疲れたらますますお腹がすいてしまう」「それより日陰で見ている方が楽しいわ」　。必死になって呼んでも叫んでも、ほんの十数人しか集まってくれない。

施設のスタッフも、国からの予算は削られ、収容者は日に日に増えてくるので、とても私の活動まで面倒見ていられないといった様子で、口出しもしなければ、手助けもしてくれない。

手を変え、品を変え

しかし、とにかく、怠け者の収容者たちを一人でも多く動かしてやろうと、日本から行進曲のテープを取り寄せて、毎朝「ワム・ダクヌ、ワム・ダクヌ（左・右、左・右）」の号令に合わせて行進させてみたり、ジャンケン遊びを教えたり、フォーンダンスやゲームなど、目先を変え、手を変え、品を変えての毎日である。

ここに収容されている者はほとんど基本的な教育を受けたことのないので、左右の区別ができなかったり、手足を曲げたり伸ばしたりする動作ですらギコチなくて、運動能力は日本の小学生以下のレベルではないかと思われる。しかし、音楽と踊ることは好きなのである。そこで、できなくて元々と割り切って、エアロビクスもどきを始めてみた。すると、けっこう喜んでやるのである。踊っている者も見ている者も楽しんでいるように見える。そんな時はやらせている私自身も妙に楽しい。

朝の体操の後は、曜日によって、バドミントン、卓球、マット運動、バレーボールなどこれまた小人数だが教えている。それと、特別サービスとして、週に一度ビューティ・サロン？を開いてみたら、体操よりもこちらの方が盛況で、いつも長蛇の列ができるほどである。しかし、収容者たちのずるさに対抗するために、体操に来ない者は髪を切ってあげない。体操はきらい、でも髪は切ってほしいなんて、ずいぶん勝手じゃないのというわけで、ささやかな意地悪をしている。しらみだらけの髪の毛を切ってあげるのもけっこう勇気のいることだから…。

それでも、今、私にできること

スポーツは楽しいのだ、汗をかくことは気持ちがいいことなのだ。それを彼女たちに感じてもらいたいと思う。収容所という閉ざされた施設の中で、他に楽しみもなく、あってないような刑期？を過ごしている彼女たち。脱走する者、家に帰ったと思ったらまたすぐ戻ってくる者、同性愛にはしる者、父親のわからない子供を産んでしまう者、病気の者、何も知らず母親と共に連れてこられた子供たち、スリ・ランカの底辺が見える。社会が変わっていかない限

り、この施設はなくならないであろう。

時々、無限に続くメビウスの帯のような、社会に対する疑問や矛盾、そして襲いかかる無力感と戦いながら、それでも今、私にできることは、彼女たちと一緒に汗を流すことしかない‥。それしか、私にはできない。

私の日常生活に関しては、何一つ不自由を感じない。下宿にいる限り日本での生活と何ら変わるところはないが、一歩外に出れば、そこはまぎれもなく発展途上国スリ・ランカである。着任してから5〜6か月が過ぎたころから、私をとり囲んでいるすべてのものに対して、最初のころのような嫌悪感はなくなってきている。心も身体もスリ・ランカに慣れてきたようである。

私の受け持ちである、ガンゴダヴィラ・ハウス・オブ・ディテンションのような施設がいらなくなるような、社会整備がこの美しいスリ・ランカに早くできるように祈ると同時に、そのための協力がぜひ必要であると感じている。

(了)

守屋里美 Satomi Moriya

派遣国：ジョルダン
職　種：体育
隊　次：昭和62年度2次隊（活動期間1987年12月～1989年12月）
出身地：岡山県

初 出：「みんなのスポーツ」1989.8 25（（株）日本体育社）

四季もあり生活しやすい国

日本を出発して22時間、ジョルダンへ向かう途中、エジプトのカイロに降りた。タクシーで町の中心部のホテルまで行く途中に見たものは、ひしめき合って走る車、その間をぬって走る馬車、車の前を平気で横切る人々・。ビルも車も人間もごちゃごちゃに集まった街。すごい、恐ろしい、ただそれだけだった。

カイロは任地ではないが、ジョルダンも同じようなところだろうと覚悟。エジプトで受けたカルチャーショックはかなりのものだった。

そしてやっとジョルダンへ到着。ところが、ジョルダンは空港も立派で、お金をねだってついてくる人もいない。首都アンマンの中心部へ延びるハイウェイは、日本の高速道路並みだ。思わずほっとうれしいため息が出た。

ジョルダンの街は湿度が低いせいか、乾燥していてとてもほこりっぽい。緑は思っていたよりも豊富だ。しかし、建物がすべて石造りなので、何となく暗く冷たい感じがする。良く言えばのんびりしているが、悪く言えば活気が感じられない街という印象が強い。また、ひげを蓄えているアラブ人男性が、どういうわけか私には皆"怖い人"のように見えた。

ジョルダンは、北はシリア、北東はイラク、南はサウジアラビア、西はパレスチナとイスラエルに囲まれた小さな国である。国土の80%は砂漠だが、ジョルダンバレーという海面下300メートルの豊かな土地もある。ここは農業の発祥地として知られているところだ。

アンマンの気候は日本とほぼ同じだが、乾燥しているので夏は日本より暮らしやすい。砂漠の国というと、一年中雨も降らず花も咲かないというイメージがあるが、ジョルダンの場合、雨がまったく降らないのは夏の4月から9月頃までである。冬には、雨はもちろん雪も降るし、積もることもある。そして、春には半砂漠に赤や黄色の花が咲き乱れ、お花畑となる。これには私も驚いてしまった。

職場は身障者スポーツセンター

私は体育隊員として赴任し、ジョルダン身障者スポーツセンターでシティングバレーボールのコーチとして働いている。シティングバレーボールというのは、下肢の肢体不自由者が床に座ってプレーするバレーボールである。

身障者スポーツセンターは、すべて寄付と援助とで成り立っている。センターの本格的な活動は私の赴任とほぼ同じ時期から始まり、完成していたのは体育館だけであった。トラック、卓球場、トレーニングルーム、合宿所はいまだに建設中である。これらの施設も予算ぎりぎりのところで造っているらしく、なかなか予定どおりに進まない。また、体育器具は日本からの援助でだいたいのものがそろっているのだが、施設がまだ完成していないので、ほとんど使われていない。施設が完成するのが本当に待ち遠しい。

日本からの機材はどれをとっても立派なものだが、それだけに、ここの人々が使いこなせるかどうか不安もある。得点板1つにしても、バレーボール用、卓球用、バスケットボール用とざっと見ただけでも3つあるが、電光掲示板なので普段の練習には使いづらい。私は使ってもいいのではないかと思うが、もったいないという気持ちになるのだろう。

着任当時は選手の数も少なく、そのため活動もさほど活発ではなかった。完成したばかりの体育館だけが目立って、何となく不つり合いに感じられたものだ。だが、いまでは選手も増え、何とか軌道に乗ったという感じである。昨年は、ソウルで開かれたパラリンピックに数人の選手が個人種目で出場した。

明るい身障者たち

要請されている技術水準はかなり高いと思うが、選手のレベルはまだまだだ。なかにはストックマンデビルなどでメダルを獲得している人もいるが、それはごく一部である。ディレクターに言わせれば、センターの趣意はメダル獲得ではないが、基礎を固めれば強くなれると思う。

私が指導しているシティングバレーボールはスタートしたばかりで、人材不足などもあってなかなか思うようにいかないが、焦らずに少しずつ計画を進めていこうと思っている。また、練習試合の相手がいなくて苦労したが、1年たったいま、ようやくポ

ランティアとして働いているアメリカ人のチームと試合ができるようになった(彼らは身障者ではない)。

選手たちはすべて男性で、年齢は私とほぼ同じぐらいだ。皆とても明るく、私のメチャクチャなアラビア語でも一生懸命理解しようとしてくれる。以前はアシスタントが2人いて私の英語をトランスレートしてくれていたのだが、徴兵されてしまい、それもかなわなくなった。

言葉がうまく通じないので、話をしてお互いの性格を理解し合うのは難しい。練習を通して理解するようにしているが、怒りっぽい人、すぐにふてくされる人が多く、我慢するということができないようだ。時々けんかになったりもするが、たいしたことではない。

いまではそういったことにも慣れ、彼らが上達していくのを見ていると本当にうれしいと感じる。彼らは決して恵まれた環境の中で生活しているとはいえないが、力強くたくましい。そんな彼らの可能性を見いだすためにも、そして外と接触する機会を与えるためにも、小さな大会、例えば近隣アラブ諸国との対抗試合にぜひとも出場したいと思っている。

私の任期もあと8か月となり、自分の仕事に対して少々焦りを感じたりもするが、自分なりに納得のいく仕事をして、任期を終了したいと思う。

(了)

杉田邦子 Kuniko Sugita

派遣国：シリア
職　種：体育
隊　次：昭和63年度1次隊（活動期間1988年7月～1990年7月）
出身地：埼玉県
初　出：「世界画報」1991.5.10（(株)国際情報社）

主婦や子供たちにエアロビクスを教える

私は一日中働きづめの生活に嫌気がさし、三十路を越したにもかかわらず、転機のつもりで発展途上国の協力活動に参加することを決意した。

任地はシリアで、私の仕事はエアロビクスダンスの指導であった。私にとってこの仕事はやりがいのあるものであったし、大勢のシリア人の主婦や子供たちに囲まれて本当に充実した時間が過ごせたように思う。体育という職種でありながら、エアロビクスを教えることができたことは、とてもラッキーなことだったと思う。

教える上で一番大切なことは"情熱"だ

アラブの世界で女性のスポーツ熱がこれだけ高まっているのは、やはりヨーロッパからの情報の影響である。「やせたい！」という願望は万国共通であり、全世界の女性の悲願といってもよい。過去にあまりダイエットするという感覚のなかったシリア女性も、今、その事の大切さに目覚めつつあるのだ。スポーツで体を動かす事の楽しさを知ってもらい、それを習慣化させることができたらと私は考えた。また自分自身で1日1回何でもいいから毎日できる何かがもてたらどんなに素晴らしいことか。寝る前や入浴後、朝の目覚めの後、食事作りの合間等、ちょっとした努力で意識も変わり、それが長年の効果として現れてくるのだ。そのようなことまで学んでほしいとつくづく思ったものだ。

ダンスだけでなくてもよい。ジョギング、スイミング、部屋の中でできるストレッチ、腹筋、もも上げ、1日たったの20回でも、やらないよりも効果はあるのだ。心がけしだいで体は動いてくるものであり、食べることと同じくらい体を動かすことの大切さを知ってほしいと思った。その思いでひたすらに活動を続けた。

そして私自身、常に身軽な身のこなしのできる指導者でありたいと思い、金曜日以外の毎日、サウナパンツを着て30分のジョギングをした。そして週2回はスイミングをし、年齢よりも5歳くらい若い心身でシリアの人々に指導していこうと思った。人に何かを教える時に一番大切なことは「情熱」だと思う。これは青年海外協力隊に参加する前、日本で指導者として経験した中から私自身が学んだことであった。この「情熱」を忘れずに、エアロビクスダンスを通して、シリアの人々に接していこうと思ったのである。

週3回の練習に多くの人々が参加した

私のエアロビクスダンスの授業は、週3回行なった。シリアの女性は20歳代半ばから脂肪太りする傾向にある。これは脂肪、甘い物の食べ過ぎに原因があるのだ。スポーツだけではやせられないことをいつも強調してきたが、栄養の摂取、ダイエットの方法など、全体から指導しなければ効果はでてこない。しかし週3回の練習には多くの人々が意欲的に参加してくれた。始めた頃は40名ぐらいだった参加者も、そのうちに少しずつ増え出し、70名もの主婦や子供たちがレッスンに通うようになったのには驚いた。

ところが、この多人数を相手に片言のアラビア語で対応するのは、思った以上に大変であった。そこで、とにかく体を動かすこと、まねをさせることでエアロビクスに慣れてもらうようにつとめた。

テンポのよい音楽に乗って身体を動かし、さまざまな動きを展開することには大変興味を示してくれて、まじめに一生懸命に私の指導についてきてくれた。このクラスの目的は健康増進と、痩身願望の主婦たちが、楽しく身体を動かすことなのだ。だからあまり無理をしないでストレッチを中心に心拍数を120ぐらいにまで上げ、エアロビクスのジョギングを取り入れた。そしてマンネリ化しないように布やイスを使ったりして目先を変えながら、興味がそれないように工夫してみた。

積極的に取りくむことが上達の秘訣だ

ところで、ダンスの種類で「アラビーダンス（別名ベリーダンス）」というダンスがある。これは肩や腰を小刻みにふるわすものだが、シリアの女性は幼い時から家々のパーティ等でこれらを訓練しているためか、日本の主婦たちより身体の動かし方、表現、

模倣はとてもうまい。何よりもはずかしがらない点がとても素晴らしいことだと思った。

片言のアラビア語で説明するのだが、結構こちらの言うことを理解してくれるのは、スポーツならではのことと思った。全身を動かしたり、部分的に動かしたり、意識して伸ばしたり、無意識でも伸ばすことができるといった段階にいくまでには約半年はかかってしまう。

スムーズな動きができるようになった時の彼女たちを見た時は、私の喜びは大きかった。シリアでは家族や一族の絆が強く、社会で働く機会を持たず、家族の世話ばかりで一生を終える主婦たちがほとんどなのだ。家の中だけに閉じ込もっている主婦にとって、週3回のエアロビクスは心身ともにリラックスしたことと思う。社会に少しでも顔を出すことによって緊張や忍耐を味わい、心身に刺激を与えることは確かなことだ。それは人をキラキラ輝かせ、若返りや肥満防止にもつながっていくのだ。仕事や趣味にも生きていく上に不可欠なものであり、より充実した日々を過ごすことができるわけである。

そういえばある日のこと、寒い小雪の日だったが、こんな日は誰も来ないと思っていた。ところが約20人もの主婦たちが集まってくれたのでその熱心さに心打たれたことがある。自ら進んで積極的に取りくんでいくことが上達の秘訣なのだ。

何事にも情熱を燃やし続ける精神が大切

体育という職種で何を教えるのか何もわからずシリアに来て、自分の得意なスポーツをレポートして、その結果、婦人たちにエアロビクスダンスを指導できたことは幸運としかいいようがない。まるでスポーツ留学のようでもあった。教えていて気がついたのだが、相手がこちらの指示にすなおに従ってくれたし、私も全情熱を燃やすことができた。レッスンも充実感にあふれていたことは言うまでもない。常に心がひきしまり、1日2回のレッスンは少々厳しかったが、教えられる方の熱意に打たれ、疲れていても「よし、がんばるぞ！」と力が入った。

とにかく、ほとんど娯楽といったものがないこの中近東シリアの地で、主婦たちの息抜きの場としてのエアロビクスに、大いに貢献できたことは大変よかったと思う。何事にも情熱を燃やしてぶつかっていくことがいかに大切であるかを、この協力隊の活動で学んだように思う。これからもこの精神を忘れずにがんばっていきたいと思っている。

（了）

鈴木賢一 Kenichi Suzuki

派遣国：ホンデュラス
職　種：体育
隊　次：昭和62年度2次隊（活動期間1987年12月～1989年12月）
出身地：愛知県

初　出：「学校体育」1991.12.25 （（株）日本体育社）

ホンデュラスでの体育指導

メキシコでの語学研修を終え、配属先の文部省高等師範学校局・高等師範学校サン・ペドロ・スーラ校を初めて訪ねたのは昭和63年2月上旬。前隊員（体育・スポーツ局配属）が器械体操の授業を半期受け持ったことはありましたが、当校への協力隊員配属は新規とあって、不安をもっての顔見せでした。「どのように2年間の活動を送ればよいか」「この国はいったいどんな国なのか、また人は？」などの心配をよそに、初めて訪れたその教室の黒板には、私の受け持つ授業と私の名前がしっかり書かれていたのです。それを見て私の活動に対する期待を強く感じ、同時に不安は消えて"期待に応えるような活動を"という意欲が湧いてきました。

それから1週間後、まだままならぬスペイン語で実技と理論の授業を始めました。実技は体で表現できるだけまだまし。ところが教室内での理論となると、前日に何時間も辞書と首っ引きで準備をするにもかかわらず、50分の授業が終わると汗びっしょり。生徒たちから投げかけられる1、2の質問を理解し、説明するのに時間も体力も消耗してしまうのでした。今思えば、あの「陸上競技コーチ学」を履修していた生徒たちには申し訳ないくらい内容の希薄な授業になってしまったのではないかと反省しています。

自分の価値観を押しつけずに

協力隊活動を始めるにあたり、私は「日本（外国）人である自分が、宗教観も文化も生活習慣も、あらゆる面でまったく違うであろう現地の人に、日本で受けてきた教育を良しとして押しつけるようなことは決してすまい」と考えていました。そして授業を受け持ってから半年間、自分が納得いかないような生徒の行動や生活習慣を見ても、それを自分だけのものさしで計って「これはいけない」とは極力口に出さないようにしていました。

しかし半年後、「時間は必ず守ること」「人に迷惑をかけるような行為はしない」の2点を基本ルールとして守らせるようにしました。このことは、私の協力隊活動の中でも一番試行錯誤したことでしたが、この2点は、日本でもホンデュラスでも、あるいは世界中どこでも常識と呼ばれるであろうと判断したからです。具体的に例をあげると、授業中に口笛を吹く、ジュースを飲みお菓子を食べる、笛を吹いても集まらず勝手なことをして遊んでいる…などで、これらは授業に妨げになる迷惑な行為として、私の授業では減点することにしました。

しかし今考えても、それは決して適切な方法であったとは、本人の私から見ても思えません。なぜならば、充実した授業ができていれば、授業だからと時間どおりに集まり、言わずとも真剣に取り組んでくれていたはずだからです。この点は、自分の未熟さを反省し、今後の課題として受け止めています。

苦労したのは安全性の確保

この学校での一番の問題は環境です。なにせ使用している校舎は借り物で、午前中は小学校として使用されているのです。

体育科が使えるのは、教室が1つとミニバスケットボールコート（コンクリート製）が1面だけ。器械体操の授業ではそのコートに数枚のマットを敷き、陸上の時間は近くの車の通りが少ない道路で走り、水泳は町からバスで40分ほど行った有料のプールを借りる、といった状態です。高等師範学校の体育科としては最悪の条件下なのですが、それでも生徒たちはある程度学んで卒業していくので感心してしまいます。

したがって、授業で一番気を使うのが安全面です。体操では、一つ間違えばコンクリートにたたきつけられてしまいます。ソフトボールでは、いつイレギュラーバウンドするかわかりません。陸上では、2百メートルトラックを走ることすら学べません。しかも、アスファルト上での授業ですからすぐに足腰を痛めます。柔道でも、常にコンクリートの上に敷いたマットがずれないように注意しなければなりません。加えて、移動や教材の設置のために時間は費やされ、ますます進行は妨げられるのです。

このように、恵まれた日本では考えられないほど危険性が大きいため、実技の修得と同時に、安全な補助の仕方、授業の工夫を生徒たちとともに自分も学んできました。

こういった問題が生じる背景には、政府の教育に

関する認識不足、そしてそれにも増して体育の軽視があります。いくつかの小学校で見た風景は、体育の授業は自由時間。ボールを1つ与えて「はい、サッカーでもやっていなさい」と、ハイヒールを履いて日傘をさした先生がそれを見ているというものでした。また、この高等師範学校体育科を卒業しても、まだまだ体育の教師を採用している（この場合、中学、高校）学校は少なく、就職も困難な状態にあります。この国の体育制度が確立し、体育も教育の1つであることを認識してもらわなければ解決しない問題でしょう。

それゆえ、「体育の意義を伝える」ことを当初からの私の目標の1つとし、自分の授業ではことあるごとにそれを伝えてきたつもりですが、さて、100人の生徒のうち、2、3人でもその意を理解してくれたでしょうか。

目標という言葉が出ましたが、私の第2の目標として「ストレッチングの浸透」がありました。これは、前隊員が3年間の活動の中でも重点を置いておられたので、その意を継いで「将来教師をめざす者が修得してくれれば」と、すべての授業に取り入れてきました。そして今、私の受け持った生徒たちは日頃からストレッチングを頻繁に用いているので、この第2の目標はある程度の成果を上げたと自負しています。

しかし残念なことに、A型肝炎による入院によって、終わりに近づいていた授業を最後まで受け持つことができませんでした。それまでもデング熱やランブル鞭毛虫などいろんな病気にかかりはしましたが、元気に生徒たちと授業を進めてきたのに、最後の最後に入院とは、何とも歯がゆく悔しくてなりません。それでも、私がホンデュラスに来て約2年間で学んだものは数え切れぬほどです。特に、日本人だからと肩肘張っているよりも、自分自身をさらけ出し、そして思いやりを持って人付き合いを大切にすることがお互いに信頼し合える近道であり、最も人間らしいことであるということを学びとりました。

（了）

菊池威臣 Takeo Kikuchi

派遣国：ホンデュラス
職　種：体育
隊　次：昭和62年度3次隊（活動期間1988年3月～1991年7月）
出身地：東京都
初　出：「みんなのスポーツ」1990.4 25（（株）日本体育社）

人気スポーツはサッカー

昭和63年5月14日、メキシコでの6週間の現地訓練を終え、期待と不安を胸囲110センチの大きな胸にいだいてホンデュラス入りした。

ホンデュラスで最も人気のあるスポーツといえば、何といってもサッカー。日本のプロ野球と相撲を合わせてもまだ足りないくらいの大人気である。国際大会が始まるころになると、普段は満員のビリヤード場もガラガラになり、試合の放送時間はテレビの前にくぎづけとなる。

大人も子供も、少しでも時間があればサッカーを始め、学校では休み時間、会社でも昼休みに上半身裸になって汗だくでやっている。他人事ながら、午後からの仕事が心配になるほどだ。サッカーのグラウンドは国中どこにでもあり、休日になると色とりどりのユニフォーム（おそらく、食事を何食か抜いて買ったのだろう）を着たアマ選手が大活躍する。

次いで人気があるのはバスケットボールで、サッカーの比ではないが、たいていの学校にバスケットボードがある。しかし、ゴールにアミの付いたものはずいぶん見ていない。リングもたいていさびておじきをしていて、ボードは板がはがれている。そういえば、サッカーのゴールもアミの付いたものはまれだった。

また、ソウル5輪種目でもあった格闘技、テコンドーがはやりつつある。1989年10月には中南米すべての国々の選手を集めた大会がホンデュラスで開かれたし、武道連盟でも力を注いでいるので今後が楽しみである。日本の柔道は、道衣や道場の問題があり、普及はなかなか難しそうだ。それ以外のスポーツとなると、たとえばバレーボールはコートもネットもほとんどないし、ボールすら持っていない学校が多い。

不十分な体育指導体制

こうした用具の不足や不備に加え、指導者にも問題がある。体育の授業といっても、教師がスカート姿で現れ、「サッカーをやりなさい」とボールを1つ渡し、あとは日陰で座っている、というのが多くの学校の教師の実情なのである。

そこで、私の配属先であるホンデュラスの文部省体育局が働くわけである。主な業務は、現職員に対する各スポーツ講習会の開催で、一定期間（たいていは1週間）、各指導主事の作成したテキストを配布し（時には用具を配ることもある）、ルール、基本技術の指導や出張授業を行う。また、各種スポーツ大会の運営も、体育局の重要な仕事の1つになっている。

体育局での私の仕事は、教員再教育のための講習会の開催と柔道の指導である。講習会の内容は主にバレーボールで、それに関連する準備・整理体操、各種トレーニング法など、この国で不足している点を中心に進めている。講習会の開催は、私の協力活動の主目的なので数をたくさんこなしたいが、予算の関係でそうもいかない。

柔道のほうは、まるっきり予定外の活動である。着任したころ、一緒に器械体操を指導していたドミニカ共和国のフランシスコという男に「タケオ、柔道の練習を見に来ないか」と誘われたのがきっかけだった。初日は見学、翌日柔道衣を借りてかれこれ5年ぶりに練習に汗を流し、次回からはセンセイと呼ばれるようになってしまった。最初は余暇活動のつもりだったが、1990年に開かれる中米オリンピックに向けての女子選手養成と普及を武道連盟より依頼され、指導者不足を感じていたこともあって、これは私にしかできない協力活動と思い、スタートした。

畳のない"道場"で指導開始

柔道の「じ」の字も知らない相手なので、初日は下宿のシーツをスクリーンにして映画を見せた。そして、少しずつ受け身などの基本動作に入る。女生徒はシャツにスカート、その下に短パンといういでたちである。

基本動作というのは何でも退屈なものだが、柔道の場合は死につながる可能性も大なので、何度も繰り返す。だが、前方回転受け身などができる前に、嫌になってやめてしまう者が多かった。たまに苦痛を伴うせいもあるが、ホンデュラスの国民は前転すらせずに一生を終える人が大半なのである。

それでも、受け身を覚えてくると必要なものが出てきた・道衣と畳である。私の手元には、私の分を含めて3着。道衣は私との乱取りの時だけ着させ、寝技、

打ち込みはTシャツと制服でやるしかなかった。したがって、服が破れるからとやめる者も大勢いた(私だってやめる)。

当初、生徒たちだけで乱取りをするのは禁止していた。道場（板を組んで綿を敷き、テント地をかぶせた）がとてもお粗末で波打っていたし、綿が寄って板の上はテント地だけになっていた部分もあったからだ。その後、道衣は母校の体育研究サークルの後輩に古着集めをお願いし、お陰で何とかなったが、道場は学校の協力で少しはましになったもののまだ怖い。しかし、他に場所がないので力いっぱい練習した。

8月（1989年）にはニカラグアへ遠征に行き、何年もの経験を持つ選手に勝つ者もいた。そして今は、3か月後に迫った中米オリンピックを目指して、ちょっと厳しすぎるかなと思うくらいの練習を続けている。

（了）

菊池泰雄 Yasuo Kikuchi

派遣国：ホンジュラス
職　種：体育
隊　次：昭和62年度3次隊(活動期間1988年3月～1990年3月)
出身地：北海道
初　出：「みんなのスポーツ」1993.3 6 ((株)日本体育社)

体育科講習会指導員として

私は、メキシコにての6週間の語学研修の後、派遣国ホンジュラスへ向かい、文部省体育局サンペドロスーラ支部体育科講習会指導員として配属されることになりました。

体育局の主な活動内容は、現教員の質的向上および新しいスポーツ・運動等の紹介を目的とした講習会の実施、また、各種スポーツ大会の企画・運営などが挙げられます。しかし、当時体育局は、南地区首都テグシガルパと北地区サンペドロスーラ市の2都市のみの配置で、活動範囲を大変広く、また予算等の関係上、講習会やスポーツ大会は、主要都市周辺にのみ実施されるというのが現状でした。

ホンジュラスの体育事情

ホンジュラスも中米諸国の例にもれず、サッカーが盛んな国です。サッカー場はどんな小さな田舎の村にもありましたが、他のスポーツ施設は、首都とサンペドロスーラ市に国立の体育館と野球場が各1か所設けられているだけでした。

これらの状況では、他のスポーツの発展を望むのは大変むずかしく、国立のスポーツ施設に充実を望むところでした。幸いその翌年1月に中米オリンピック大会の開催が予定されており、各種の競技場が建設中で、これを機に他のスポーツへの理解が高まり、大会終了後にはスポーツ発展のために役立つのではないかと期待しました。しかし、その施設を活用し指導できる人材が不足するのでは、宝の持ち腐れになってしまうわけで、体育指導者（専門の）養成も急務であると思いました。

ホンジュラスには、2つの高等師範学校があり、この国の体育指導者養成機関になっていました。期間は最低5年間で、高等学校卒業以上の者に入学が許可されています。大学も国立、市立等3都市に約10校ありますが、学内に体育学部または体育学科を開設しているところはなく、日本の水準の資格取得をするためには、ブラジル、コスタリカ等の外国へ留学し学ぶことが必要となるわけです。

したがって、中米オリンピック大会の選手強化・指導は招待された外国人指導員と体育局局員によって行われていました。

ミニ運動会をきっかけに

着任1年目は、語学力の乏しさ、習慣の違い、そしてホンジュラスの学校のサイクルが2月始業の11月終業で、私が着任したのが5月ということもあって、思うように活動ができないままに時間だけが過ぎてしまったように思います。また、講習会の方も実施時期が2月～4月だったため、1度も実施することができませんでした。

そんな中で自分にできるものは何かを考えていたときに、児童（幼児）を対象とした陸上大会を実施するという話を耳にしました。

「種目はどのようなものを実施するのか」と質問したところ、4才―40メートル走、5～6才―60メートル走、ボール投げ、立ち幅とびと、何やらスポーツテストのような返答がありました。そこで、児童（幼児）のためのものであるなら、競技会ではなく、もっとお楽しみ会的なものにしたらどうかと提案したところ、私自身が計画し実施するのであれば、協力するという返答がありました。

さっそくミニ運動会を計画し、40メートル走・60メートル走（年齢別）、障害物競走、玉入れ、スプーンリレー、ボール運びリレーの6種目を2日間で実施しました。うれしいことに、この大会は任国の人々に大変喜ばれ、継続して毎年実施したいとの評価をいただきました。また、参加校も15を数え（各校代表15名）、総勢225名の子供たちと楽しい1日を過ごすことができました。

ここに来て、本当に良かったと思ったと同時に、ちょっとした工夫でさまざまな活動ができるのではないかと感じました。

第1回は、玉入れの機材を日本人会から借りましたが、2回目は、各校に見本を持って歩き、玉を各校の先生方に分担して作ってもらいました。将来的には各学校内で手作りの運動会が開催できればと考えています。

講習会は2年目に入ってから、2地区にて各1回、幼稚園と小学校の先生方を対象に実施しました。これらの教員は、高等師範学校出身者よりも、小学校教員養成機関であるノルスル校の出身者が多く、体育

に関する知識や認識が乏しく、体育の時間は休み時間あるいはサッカーの時間であると思っているようです。また、学校内に体育に関する機材がほとんどありませんでした。そのため、講習会は道具をあまり必要としない運動を中心に実施しました。

その他、サンペドロスーラ市内の公立中 高校（モデル校）にて、体育科教師としての活動もありました。この国は保健分野は家庭科の中に含まれるので、実技のみの活動です。担当した学校では、バレーボールのクラブ活動を受け持ち、地区大会（5校出場）では中学男子、高校男子ともに優勝、全国大会でも高校男子の部で優勝することができました。小さな小さな全国大会ではありますが、生徒の心の中に「学生時代にバレーボールに熱中した時期があった」と思い出になるような指導を心がけました。任国の人々は過程よりも結果を重んじます。しかし私のクラブの生徒には、結果だけを考えるのではなく、もう一歩進んでその過程を考えることのできるような人になってくれたらと思っています。

最後に

現在までの活動をとおして、さまざまな問題がありました。時々隊員の間で「任国の人々は我々のことを日本から来たサンタクロース（機材をプレゼントする）のように思っているのではないだろうか」という話が出ます。そのつど私は、我々の活動の中の問題点は、日本社会と比較するところにあるのではないかと思い、日本的な考えを押し通すのではなく、相手国に日本的考え方を調味料のように加えることができたら、満足のできる活動ができるのではないかと考えるのです。

（了）

関谷武司 Takeshi Sekiya

派遣国：ホンデュラス
職　種：体育
隊　次：平成元年度2次隊（活動期間1989年11月～1992年12月）
出身地：兵庫県
初　出：「電気計算」1991.9.12（（株）電気書院）

私が活動するサンペドロスーラ市はホンジュラス第2の都市、周囲の経済の中心地である。標高がほとんど0と低いため、国内1、2を争う猛暑の地、着任時、真上から照りつける太陽の下、「こんな所で運動するなんて自殺行為だな。」と1人つぶやいた。

配属先は国立教育大学サンペドロスーラ分校、本校から見捨てられたかのような極めて粗末な分校である。小学校の設備の中へ大学が入り込み、ほぼ占領している形で、我が体育科が使用できる設備は教室1部屋、小学生用バスケットコート1面のみ、更衣室もシャワールームも、もちろん体育館も無い、器材は日本からの援助でそこそこ揃ってはいるが、毎度授業のたびに場所探しに頭を痛める。陸上競技を例にとってみても、ハードルなどの時は道路に出て一応のことはこなせるが砲丸や、やり投げは道路でするわけにはいかない。あちらこちらの施設をわたり、大学を通して交渉、このような、日本では授業以前の問題にかなりの時間をとられる。何をするにつけ、一事が万事こういった具合で、仕事を計画通り進めるのは至難の技だ。

学生は日本と同様ピンからキリまでいるが、様々な悪条件にもかかわらず勉強を続けている。頑張りだけでも、今の豊かな（それゆえ貧弱な）日本の学生達に比べ賞賛に値するだろう。生活費をかせぐために朝7時から働き、午後から大学にて9時まで講義や実技を受け、それから家に帰り宿題や仕事の準備をする毎日。障害要因を極暑を筆頭に数え上げればきりがないほど、本当によく体がもつものだと感心する。しかし当然の事ながら、こういう条件下では効率の良い、質の高い学習活動は困難である。4年間で卒業できる学生はまずいない。

先日体育局からの要請で小学校教員を対象に「小学校における体育教育の意義」という題目で研修を行った。「たかだか体育のために時間をさいてまで…」というのが学校側の姿勢で、参加者は現場からは20人にも満たなかった。その中で最終日に、体育測定の必要性について話しをした。というのは、ホンジュラスでは、いまだこの国独自の体力測定法が存在しない。したがって、子供達の発育発達の状況、体力カリキュラムの是非を評価する資料を持たないのだ。

現在、この研修をきっかけに、ごくささやかな活動ではあるが、私の学生達と体育局の人間がプロジェクトチームをつくり、体力測定を根付かせようというこの国の今の現状では難しいプロジェクトを協力隊事務所の後押しを受け取り組み始めている。まだまだ統計的にものの言える段階ではないが、体格の割に、走、跳、投の基礎的運動能力の低さ、柔軟性、敏捷性といった体力要素の低さなど、体育授業欠如によると思われる結果が得られつつある。日本の研究レベルから見れば、「いまさら体力測定…・」であろうが、この国では体育にとって、極めて重要な研究課題であり、単純ではあるが、膨大な労力を要する達成困難な仕事である。「つらいけど、体育のために頑張ろう。」「論文書いて大統領に報告しよう。」といつも学生達にハッパをかける毎日である。彼らのこの貴重なボランティア活動により、近い将来この国で体育が市民権を得られる事となるべく、その礎となる事を強く願う。脈絡なく、ここまで書きつずったが、一途上国の現状を知っていただければ幸いである。

（了）

井口昭夫 Akio Iguchi

派遣国：パラグァイ
職　種：体育
隊　次：昭和60年度2次隊（活動期間1985年12月～1989年1月）
出身地：新潟県
初　出：「学校体育」1988.11.25（（株）日本体育社）

イグアス移住地での体育指導

体育指導の協力隊員としてパラグァイに渡った私は、日系のイグアス移住地の小学校で、①学校体育の充実、②スペイン語小学校の先生方の体育教育についての意識向上、③イグアス移住地を中心とした公立諸学校の学校訪問、を主目的に活動することになった。以下、パラグァイの小学校における体育の実情を紹介しよう。

学校体育の充実

基礎的課題である学校体育の充実については、日本で行われている学校体育を基に、パラグァイの現状を考慮したうえで取り組むこととした。そして、子供たちに体育の楽しさをわかってもらいながら、体力・技術・態度を養おうとしたのだが、低学年、特に1年生の体育授業には閉口してしまった。

小学校1年生の体育授業を考える時、運動を教える以前に、集団行動ができること、順番やきまりをキチンと守り、友達と仲良く運動ができること等を身につけさせることが大切である。しかし、実際の授業はというと、まず整列ができず、整列させてもすぐ乱れてしまい、隣の子をたたいたり転ばせてり砂を投げたりで、すぐケンカが始まってしまうのである。男の子が女の子をいじめるのも日常茶飯事である。やっと体育の授業らしきものができるようになったのは、半年くらいたってからであった。

低学年についてはこんな状態だったが、高学年の授業は予定通りに進めることができたと思う。ただ、ここの生徒はゲームを行う時など、日本の子供たち以上に勝敗に固執するように感じた。

先生方の意識向上

体育教育について先生方の意識向上を図ることは、最初の1年に関していえば、子供たちの指導以上の難題であった。なにしろ先生方は皆女性で、しかもほとんどがとても子供たちと一緒に走り回れるような体型ではない。また、協力隊は自分たちの仕事を手伝うために来ているのだという意識が強く、自らジャージを持参して体育の授業に参加し、指導のハウツーを学ぶという姿勢がまったくなかった。

そこで最初の1年間は、半年ほどは黙って様子を見ることにして、その後は折りにふれて意見をしてはみたが、考えが変わる様子はなかった。私が体育の授業をしている間、何もしないでボーッと見ているのである。いや、見学している先生はまだいい。たいていは編み物しているか、用事があるからと外出してしまった。

だが、このままで済ますわけにはいかないので、この問題については2年目に勝負をかけることにし、校長先生からも呼び掛けてもらった。私自信も、こうした先生方に対して「一緒に体育をやろう」「体育授業のハウツーを勉強してくれ」「この移住地にいつまでも協力隊は来ないんだよ。その時どうするんだ」とハッパをかけて授業に連れ出した。その結果、ほとんどの先生方がジャージ姿で授業に出てくれるようになり、時には、私を真似て授業をしてくれたこともあった。さらに、教員リレーチームを作って子供たちと一緒に走ったり、サッカー大会では、低学年のチームに入ってボールを追いかけてくれたりもした。赴任した頃には見られなかった光景である。体育授業に対する考え方も、少しずつ変わってきたようだ。

公立諸学校の訪問

イグアス移住地内の小学校のほか、隣のマジョルキン、オレアリの小学校を何度か回ってみたのだが、体育の時間は遊びの時間、とりわけサッカーの時間になっていることが多かった。だが、実際に体育の授業を考えてみると、私の赴任地イグアスでは日本とさして変わらぬ体育教材が揃っており、それに関した体育授業が行えたが、グラウンドもなく教材として使えるのがサッカーボール1個といった学校では、どのような体育の授業が可能なのだろうかと考えさせられた。何もないところでの体育授業―これも難しい課題だ。

最初の1年間は、なにもかもが模索しながらの授業だった。下手なスペイン語で、よく子供たちを怒鳴りつけたりもした。その効果があったのか2年目からは子供たち自信が体育の時間にはどういう態度で臨むべきかが理解できたようで、服装でも、ほとんど

の子供たちが体育のできる支度をしてくるようになった。

授業内容は準備体操、障害物走、リレー、鉄棒、跳び箱、ドッジボール、走り高跳び、走り幅跳びなどで、雨の日はサロンを利用して、マット運動やリズム体操を集中的に行った。また、グラウンドが雨に濡れて使えない時は、縄跳びの授業もよく行った。縄跳びは縄さえ入手できればどこでもできるので、パラグァイの田舎あたりではとても有用な体育教材だと思う。子供たちも縄跳びが大好きで、休み時間に縄跳びの貸し出しを行ったところ、いつも競争で借りに来ていた。

子供たちは体育の楽しさを知り、先生方もその重要性を理解してくれるようになった。この状態が将来も継続されれば、パラグァイの学校体育は、着実な歩みを見せてくれることだろう。

（了）

江川恵子 Keiko Egawa

派遣国：ペルー
職　種：体育
隊　次：昭和61年度1次隊（活動期間1986年7月～1988年7月）
出身地：埼玉県
初　出：「みんなのスポーツ」1989.6.25（(株)日本体育社）

すべてが不足している状態

ペルーの義務教育制度は小学校が6年制、中学校が5年制の計11年間である。年齢層に幅があり、中学校には11歳から20歳までの生徒がいる。赴任先の中学校は、首都リマからバスで2時間ぐらいのワラルという町にあった。生徒数は2千人余り。かつては女学校だったため、6割が女子生徒である。1クラス40～50人の男女共学。家庭科と技術科が分かれるだけで、すべての授業を一緒に受ける。体育の授業も一緒である。

授業は午前と午後の2部制である。午前の部は7時50分から午後1時までで、3～5年生の高学年が登校。午後の部は1時から夕方6時まで。1,2年生と3年生の一部が登校してくる。教室が足りないため、やむを得ずこのような方法をとっているわけだ。先生方の勤務も午前と午後に分かれている。

赴任して2か月余りは、授業見学に終始した。ペルーの体育授業がどのようなものか、実際に見るのは初めてであり、協力隊員として何をどのように導入していくべきかを考えると同時に、言葉（スペイン語）を使いこなせるようになることが当面の課題だった。

見学期間でいくつかの問題点が目についた。大きなものは3つ。道具が足りないこと、授業時間の不足、そして指導者の知識不足である。学校に備えられていた体育道具は、バレーボール、バスケットボールが各3～4個、跳び箱1台、ハードル台5台、マット2枚、砲丸2個、そして高跳び用の器材。近辺の学校の中ではそろっているほうだったが、実際の授業では男女一緒ということもあり、まったく足りない状況であった。コンクリートコートで使用するためボールの痛みが激しく、また、生徒がサッカーボールのように足で取り扱うことにも問題があった。私の指導するかぎりは、厳しく注意してきたつもりである。

授業時間は90分である。しかし、授業と授業の間に休み時間がなく、1限から6限までの間に20分の休憩が1度あるだけ。そのため、ズルズルと時間に食い込んでしまったり、生徒がトイレに抜けたりして、なかなか全員がそろわない。授業時間になってから体育着に着替え、それからグラウンドに移動してと、正味1時間しかできないこともザラであった。しかも、体育の授業は週に1回しかないから、どうしても時間が足りなくなる。その1回でさえ行事などでつぶれることがあり、そうなると、前回の授業で教えたことをまったく忘れてしまう生徒もいた。

1学年は4学期制で、2か月に1種目という計画で、体操（マット・跳び箱）、陸上（100メートル走・走り幅跳び・高跳び・投てき等学年別）、バレー、バスケットの4競技を行った。指導計画は3月に作成されるが、ミサがあったり3か月半という長い夏休みがあったりで、計画が達成されることはほとんどない。また、計画といっても何を実施するかを細かく書き出すだけで、指導内容・目標などはまったく挙げられない。つまり、これらを考えられる教師がいないのである。体育教師は4人いたが、私と一緒に仕事をした男の先生が大学を出ているだけで、あとは体育の講習会などに出席したというだけの無免許教師なのである。これは体育に限ったことではなく、ペルー全体の傾向である。

体力測定、ダンスなどを導入

活動は、私のほうからいくつかの提案をし、先生方と協力し合う形で進めていった。まず、協力隊事務局に要請してバレーボールとバスケットボールを各10個購入し、その一方で先生方のために体育指導書を作成。また、学校にビデオの機材があったので（ただしテープはなく、使い方も知らないという）、これを使わない手はないと、すぐ日本の陸上、バレーボール、体操などのテープをダビングして先生方と生徒に見せ、正しいルールやフォームを説明した。

新たに取り入れたプログラムもいくつかある。まず、ペルーの古い指導書（教育省発刊）には載っていたが、実際には行われていない体力測定に取り組んだ。年2回、最後の年には1回、各学年1クラスずつ、5学年を対象にして実施。種目は握力、反復横跳び、上体反らしの3つにしぼり、器材は協力隊の事務所から借りることにした。体力測定は先生、生徒とも初めてのことで、1回目の数値は日本の子供と比べものにならないくらい低かったが、2度目のときは上昇していた。

また、女子のダンス授業がないので、約3か月間、希望者に対して指導した。カセットテープで音楽を

流し、リズム系、エアロビクス、簡単な創作ダンスまでできた。

さらに、準備体操としてなわとびを導入した。前跳び、後ろ跳びを基本に、走りながらやらせてみたり、女子には8拍子リズムをいくつか組み合わせて流れのあるリズム運動もさせた。一緒に授業をしていた先生も、非常に興味深く指導にあたってくれていた。

このような体育授業とは別にバスケットクラブをつくり、男女20人ぐらいずつを集めて週2〜3回、空き時間を利用して指導することもできた。これは赴任してすぐ始めたので、任期終了の頃には子供たちと離れ難いぐらいの関係になるほど有意義に過ごせた。この活動により、時間にルーズな習慣と飽きやすい性格をいくらかは克服できたように思う。これぐらいの密度で体育の授業が実施できれば体育の意味があるのだが、お国柄、これ以上のことは当分望めない状況である。

それでも、ペルーの子供たちは底の薄い靴だろうとおかまいなしに、小石がゴロゴロしているグラウンドを走り回っている。日本の子供たちに比べて、素直で元気だという印象だ。ボールを蹴るな、時計を外せと口うるさく言っていても、学校が終わって外で会えば、「先生、ケイコ」と呼んでくれて、気軽にあいさつし合ったことが懐かしい。習慣の違いなど、頭を抱えることもずいぶんあったが、こちらの方法でやっているときは、相手も頭を抱えたことだろう。

ペルーでの2年間、相手国に対してどれだけのことができたかわからないが、自分にとっては大きな価値あるものであった。さあ、もう一度授業をしようと思ったときは、すでに帰国の日を迎えていた。風のように過ぎ去った2年間であった。

（了）

Japan Overseas Cooperation Volunteers

陸上競技・体操競技・水泳

〈陸上競技〉年度別・国別派遣実績

国名	88年度まで	89年度	90年度	91年度	92年度	93年度	94年度	95年度	96年度	97年度	98年度	総計
中国	1	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	2
ラオス	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	1
モルディヴ	2	0	1	0	1	0	1	0	0	1	0	6
ネパール	2	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	2
フィリピン	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1
スリ・ランカ	3	0	2	0	0	1	0	0	0	0	0	6
〈アジア地域〉	9	0	3	0	2	1	1	1	0	1	0	18
ジョルダン	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	1
モロッコ	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	1
スーダン	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	1
シリア	12	1	1	1	1	2	2	0	0	0	0	20
イエメン	0	0	0	0	1	1	0	0	0	0	0	2
〈中近東地域〉	12	1	2	3	2	3	2	0	0	0	0	25
ジンバブエ	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	1
〈アフリカ地域〉	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	1
ボリヴィア	0	0	0	0	1	0	1	0	0	1	0	3
コスタ・リカ	1	0	0	0	0	1	1	0	0	0	0	3
エクアドル	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	1
エル・サルヴァドル	7	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	8
グァテマラ	0	1	0	1	1	0	0	0	0	0	0	3
ホンデュラス	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	1
パナマ	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	1
パラグァイ	1	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	2
ペルー	3	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	3
〈中南米地域〉	12	1	0	3	3	1	2	2	0	1	0	25
サモア	0	1	1	0	0	0	0	0	0	0	0	2
ヴァヌアツ	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	1
パラオ	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	1
〈オセアニア地域〉	0	1	1	0	0	0	1	0	0	1	0	4
合計	33	3	6	6	8	5	6	3	0	3	0	73

〈体操競技〉年度別・国別派遣実績

国名	88年度まで	89年度	90年度	91年度	92年度	93年度	94年度	95年度	96年度	97年度	98年度	総計
バングラデシュ	0	0	1	0	0	0	1	0	1	0	0	3
中国	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	1
インド	4	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	4
マレイシア	5	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	5
モルディヴ	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	1
ネパール	7	0	0	0	0	0	1	0	0	1	0	9
フィリピン	6	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	6
スリ・ランカ	2	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	2
タイ	1	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	2
〈アジア地域〉	25	0	1	0	0	2	3	0	1	1	0	33
ジョルダン	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	1
モロッコ	6	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	6
シリア	3	0	1	1	0	1	1	0	1	0	0	8
チュニジア	4	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	4
〈中近東地域〉	13	0	1	1	0	1	2	0	1	0	0	19
ボリヴィア	2	0	0	0	0	0	1	0	0	1	0	4
コロンビア	2	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	2
コスタ・リカ	8	0	1	0	0	0	2	0	0	0	0	11
ドミニカ共和国	3	1	0	1	2	1	0	0	0	0	0	8
エクアドル	0	0	0	0	1	1	0	0	1	0	0	3
エル・サルヴァドル	7	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	8
グァテマラ	0	0	1	0	1	0	1	1	1	0	1	6
ホンデュラス	2	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	2
ジャマイカ	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	1
パナマ	0	0	0	0	2	0	1	0	0	0	0	3
パラグァイ	2	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	3
ペルー	1	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	2
〈中南米地域〉	27	2	2	2	6	3	6	1	2	1	1	53
合計	65	2	4	3	6	6	11	1	4	2	1	105

〈水泳〉年度別・国別派遣実績

国名	88年度まで	89年度	90年度	91年度	92年度	93年度	94年度	95年度	96年度	97年度	98年度	総計
バングラデシュ	1	1	1	1	0	0	0	0	0	0	0	4
カンボディア	3	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	4
中国	2	0	1	1	0	0	1	0	0	1	0	6
インドネシア	0	0	0	0	0	1	0	0	0	1	0	2
マレイシア	6	0	0	0	0	0	0	0	0	2	1	9
モルディヴ	2	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	3
フィリピン	4	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	4
スリ・ランカ	1	0	1	0	1	0	0	0	0	0	0	3
〈アジア地域〉	19	1	3	2	1	1	2	0	0	4	2	35
エジプト	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	1
ジョルダン	1	1	3	0	0	0	1	0	0	0	0	6
モロッコ	8	3	2	4	0	0	0	1	0	0	0	18
シリア	0	2	1	0	1	2	0	0	0	0	0	6
チュニジア	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1
〈中近東地域〉	10	6	6	4	1	2	1	1	0	1	0	32
ケニア	0	0	0	0	1	0	0	1	0	0	0	2
セネガル	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1
ジンバブエ	0	0	0	0	3	1	1	1	0	0	0	6
〈アフリカ地域〉	1	0	0	0	4	1	1	2	0	0	0	9
ボリヴィア	2	0	1	0	0	0	2	0	0	0	0	5
コロンビア	1	0	1	0	0	0	0	0	0	0	1	3
コスタ・リカ	5	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	6
エクアドル	0	0	0	0	0	1	1	2	0	2	1	7
エル サルヴァドル	7	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	7
グァテマラ	0	1	1	2	0	2	0	1	0	1	0	8
ホンデュラス	5	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	6
ニカラグァ	0	0	0	0	1	0	0	1	0	1	0	3
ペルー	2	2	0	0	0	0	0	0	0	0	0	4
〈中南米地域〉	22	3	3	2	1	3	5	4	0	4	2	49
パラオ	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	1
〈オセアニア地域〉	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	1
合計	52	10	12	8	7	7	9	7	0	10	4	126

折口文宏 Fumihiro Origuchi

派遣国：グァテマラ
職　種：陸上競技
隊　次：平成元年度1次隊（活動期間1989年7月～1992年3月）
出身地：広島県
初　出：「オリンピアン」1992.11.14（（株）ベースボールマガジン社）

何の気なしに受けた協力隊だった

大学4年生の秋、卒業後の就職先をどうしようかと考えていたところ、友人から協力隊募集の事を聞き、説明会だけでもと思って出掛けてみることにしました。説明会での話を聞いてみると職種は150種以上もあり、力を試すつもりで試験を受けたのです。結果的に合格はしましたが、実のところ協力隊の活動内容など具体的な知識はほとんど無く、参加するに関してはかなり迷いました。しかし、「自分が今までしてきた事を生かしていける活動ではあるな」という気持ちもあり、自分なりに協力隊の活動形態等多くの事を調べて納得し、活動に参加する事に決めたのです。

グァテマラは住みやすい!

私が派遣されたのは、アメリカ大陸の中央部に位置する、北海道と四国を合わせたほどのグァテマラという国でした。

グァテマラの人々はスペイン語を話し、生活習慣も日本とは全く異なります。例えば、他人の物は自分の物といった考え方や約束の時間を平気で破るなどなど、当初は戸惑う事ばかり。

しかし、首都であるグァテマラ市内は、普通の生活をする分には何の不自由も無く、とても暮らしやすい所です。例えば現地の食事をおいしく食べられるばかりでなく、日本食レストランなどがあって懐かしい食事を味わう事もできます。このように市内はかなり開けていますが、やはり治安の悪い地域もあり、注意して行動しなくてはいけません。グァテマラで生活していく上で文化、風習の違いはあっても、特に困った事はなかったので、途上国に来たといった実感はありませんでした。

最初は生徒たちの成績が良くなくて……

ところで、私はグァテマラ・オリンピック委員会・陸上競技連盟に配属され、ナショナルチームの跳躍コーチという立場で活動していました。赴任して1年ほどの間には、中米ジュニア陸上競技選手権、中米オリンピック、さらに中米・カリブユニバシアードといった大会があり、私は選抜選手に対して跳躍種目の走幅跳・3段跳 走高跳、場合によってはリレー種目などの指導を行っていきました。

これらの大会では、チーム全体としては好成績が残りましたが、私が担当する跳躍種目に関してはグァテマラで最下位と、他の種目が高いレベルを保っている中で弱さが目立つ結果となりました。

そこで、私は男子短距離2名、男子走幅跳・3段跳2名、男子走高跳1名、女子7種競技1名、計6名を受け持ち、集中して指導する事になったのです。選手の練習時間は午前7時より3名、午後4時より3名。1日1回数時間の練習で競技能力の向上を目指すために、練習計画を綿密に立てて質の高いものにしていきました。

赴任当時の目標のひとつとして、東京で開催される世界陸上競技選手権大会に出場できるよう、選手の強化を図るという事がありました。とはいえ、現状ではほとんど不可能。まずは、その年の8月に開催予定の中米・カリブオリンピックを目指して練習を重ねていきました。しかし、予算等の都合がつかないという事で延期になり、11月にメキシコで開催されるというのです。このような状況では、選手の士気に悪影響を与えないとも限りません。活動を順調に進行するには、とても難しい状況と思えました。ところが、選手達はこうした事に慣れっこのようで、私が心配していた程落ち込むこともなく、コツコツと練習を続けて着実に成果を上げていったのです。

そして、これは私の印象に一番強く残ったことですが、ある選手の頑張りが全員の気持を高揚させていったのです―。

その選手は18才の男子で、当初は100m走で15秒、走高跳でも1m40cmという素人同然のような選手でした。記録は決して良いものではなかったのですが、ヤル気だけは人一倍あり、毎日練習を熱心にこなしてみるみる成果を上げ、ついにはグァテマラの走高跳の代表選手にまでなりました。この事は、私以上に他の選手達に大きな影響を与えたようです。それからは、みんなが死にものぐるいでハードな練習をこなしていきました。おかげで跳躍種目のレベルはかなり向上し、最終的にはオリンピック出場へもう一歩という選手まで現れました。これで私の活動も

やっと認められたような気がして、うれしさもひとしおというところです。

ムダではなかった協力隊の活動

スペイン語が未熟だった私にもいろいろと問題はあったと思いますが、選手達はよくついてきてくれたなと、今でもあの頃を振り返っては感謝の気持ちでいっぱいになります。選手達に対して、2年間ではできなかった事も多く、これで良かったのだろうかという気持ちもあります。しかし、自分のしてきた活動は何も無意味な事はひとつも無かったと、今でも自信を持って言えます。

目立たなくても確実な仕事をしていけば、きっと報われるという事が分かっただけでも協力隊の活動に参加して良かったと思います。この2年間は、私にとって忘れられない貴重な思い出となりました。

（了）

盛重浩一 Koichi Morishige

派遣国：パラグァイ
職　種：陸上競技
隊　次：昭和62年度1次隊(活動期間1987年7月～1990年7月)
出身地：福岡県
初　出：「海外新聞」1990 9.25 ((社)日本海外協会)

陸上競技の普及に

青年海外協力隊・昭和62年第1次隊で南米パラグアイ国へ派遣された盛重浩一隊員（陸上競技）からのレポートを入手したので紹介する。

＊　＊　＊

南米の国パラグアイは、春をむかえようとしていた。スペイン植民地時代の名残を残し、きちんと区画整理された主都アスンシオンは、緑の多い美しい閑静な印象を与えていた。

私はこの主都で、当国唯一の体育教員養成学校である、ＥＮＥＦ（国立体育師範学校）に配属され、陸上競技の普及と発展の為に活動中である。

当国の中で、体育とはレクリエーション的なものであり、教師が木の下でテレレ（数人でお茶のようなものを回し飲みする習慣）でもしながら、子供たちがサッカーを始めとする球技をして、遊んでいるのを見ているといった感じのものでしかない。陸上競技という視点から考えると、学校体育という制度は殆ど整っておらず、体育の時間は日本の休み時間のようなものである。遊びの中心ともなるサッカーは、この国の中心的スポーツであり、新聞をみても、スポーツ欄は殆どサッカー関係の記事でうめつくされており、一昔前の日本の野球中心のスポーツ欄を見ているようであった。その為か、陸上競技に関心を示す人々は、殆どがサッカーを基準にその練習法の一環としてみているのであって、陸上競技を専門とした競技者は、ほんの一握り程度である。しかしこの一握りの人々が、又、E·N·E·F の生徒一人一人がパラグアイ陸上の普及と発展に、大きく貢献してくれるものと期待している。

当初、数人の生徒を集めて、個人的に陸上競技の指導を始めて困ったのは、パラグアイ人の時間や約束に対するルーズさであった。パラグアイ時間というのは、約束時間より30分から1時間遅れるのが普通である。又、約束しても守るとは限らない。通常雨が降れば、交通をはじめ、色々な活動機関が停止し、約束も白紙にもどされるようだ。最近は、アスファルト道路が整備、配置され、かなり改善されつつあるが、人々の中には、習慣としてルーズさが残ってしまったと考えられる。

1年の約3分2が夏と言われるこの国では健康保持のうえから、シエスタと言って昼寝をする習慣がある。パラグアイに来た当初は、何故この時間を利用して、陸上競技者たちが練習をしないのか疑問に思ったが、ここで生活するうちに理解できた。暑い時には40℃を超えることもある酷暑の下では、練習をやりたくてもできないのだ。なるほど、習慣とは、それなりの意味があるのだと痛感したのを覚えている。

この国の衣食住についてみると又面白い。服装は、日射しを避ける為か白系統のものが多く、カッターシャツを着ている人でも、上まできちっとボタンをとめている人は少ない。Ｔシャツを着ている人は、袖のないものか、袖をまくって着ている。女性もみな涼しげな格好をしているという感じである。食事につていは、肉が安いので、殆ど毎日肉類を含む食事をする。又、パラグアイ人はかなりの甘党であり、当国で売っているジュース類なんか、我々日本人には甘くて飲めない。喫茶店でコーヒーを飲んでいるのを見ても、砂糖をかなり入れて飲んでいる。その為かここの女性のお尻なんか日本女性に比べて大きく、2段3段に脂肪がついている感じである。住いについては、土壁に通気性を考慮した窓が多くあけてある。それでも夏になると熱帯夜が続く事もあり、慣れていない私は、屋根の上にマットを持ってあがり、そこで夜を過ごすなどの工夫をしている。又、この国は雨が多いが、不思議と傘をさす人が少ない。雨が降り出しても平気で外を歩いている。日本人であれば、雨やどりの場所を探して走りまわるであろうのに。

話を元に戻すが、当国の陸上競技のレベルは、記録的にみても世界に50年は遅れていると言える。とはいえ、現在少しづつながら若い芽が育ち、国内のレベルを向上させている。それには我々青年海外協力隊をはじめ、各国協力事業団の専門家コーチが、新しい技術知識の伝達に貢献した為だけではなく、ソウルオリンピックへの陸上競技での初参加と、国内初のオリンピックへの陸上競技での初参加と、国内初のオリンピックのテレビ中継放送も、かなり国民に、又、競技者に影響を与えたのではないかと思う。

現在私はE·N·E·F·を中心に、協力活動に従事している。パラグアイ国全体の陸上競技の普及と発展を考えるならば、まずその指導者の育成にあたる、体育学校の基盤を固めなければならない。その為に当校で活動しているのであるが、最近別の対象への協力にも力を入れだした。当国に住む日系人移住者たちである。近年パラグアイでは、日系人移住の50周年をむかえた。聞くところによると、現在の日系人総数は7千名を超えるそうである。それでも隣国の日系人数に比べればかなり少なく、体育事情も概して良くない。それでも一部の人の努力により、体育連盟が発足し、各種スポーツの普及に努めている。最近日系人による陸上競技大会を開いた。移住50周年記念に際しても、1度小規模ながら開いたので、今大会は2回目である。この大会で私は審判長を務め、大会にむけての選手育成にも務めたが、素人ばかりで全体的にレベルが低いとは言っても、いい素質を秘めた人が中にはいた。その後、日系人体育連盟の人と話の場をもち、日系人パンアメリカン大会（全米大陸に住む日系人の大会）に、陸上競技でパラグアイから初めて選手を送る事になった。大会はペルーで開かれる為、交通費がばかにならず、4人の選手しかつれていけなかったが、選手の頑張りの結果、銀メダル1つに、銅メダル3つを取る事ができた。同時にそれは、パラグアイ在住日系人の陸上競技に対する関心を高め、又、自身にもつながった事と思う。現在は、日系人を中心として駅伝大会を開く事で、パラグアイ人たちにも参加させ、スポーツを通じた、日系人とパラグアイ人の交流を計画中であり、又、ブラジルで行われているような移民オリンピック（世界各国からの移住者によるスポーツ大会）と合わせて、実現できればと切に願っている。

陽気で明るい国色を持つパラグアイでの活動は、楽しく、人間関係もさっぱりしていて気持ちがいい。これからこの国もどんどん発展していく事だろう。それに通じて、実に将来が楽しみなパラグアイの陸上競技事情である。

（了）

笹川泰利 Yasutoshi Sasagawa

派遣国：ドミニカ共和国
職　種：体操競技
隊　次：平成元年度1次隊（活動期間1989年7月～1992年7月）
出身地：岩手県
初　出：「学校体育」1992.5.25（（株）日本体育社）

メレンゲとドミニカの子供達

ドミニカは中南米に位置する赤道に近い暑い国だ。東西に走る3つの山脈があり、2000メートル以上の峰々が立ち並ぶ雄大な大地である。サトウキビ、精糖、精ミツ産業が主で、精糖所は全国に16か所存在する。

さて、私のドミニカでの体操競技、ナショナルチームの監督としての協力隊活動を紹介しよう。首都であるここ、サントドミンゴの専用体育館はすべての器具が常設され、24時間の使用が可能である。あくまで使用可能というだけで、練習はというとなかなか思うようにいかない。まず水銀灯の日常茶飯事的な停電。気温と湿度が高いせいか各器具の老朽化が激しい。そして雨漏りがひとつの原因ではあるのだが、床が数か所沈んできている。雨期に降る、日に1度のスコールで体育館中が雨漏りの洗礼を受けるので、練習時間にならないと、どの器具まを使えるかわからないなど数多くの問題を抱えている。

また常に頭を悩ますのは安全面の確保である。試合用の器具はあるのに、練習用危険防止のためのマットが足りない。過去に骨折した例もあり、選手の恐怖心を除きつつ有効な練習方法を探すのが、サントドミンゴの指導には欠くことができない。

練習方法であるが、集中力を持続させるには、ひとつの工夫がある。日本であれば叱咤激励するのであろうが、ドミニカでは通用しない。それではどうするのかというと、音楽を流し続けるのである。ドミニカにはメレンゲと呼ばれる2拍子の音楽があり、ドミニカを代表するもののひとつである。"メレンゲ"これ以上のスタミナ、ビタミン源はないと思う。老若男女を問わず音楽を愛し、踊りを好む。時と場所を選ばずメレンゲを媒体としてすべての人を友達にしてしまう。数々のFM局は常にこの音楽を流し、バス、タクシーは大音量を上げている。言い換えればメレンゲはドミニカの生活の一部であり、生活のリズムでもある。

練習中「ガンバレ」と一言かけてやるよりも、ラジオのボリュームを上げた方がより効果的だ。順番待ちの時間は、決して他人の練習を見ることは強制していないし、その間、彼達は思い思いの行動をとっているが、いざ自分の番が来ると頭の中は完全に切り替えられ、すさまじい集中力を発揮し、こちらから「やめ」の指示をしないと、いつまでも反復練習をすることがある。選手の体調の判断もこの待ち時間で見分けがつく。黙って聞いている時には要注意、練習強度を下げる必要がある。逆に2、3人の順番待ちでも、マグネシウム（滑り止め）を手に、ステップを踏んでいる日は絶好調とみて良い。こんな日は思い切った練習方法をとり、以前どうしてもできなかった技、危険度の高い技をやらせてみる。すると不思議なことにいとも簡単にやってのけてしまうのである。1回できたらしめたもの、あとはメレンゲをバックに誉めて誉めて誉めまくれば反復練習を飽きずに行い、いつしか自分の技として身についてしまう。気分屋、お天気屋と言えるかもしれないが、ここではこうした精神面を操り、実技指導していくことが不可欠である。

精神的な面はもちろん大切であるが、選手の心理状態をより良い状態でより強く作用する環境作りが必要であり、選手の競技能力を最大限に引き出すにはドミニカ人の性格、おかれている立場、演技しようとする種目などきわめて多くの要素がかみ合っていることに注目しなくてはならない。

この国の子供達の運動能力、筋力の低さは日本人の子供と比べると、確かに劣っているようだ。これはドミニカの学校体育の時間が少ないことが大きな原因と思われる。しかし、練習を重ねることによる彼達の能力の伸びは日本人の比ではない。

練習に練習を重ねた結果、1990年4月の全国大会では上位を占め、名実共にナショナルチームとしての実力をつけた。1990年9月の全米ジュニア大会では種目別跳馬で7位、また、11月開催になった4年に1度の全米オリンピックでは、初めて規定、自由の各演技を行い総合22位、種目別床は9位となった。国際大会への出場、好成績がドミニカの体操の存在を知らせることとなり、アメリカ、キューバからの試合への招待、フランスへのスポーツ交流などの話が持ち出されるようになった。

また、それに伴い体力向上、体質改善の観点からドミニカの人達に不足しがちな野菜を多く食べさせようと、いろいろな工夫をして料理を作ってみた。今では人参、玉ネギ、ピーマン、キャベツとほとんど抵抗なく食べている。現在、数人の生徒達と合宿

生活のような暮らしをしているので、彼達の生活パターンがだんだん私に似てきている。例えば食後の後片づけ、歯磨き等、私が何も言わなくてもいつの間にか彼達の習慣になっている良い点がある。しかし、同様に悪い点も似てきているのかと思うとちょっと怖い‥。また、親元を離れて生活しているためか同年代の子供に比べ、だいぶしっかりしているようだ。

体操は個人競技であるがゆえに「自信」が大きな意味を持ち、少しでも良い所を探し、「うまくなった」と声をかけてやることが自信につながっていく。メレンゲをバックに誉めまくり、自信を持った私の教え子はついに世界選手権出場レベルにまでなった。

初めのほんの小さな自信が、また自信をいっそう強めていく。メレンゲというひとつの要素がプラスに作用すればそれは非常に大きな戦力として使っていくことができる。私の教え子は今日もメレンゲとともに明るく練習に励む。

（了）

米倉美子 Yoshiko Yonekura

派遣国：コスタ・リカ
職　種：水泳
隊　次：昭和61年度3次隊（活動期間1987年3月～1989年3月）
出身地：神奈川県
初　出：「海外新聞」1990.6.25（(社)日本海外協会）

協力隊に参加して

3カ月の合宿研修と5週間のメキシコでの語学研修を終え、派遣国コスタリカでの2年間の生活が始まった。

配属先は文化スポーツ省の技術部指導員としてであり、言ってみれば国家公務員である。活動内容においてはまずシンクロ指導者の養成、地方への普及、教本の作製、そしてシンクロ協会の設立、これらを踏まえたうえで、さらに定期的な年少者競技会の開催が目的だった。

そしてその対象者といえば、既に20歳を越えている者がほとんどで、その中でもレクレーション的にシェイプアップに来ている者や、指導者を目指している者などさまざま、さらに小中学校で水泳教育を受けていない年少者達という状況であった。そして、ここが私の2年間の協力隊としての活動の場であった。4～5年間もシンクロに携わっていながら、基本さえしっかりとできていない。それにもかかわらずプライドが高く、自己主張の強い彼女たちを指導者として育てていくことは、1にも2にも忍耐が必要であった。それ故数えきれない程の問題はあったが、一応15名のシンクロ指導者が育ち、彼女たちと小学生を巡回し、こうして2年続けてコスタリカ初の年少者シンクロ競技会を開催できたことは、とてもうれしく思っている。

協力隊に参加すること、イコール海外で生活できること、このことはかねてからの私の夢だった。専門学校卒業後、希望通りの会社に入社し、何不自由ない毎日、恵まれた環境の中での1年はあっという間に過ぎていった。しかし2年目になったあたりから、私の中では。「何か違うんじゃないか」という、クェスチョンマークが見えてきた。そして、協力隊の説明会に自然と足が向いていた。そして今、任期を終えて、つくづく協力隊に参加してよかったと思っている。限られた時間の中でいろいろなことに挑戦できる機会は一生のうちでそんなに多くはないだろう。協力隊は、そんな機会を与えてくれるのではないだろうか。

（了）

北野日士 Akashi Kitano

派遣国：エル・サルヴァドル
職　種：水泳
隊　次：昭和46年度3次隊(活動期間1972年3月～1976年3月)
出身地：鹿児島県

初　出：「みんなのスポーツ」 1991.10 25 （(株)日本体育社）

協力隊の考えるスポーツの国際交流

近年国際交流という言葉が頻繁に聞かれるようになり、耳にも快い響きとなってきているが、はたして実態はどういうことだろうと考える時、私自身明快な答えにたどり着くことができない。スポーツを通しての国際交流と言っても、どのようなレベルでの交流を指して言うのか。狭義的には個人あるいは団体レベルでの親善試合等を通しての人的交流を指すであろう。経済大国と呼ばれる日本と経済立国との間でのこのような交流は可能であろうし、また協力隊の派遣されている開発途上国と称されている国の人々を日本に招待しての交流は可能であろう。しかし、隊員が派遣されている国が国際試合等に出場する選手ではなく、一般の人々を国際交流という名目で、日本あるいはその他の国々に派遣することは経済的に不可能であろう事を、我々日本人は認識する必要があるのではないか。

私自身は中南米の経験しかないので東南アジア、アフリカ、中近東の派遣国に関しては一概にこうだとは言えないが、大半の国々がその歴史の中に植民地であったという共通点をもっている。またスポーツについて言えば国技を除いてはサッカー、バスケット等が盛んである点が共通している。経済的に余裕のある人々はクラブに属し、指導員もおり、今でこそ日本でも一般的になってきたテニス、ゴルフ、水泳等、その他金と場所の必要なスポーツを享受しているが、経済的にひっぱくしている人々はスポーツを楽しむことすら困難な状態である。それでも場所とボール1個があり、5～6人も集まればフルビート(ミニサッカー)に近い形でボール遊びに打ち興じている。物質的には恵まれているが、反面人間として大事なものを失っていると思われる日本人の目にはこのような光景がどのように映るか。

◇

隊員、特にスポーツ隊員の派遣先は公共機関である場合が多い。ここもご多分に漏れず予算不足で施設、器具等が貧弱であることは言うまでもない。このようななかでスポーツ指導のかたわら、在籍する機関内での予算獲得にも努力しているのが現状である。本来、協力隊事業そのものが開発途上国と称される国々へ隊員を派遣し、その国の発展の手助けをするという主旨なので、派遣当初より隊員と現地の人々との交流はあるわけである。しかしながら、それぞれの国情、文化、歴史、習慣等の違いにより当初からすべてが順調に運ぶわけではない。今までにさまざまな機会を通して、日本流を押しつけてはいけない、相手を理解しその上で何事にも対処しなくてはいけない、と言われてきている。冒頭に述べたように、個人あるいは団体レベルでの試合等を通しての交流は、試合をしました、楽しかったです、相手のことが少し理解できました、またやりましょう、といった形式で、相手、国、歴史、文化、習慣等を理解しなくてもできる一過性の交流に終わる場合が多い。その点、隊員はいやおうなしに2年間は現地の人々とつきあわなければならないわけで、相手を理解し、また自分を理解してもらう努力なしには活動を続けることは不可能である。

また、スポーツ隊員以外の隊員のスポーツでの交流が果たす役割を忘れてはならない。彼らは自分たちの専門職種の指導のかたわら、学生時代あるいは職場で体得したスポーツを地域の人々に教えることにより、地域の人々とのつながりをいっそう深めていっている。手前みそではあるが、このような点から言えば隊員は真の意味での交流を深めていると言って良いのではないか。今後もこのような形で協力隊活動は展開されていくものと思われる。

現在、隊員の派遣されている国々のスポーツは派遣当初と比較すると底辺の拡大、種目の多様化、水準のアップは著しいものがある。このような面から見ても、スポーツ隊員はその専門職種はおろか他のスポーツにおいてもさまざまな点で勉強し、努力しなければならなくなっているし、今後ますます現地の人々の活動のなかに積極的に参加しなければならなくなってきている。

◇

協力隊派遣以来すでに25年以上たち、派遣国も51か国にのぼる。しかしながら、派遣国の国内事情により隊員の一時派遣中止、派遣中止となった国、つい最

近では読者の皆様もご存じのとおり、緊急一時帰国を余儀なくされたペルー共和国、等がある。一方、派遣が再開された国もある。昨年、私の派遣国であったエルサルバドルへ数年ぶりで立ち寄り、体育師範学校の卒業生とも話す機会があった。我々が働いていた師範学校はすでになく、現在はその規模を縮小して青少年スポーツセンターで体育教師の養成を継続していた。11年におよぶ派遣中止は長く、当時の隊員が持ち込んだ機材は老朽化が進み、特に柔道畳、マットはぼろぼろとなり使用に耐えなくなっていた。卒業生から何とか日本の援助が受けられないだろうかと相談もされた。彼らが地道に体育の継続に努力してきたことを思うと何とかしてやりたいと思うが、個人の立場ではどうしてやることもできなく今でも悔しい思いをしている。これはスポーツのみでなくエルサルバドルをはじめとする派遣中止になった国で協力隊活動をしていた隊員は私だけでなく皆、常に気にかけていることだと思う。派遣国の国内事情により派遣中止となったわけであるが、国交断絶という状態ではないので、在外公館を通してせめて現場で必要な器具等の援助は協力隊の施策として継続できないものかとこのところ考え続けている。

華やかな場面に出ることはないが、地道に手助けをしていくことが協力隊の国際交流と言えるだろう。

（了）

林　千郷 Chisato Hayashi

派遣国：グァテマラ
競　種：水泳
隊　次：平成元年度1次隊（活動期間1989年7月～1991年7月）
出身地：兵庫県
初　出：「みんなのスポーツ」1991.6.25（(株)日本体育社）

中米の美しき国、グァテマラ

グァテマラは中央アメリカ北西部の共和国で、政治、経済はまったくアメリカ寄りの体制といえます。言語は英語ですが、地方ではスペイン語が使われています。人種は60%がインディオ、40%が混血です。国境はメキシコ、エル・サリバドル、ホンジュラス、ベリーズと接し、太平洋、カリブ海に臨んでいます。気候は熱帯に属していますが高原は温暖でとても住みやすく、また、雨量も多いので樹木も繁茂し、生物も豊富でとても美しいところです。

ただ日本と同じように地震があり、私の着任した首都グァテマラ・シティも以前、地震にあい破壊されました。しかし、現在は復興し、街路は広く、政府、議事堂、官庁の建築は壮大で、大学、教会、病院などの施設も整備されています。市街が清潔かつ優美なので、小パリの別名もあります。

遅れている指導体制

着任したその日、職場を見にいくと、すばらしいプールがありました。プールサイドも広く、日本でもこれほどのレベルのプールはそうないのではないでしょうか。しかし、それとは対照的に指導者のレベルは低く、また、人数も足りません。

私に対する要請は午前、午後に分かれて青少年の育成指導、指導者講習会と、場合によってはナショナルチームの指導ということでした。しかし、ナショナルチームは主としてアメリカ人が指導し、私は中堅チームを受け持つというふうでありました。

グァテマラの水泳レベルは非常に低く、その記録は日本の全国中学生大会の制限タイム程度です。これはグァテマラ人は背が日本人よりも低いということにも原因があるのかもしれません。

水泳連盟本部は首都にあり、各地方約15の水泳協会があります。しかし常に活動しているのは首都を合わせて5つだけです。水泳関係者で日本人は私1人であり、外国人ではアメリカ人のコーチが非常にたくさん働いています。ナショナルチームを指導しているのもアメリカのコーチであり、そのほかのコーチは各地方に約2名ずつ派遣され、水泳の基本指導にあたっています。

ここでは、アメリカ人コーチに対する待遇が非常に良く、アメリカのプログラムが一番良いと思っている面が強く、私が活動を行う際にとてもつらいものがありました。確かにアメリカの水泳は世界のトップではありますが、すべてのコーチが優秀であるとは言えないと思うのですが。

レベルの向上に励む

私はその後、首都グループ（約20名）に朝5時半から7時まで（陸上トレーニング）、午後3時から6時まで（水中トレーニング）と1日2部練習の指導をし、ようやくこれが習慣化してきました。

そのほかの活動としては、スペイン語での水泳技術テキストを作成しました。このテキストは、水泳の基本的なことから世界レベルの技術・テクニックまでを、理解しやすく80ページの2冊にまとめたもので、今後の私の協力活動においても、また、グァテマラ国の水泳のレベルアップにも必要なテキストとなったと思っています。

こうした活動の成果が現れたのか、参加したすべての大会で、選手たちは大幅な記録短縮をすることができ、その中からナショナルチームに1人送ることができました。それは1つの目標であっただけにとてもうれしく、チームを挙げて喜び、祝ったものでありました。

5月には、グァテマラ国水泳講習会が4日間にわたってあり、現在ナショナルチームを指導しているアメリカ人コーチ2名と私とカウンターパートの計4名で講習会を行いました。受講生は約40名で、朝9時から午後6時まで、内容のある、レベルの高い講習会を開くことができました。私は水泳技術テキストを使って、基本的な水泳力学、練習計画、水泳生理学（エネルギー代謝、超回復現象）について講義を行いました。このことは、全体のレベルの向上と指導者の育成に役立ったと自負しています。

水泳で人間的成長を

水泳は、水泳生活による人間形成や、社会に出てからの人生のさまざまな難局への対処の訓練のための、非常に良いトレーニングの場であると考えてい

ます。

私の協力活動の対象である、中レベルの選手たちは素質にあまり恵まれていないので、上のレベルの選手に勝つことができず、大会では負けて悔しい思いをしている者たちであります。その選手たちを見ていると昔の私を思い出し、それだけに愛着があり、かわいくてしかたがない思いでした。私は、この選手たちが記録を短縮し、勝ってほしいとともに、とくに人間的に成長してほしいと切に思いました。

ある選手から、今の自分の状態、仕事、勉強、年齢を考えると十分な練習ができないのでどうしようかと相談がありました。そこで私は、「記録が伸びないのは問題ではない。人間形成のために時間のあるかぎりプールに来なさい。また、水泳を後2年続けなさい。そうすれば人間として何かを身につけ、見つけだすことができるだろう」と言いました。彼は今でもプールに来て、もくもくと泳いでいます。

私は"勝つ"ための努力、また記録は伸びなくても、その時精一杯努力することの大切さを知り、結果的に水泳で敗北しても人間的には勝ちなさい、といつも選手たちに言っています。また、それが私の信念でもあります。

(了)

不破　央 Hisashi Fuwa

派遣国：グァテマラ
職　種：水泳
隊　次：平成5年度1次隊（活動期間1993年7月～1995年9月）
出身地：静岡県
初　出：「オリンピアン」1993.7.13（（株）ベースボールマガジン社）

不破央の夢

それは、彼に衝撃を与えた。突然、降ってわいたように彼の胸を締め付けた。未知なる国で、自分の持てるものを試してみよう。自分の人生観も変えてみよう。競泳の世界で鳴らした男が、この夏、新世界に発つ！

夢を追うスイマーが未知の国へ渡る―

かつての競泳日本記録ホルダー、平泳ぎで鳴らした不破央さんが青年海外協力隊・平成5年度第1次隊の一員として中南米のグアテマラに派遣されるのだ。

昭和61年に米国の大会で100m平泳ぎ1分3秒7の日本記録をマークした。この記録はそれから5年間塗り替えられなかったほどの当時の飛躍的レコードだった。

不破さんは静岡県富士市の生まれ。小学校に入って始めた水泳が学童大会で注目され、中学校1年から東京のスイミングクラブに"水泳留学"。3年生のときにナショナルチームの強化合宿に参加し、海外遠征も経験した。

高校は春日部共栄（埼玉）で、3年時に米国で日本記録を大幅に更新したのだった。日大進学後も当然のことながら「オリンピックの星」として期待され、泳ぐたびにスポットライトを浴びたが、ソウル五輪は「メダルにいちばん近い男」との前評判で、有力な代表候補でいながら過度の筋力トレーニングで腰痛を患い、出場できなかった。

その前のロサンゼルス五輪前にはマンホールに落ちて8針を縫うケガで断念、バルセロナ五輪でも「3度目の正直」と臨んだが、年齢的なピークを越え、代表選考会で屈辱の予選落ちを喫してしまっている。

こうした経験から、「本来はスポーツのコーチや学校の先生という人生設計を描いていたが、常にオリンピックが近づいてくると"傷"を思い出してしまうことになる」と指導者の道を一度あきらめ、舞台美術を学ぼうと進路変更をした。

ところが、美術、舞台関連の学校を探しに電車に乗っていたら、突然目に入った青年海外協力隊隊員募集の中吊りポスターに衝撃を受けた。砂漠に苗木を植えようとしているカットだったが、日本人隊員の割れた眼鏡レンズが頭にこびりついた。

「苦しいはずなのに、その人の笑顔はいいなあと思ったんですよ。何か"これだ"という駆り立てるものがありました。それで"オレには水泳しかない。知らない国で泳ぎを教えよう"と応募を決めました」

多種多様な職種の人が試験を受け、74倍という難関を突破して派遣が決まった。水泳指導要員の派遣国はジンバブエとグアテマラ。2ヵ国のうちグアテマラを選んだ。

「グアテマラのチキムラ市というところに行きます。原石を見つけ、アトランタ五輪の選手が育ってくれればという気持ちもあります」

指導者になりたいという小さいころの夢が、海外でかなう形になった。

「自分を指導してくださった米川英則コーチのようになりたいと思っていました。ただ苦しいだけが練習ではないし、水泳のおもしろさ、楽しさ、記録がよくなることの嬉しさを教えていきたいと思います。このためにいろんなアイディアを出していこうと考えています」

技術、精神的なものだけにとどまらない指導を念頭に置いている。実は、グアテマラの首都から南西170kmの派遣地、チキムラ市は水問題を抱える町なのだ。人口約8万、日中の最高温度が45度にまで上がる亜熱帯地域で温泉が多い。そうした環境から給水制限が敷かれ、生活用水の取水は3日に1度、2時間と限られているほど深刻である。

「ひょっとしたら、コースロープが張ってないどころか、プールに水がないかもしれないんです。そこにどうやって水を入れるかも自分たちのやり方次第でしょう。そんな環境で、今までと変わった自分が打ち出せるかということがすごく大事だと思います」

24歳で、これまでのすべての生活が大きく変わる。しかも見知らぬ国で人生観まで変えようとしている。だから未知の夢、期待と希望が大きく膨らんでいる。

「今までは、人と比べられ"似ている"とかいわれるのが好きではなかった。"○○さんも再起したから"といわれて自分も続くというのはイヤだったんです。それにルール、時間を守らない人は大嫌いで、許せませんでした。でも中南米の人の生活リズム、陽気さを（青年海外協力隊の）研修で学ぶうちに、

世界にはいろいろな考え方をもつ人がいるんだなと想像できるようになってきました」

研修は水泳8時間、睡眠時間を除いた12時間はスペイン語オンリーだった。この2ヵ月半は、机の上ではもちろん、体育館でバスケットボールをやるときも、公園で昼食をとるときもコロンビア人講師のスペイン語講座のような生活だった。

「時間にルーズだったり、勉強するときも明るすぎて緊張感がないなあと感じました。本当をいうとカルチャーショックでした。でもこれですんなりとグアテマラに入っていけるような気がします。楽しみです」

この研修は、「生まれて初めての試験勉強の経験でした。高校、大学とも水泳で進んだ世界だったから」という、同世代の人間のほとんどが体験したものを味わう貴重な時間にもなった。

祖父同士が兄弟で、またいとこになる不破弘樹さんは、「自分で決めた道。がんばってやればいい」というメッセージを彼に送っている。彼自身、日本陸上競技選手権大会の100mにも参加し、アトランタ五輪への道を模索する、という現役生活を続けている。

「ふたりとも、"不破"は忘れられる存在になっていますね」

と笑ったが、不破央の笑顔はもう隊員であり、コーチのそれであった。

「派遣の最長である3年でも、急激に選手は育てられないでしょう。次を育てる指導者を作りたいとも思っています。ずっと前、ペルーの女子バレーを教えた、偉大な加藤明さんを見習って自分もやってくるつもりです」

中南米で五輪選手を教える"第2の加藤"をいや"不破"を目指して―。未知の太陽が夢をさらに膨らませてくれる。

（了）

Japan Overseas Cooperation Volunteers

バレーボール・ソフトボール・野球・サッカー

〈バレーボール〉年度別・国別派遣実績

国名	88年度まで	89年度	90年度	91年度	92年度	93年度	94年度	95年度	96年度	97年度	98年度	総計
カンボディア	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1
ラオス	6	0	0	0	0	0	0	1	1	0	1	9
マレイシア	2	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	2
モルディヴ	1	1	0	0	1	0	1	0	0	0	0	4
モンゴル	0	0	0	0	0	0	2	0	1	1	0	4
ネパール	5	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	5
パキスタン	0	0	0	0	0	0	0	0	0	2	0	2
フィリピン	4	0	0	0	0	0	0	2	0	0	0	6
スリ・ランカ	12	0	2	1	1	2	1	1	0	1	0	21
タイ	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1
〈アジア地域〉	32	1	2	1	2	2	4	4	2	4	1	55
エジプト	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	1
ジョルダン	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	1
モロッコ	7	1	1	0	0	1	0	0	1	0	0	11
シリア	4	0	1	0	0	0	2	0	0	0	0	7
チュニジア	13	0	1	0	3	1	1	0	1	1	0	21
イエメン	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	1
〈中近東地域〉	24	1	3	0	3	3	3	0	2	2	1	42
ケニア	0	0	0	0	1	1	0	0	0	1	1	4
ザンビア	1	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	2
〈アフリカ地域〉	1	0	0	0	1	1	0	0	0	2	1	6
ボリヴィア	0	0	0	0	0	1	1	0	0	0	0	2
コロンビア	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	2
コスタ・リカ	3	0	1	0	0	0	1	2	0	0	0	7
エクアドル	0	0	0	1	0	0	0	1	0	0	1	3
エル・サルヴァドル	3	0	0	0	0	0	0	1	0	0	1	5
グァテマラ	0	1	1	0	0	1	1	0	2	0	0	6
ホンデュラス	2	0	0	0	2	0	0	1	0	0	1	6
ジャマイカ	0	1	0	1	0	0	0	0	0	0	0	2
パラグァイ	1	0	1	0	0	1	0	0	0	0	0	3
ペルー	3	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	3
〈中南米地域〉	13	2	3	2	2	3	3	5	2	0	4	39
フィジー	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	1	2
〈オセアニア地域〉	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	1	2
ルーマニア	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	1	2
〈ヨーロッパ地域〉	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	1	2
合計	70	4	8	3	8	9	11	9	6	9	9	146

〈ソフトボール〉年度別・国別派遣実績

国名	88年度まで	89年度	90年度	91年度	92年度	93年度	94年度	95年度	96年度	97年度	98年度	総計
インドネシア	0	0	0	1	1	0	2	1	0	0	0	5
〈アジア地域〉	0	0	0	1	1	0	2	1	0	0	0	5
ジンバブエ	0	0	0	0	1	0	0	2	0	2	0	5
〈アフリカ地域〉	0	0	0	0	1	0	0	2	0	2	0	5
エル・サルヴァドル	3	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	3
グァテマラ	0	1	0	1	0	0	0	1	0	1	0	4
ペルー	2	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	3
〈中南米地域〉	5	2	0	1	0	0	0	1	0	1	0	10
パプア・ニューギニア	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	1
〈オセアニア地域〉	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	1
ブルガリア	0	0	0	0	0	0	1	0	0	1	0	2
〈ヨーロッパ地域〉	0	0	0	0	0	0	1	0	0	1	0	2
合計	5	2	0	3	2	0	3	4	0	4	0	23

〈野球〉年度別・国別派遣実績

国名	88年度まで	89年度	90年度	91年度	92年度	93年度	94年度	95年度	96年度	97年度	98年度	総計
中国	1	0	0	1	0	0	1	0	0	0	0	3
フィリピン	1	0	0	1	0	0	0	1	0	0	0	3
タイ	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	1
〈アジア地域〉	2	0	0	2	0	0	1	1	1	0	0	7
ジンバブエ	0	0	0	0	1	0	2	3	2	2	2	12
〈アフリカ地域〉	0	0	0	0	1	0	2	3	2	2	2	12
コロンビア	0	1	0	0	0	0	0	0	0	1	0	2
コスタ・リカ	5	0	2	0	1	0	1	2	0	0	0	11
エクアドル	0	0	0	0	0	1	0	2	0	1	1	5
エル・サルヴァドル	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	1	2
グァテマラ	0	1	1	0	1	0	1	0	1	0	0	5
ホンデュラス	2	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	2
ニカラグァ	0	0	0	1	0	1	0	0	1	0	1	4
パナマ	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	1
パラグァイ	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1
ペルー	4	2	0	0	0	0	0	0	0	0	0	6
〈中南米地域〉	12	4	3	1	2	3	2	4	3	2	3	39
パラオ	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	1
〈オセアニア地域〉	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	1
ブルガリア	0	0	0	0	0	0	1	0	1	0	1	3
ハンガリー	0	0	0	0	0	1	0	0	1	0	2	4
ポーランド	0	0	0	0	0	0	0	1	1	0	0	2
〈ヨーロッパ地域〉	0	0	0	0	0	1	1	1	3	0	3	9
合計	14	4	3	3	3	4	6	9	9	5	8	68

〈サッカー〉年度別・国別派遣実績

国名	88年度まで	89年度	90年度	91年度	92年度	93年度	94年度	95年度	96年度	97年度	98年度	総計
バングラデシュ	0	0	0	1	0	0	1	0	0	1	0	3
スリ・ランカ	0	0	1	0	0	1	0	1	0	0	0	3
〈アジア地域〉	0	0	1	1	0	1	1	1	0	1	0	6
シリア	1	2	0	0	0	2	0	0	0	0	0	5
〈中近東地域〉	1	2	0	0	0	2	0	0	0	0	0	5
エル・サルヴァドル	2	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	2
〈中南米地域〉	2	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	2
パプア・ニューギニア	1	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	2
ヴァヌアツ	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	1
〈オセアニア地域〉	1	0	1	0	0	0	0	1	0	0	0	3
合計	4	2	2	1	0	3	1	2	0	1	0	16

下形敏彦 Toshihiko Shimogata

派遣国：スリ・ランカ
職　種：バレーボール
隊　次：昭和60年度1次隊（活動期間1985年7月～1988年7月）
出身地：長野県
初　出：「学校体育」1990.4.25（(株)日本体育社）

スリ・ランカでのバレーボール指導

私が3年間にわたって協力活動したスリ・ランカは、インド洋に浮かぶ小さな島　宝石、セイロン紅茶などで知られているところです。

首都コロンボの北東約90キロに位置するクリヤビティヤの町が、私の活動の拠点となりました。赴任先はクリヤビティヤ・セントラル カレッジという、12歳から18歳までの学生が通う普通学校です。教育省に配属される隊員は、1つの学校でそこの体育授業を受け持ち、加えて専門のスポーツを指導するのが普通なのですが、私の場合、セントラル・カレッジでバレーボールを指導するほか、クリヤビティヤ教育地区全体の学校を対象に巡回指導を行い、外へ外へと活動範囲を広げていきました。

バレーボールの盛んな国

クリヤビティヤ・セントラル・カレッジの授業は午前中のみの4時間。月曜日から金曜日までの週5日で合計、20時間です。フィジカル トレーニングは週2時間ずつ割り当てられていますが、制服のままで行うため、できる種目が限られてしまうという問題があります。

バレーボールは、午後2時半から夕方まで毎日行われていました。15歳以下、17歳以下、19歳以下のチームがあり、男女に分かれて週2回ずつ指導。ただし、19歳以下の男子チームに関しては毎日指導にあたり、とくに厳しい練習をしました。

最初に力を入れたのは筋力トレーニングです。その結果、当初は腕立て伏せを10回も満足にできない状態だったのが、途中で休むものの100回はできるようになりましたし、腹#筋、背筋運動、スクワットなどもこなせるようになりました。そしてパス、レシーブ、アタック、ブロックとも著しく上達しました。

もっとも、最初から順調に進んだわけではありません。炎天下で練習するので、すぐに「暑い！」と、日陰に行ったり水を飲みに行ったりしてしまうのです。つらいのは私も同じで頭にくることもありましたが、生徒のほうでも少しずつ理解してくれるようになり、勝手な休憩も徐々に少なくなりました。

人気を集めた、外人教師

赴任から3か月後、クリヤビティヤ教区地区での巡回指導をスタートしました。これは、同教育地区全体のバレーボールのレベルアップを目的としたもので、この巡回指導こそが、私に対する真の要望であったようです。クリヤビティヤ教育地区にはセントラル・カレッジが6校あり、それより小さな規模の学校が20数校。ただ、とても全校は回りきれないので、セントラル カレッジ中心の巡回となりました。

巡回指導では、基礎的な技術を中心に指導しましたが、実技だけでなく、教室での講義も必要に応じて取り入れていきました。多くの生徒と接するのは楽しく、少しでも多くの人がバレーボールの楽しさを知ってくれることが願いでした。そして、できるだけ多くのチーム、多くの生徒を試合に出してやりたいという思いで指導にあたりました。初めはシンハラ語が思うように通じなくて、各学校の先生に通訳してもらいながらの指導でしたが次第に自分だけでも会話ができるようになりました。

生徒の中には、外人がバレーボールを教えてくれるというので、おもしろ半分に来る者もいます。そのため人数は集まるのですが、ボールの数が足りず、ひどいときには100名#に対してボールが2、3個ということもありました。時間どおりに生徒が集まらず、30分や1時間の遅れは当然というのも頭の痛い問題でした。

巡回指導をしていると、本当に多くの人との出会いがあり、話す機会があります。生徒とも先生たちともよく雑談をしましたが、必ず質問されるのが、日本とスリ・ランカとどちらが好きか、ということです。初めの頃は、毎日違う学校でこの話が持ち上がりました。

二大大会制覇の快挙

巡回指導も慣れてきたころ、クリヤビティヤ・セントラル・カレッジでの2年間の指導の成果が出ました。1987年の10月に行われた全国学生選手権と、11月に行われたルーパバヒーニ・テレビ・トーナメントの学生の部での優勝。二大大会で二冠を制したのです。

その前年、全国学生選手権に二回戦で敗退してからというもの、クラブチーム、実業団チームとの練習試合を含めた猛練習を重ね、この二大大会のために苦労してきただけに、他校を寄せつけずに優勝できたことは、自分としてもとてもうれしいことでした。また、ちょうど学校が創立40周年を迎えたことも重なり、選手も学校側も大変喜んでくれました。それまで、二大会をを制したチームはなかったのです。

3年間の協力活動の結果、自分自身でも満足のできる成果が得られたと思っています。昨年の大会以降、クリヤビティヤ教育地区をはじめ、全国の学生のレベルが少しずつ上がっているのが目に見えてわかります。これからの課題は指導者育成だけではないでしょうか。

私にとっても、日本にいただけでは体験できずにいたことが、ここでは十分体験できたし、スリ・ランカという国を少しでも理解できたことは大きな収穫だったと思います。また、文化・習慣・民族が違う外国、それも途上国での3年間の生活は、必ずこれからの人生にプラスになることでしょう。

（了）

徳登志夫 Toshio Toku

派遣国：モロッコ
職　種：バレーボール
隊　次：昭和61年度2次隊（活動期間1987年1月～1989年1月）
出身地：東京都
初　出：「みんなのスポーツ」1990.12.25（（株）日本体育社）

あいさつの大切さを教えてくれた国

昭和61年3月、一通の電報がわが家に届いた。「赴任地モロッコ」と書かれた青年海外協力隊からの合格通知であった。

3か月にわたる駒ヶ根訓練所での派遣前訓練、フランス・ヴィシーでの6週間の語学研修の後、62年2月、任国であるモロッコへ。生まれて初めての海外生活、これから先の仕事や生活のことを考えると不安になったが、ちょっぴり期待も抱きつつ飛行機のタラップを降りた。

そして、現在、映画で有名なカサブランカ市から海岸線を約100キロ北上したところにある首都ラバトに住み、大学でバレーボールの実技指導にあたるかたわら、隣りにあるサレという町で、A・S Sというクラブチームのバレーボールコーチとして協力活動を行っている。

モロッコはイスラム教の国ではあるが、昔、フランスの植民地だったせいか、厳しい戒律を守る人は少なく、大都市の建物に代表されるヨーロッパ文化と昔からのイスラム文化が混在する、不思議な魅力をもった国である。

わたしの一日は「アッサラーム、アライコム」という言葉で始まる。一日のうち、何度この言葉を口に出すだろうか。これは朝、昼、夜に関係なく「こんにちは」という感じで使われるアラビア語である。

買い物に行けば、そこの主人に「アッサラーム、アライコム」、街で知人に会えば「アッサラーム、アライコム」、練習が始まる前に「アッサラーム、アライコム」。とにかく、誰か人に会えばこの言葉。そして次に出てくるのが、「元気か？」「どのくらい元気？」「家族は？」など、尽きるともなくあいさつの言葉が続く。赴任当初、どうもこの長々としたあいさつになじむことができなかったが、今ではほおを合わせるあいさつとともに半ば習慣となり、これがなければ一日が始まらない。また、この言葉であいさつの大切さを教えられたような気もする。

悩みのタネとなった予想外の十連敗

モロッコでは年に一度、秋から翌年の春にかけて国内リーグ戦が行われており、成年男子、成年女子、ジュニア男子がそれぞれ熱戦を繰り広げる。成年男子は1部リーグと2部リーグに分かれ1部リーグの構成は10チーム。各チームともホームとアウェイで1試合ずつ、計18試合を戦って雌雄を決する。

10チームの内訳は、モロッコ軍隊のチームのほか、砂糖メーカー、港湾会社、銀行、たばこ会社など、企業に属するチームがほとんどで、純粋な意味でのクラブチームは、わがA S Sともう1チームを数えるのみである。都市別にみると、カサブランカに5チーム、ラバト、メクネス、エルジャディダ、そしてサレに各1チームずつある。

わたしが赴任した当初、A・S・Sの男子チームは2部に所属していたが、前任隊員の努力もあって、赴任早々、1部に昇格した。その後、わたしがこのチームを引き受けることになり、次期リーグ戦に向けての練習をスタートさせた。

そして、わたしにとって初めてのリーグ戦が62年11月から始まったのだが、試合は屋内で行われるということをこの時になって初めて気づき、思わず「しまった」と口の中でつぶやいた。なぜなら、わがチームは練習を屋外、しかもコンクリートのコートで行っていたからだ。つまり、レシーブのときに思い切ったプレーができず、どうしてもレシーブ練習がおろそかになりがちだったのである。リーグ戦が始まると、案の定、わがチームはレシーブの弱さが目につき、第一戦の敗戦を皮切りに、ずるずると敗戦を重ねていった。

練習を開始した当初は、週3回の練習を夜の7時から約2時間、屋外コートだけで行っていたが、レシーブの強化が緊急課題となり、週に一度、火曜日の夜8時半から約2時間、ラバトにある体育館を借りて集中的にレシーブの練習を行うことにした。あとの2回は、水曜日と金曜日の昼休みを利用して、サレの屋外コートでの約1時間半の練習である。

サレでの練習時間を昼間に変更したのは、サレのコートの照明設備が壊れ、夜間だとボールがよく見えないのと、冬期ということもあってかなり冷え込むので、選手から練習時間を変更してほしいとの要望があったからだ。だが、練習を昼間にすることで問題が1つ生じた。選手はそれぞれ職をもっており、この時間だと参加できない者が出てきたのである。昼食をとるからという理由で参加しない選手もいた。

もう1つ、カネのからんだ問題もあった。他のチーム、特に会社組織のチームでは、試合に勝てば報奨金がもらえるのである。相手チームの選手は、試合に勝てば確実に現金を手にすることができるが、わがチームでは勝ち負けにかかわらず、一銭の報奨金も出ない。わがチームに報奨金を払う余裕はないのである。これはゲームが切迫したとき、勝敗にかかわる決定的な要素となる気がする。わがチームが3−2で負けることが多かったのも、そこに原因があるように思えた。しかし、勝負ではカネに替えられない喜びがあるのも事実だと思う。それを選手たちにわかってもらうのも、わたしに課せられた課題の1つだった。

さて、10連敗後に迎えた第11戦。初めの2セットは先取されたが、レシーブ練習のかいもあってか、そのあとを粘って3セット連取し、勝つことができた。それまで負けてばかりで、モロッコに来た意味はいったい何なのかと悩んでいたが、この勝利で悩みも吹っ切れ、本当にうれしかった。そしてまた、この勝利のお陰でチームにも明るさが戻り、残り8試合を勝ち越すことができ、最終的に1部に残留することができた。

練習時間になっても選手が集まらない、試合中に同じチームの選手どうしでののしり合うなどの問題もあったが、選手たちのボールを追うときの目、わたしの説明を聞くときの真剣な、そして混じり気のない澄んだ目に接したとき、この国で青春の1ページを送れることを心からうれしく思った。

選手たちとは、コートを離れればよい友達である。わたしが困っているときや悩み事があるときは、親身になって相談にのってくれた。また、彼らを通じて知り得たこの国に関する知識も多かった。わたしが彼らに教えるというより、彼らに教わったことのほうが多いのではないかとも思う。今、彼らに対して感謝の気持ちでいっぱいである。

（了）

松原　渉 Wataru Matsubara

派遣国：シリア
職　種：バレーボール
隊　次：昭和62年度2次隊（活動期間1987年12月～1989年12月）
出身地：埼玉県
初　出：「みんなのスポーツ」1990.1 25（（株）日本体育社）

シリアでのスポーツ指導―感懐―

私は派遣隊員として青年海外協力隊に参加し、昭和62年にシリアに赴任した。ラタキアという地中海沿いの都市で、2つのクラブチームを中心にバレーボールの指導にあたっている。

シリアでのメジャースポーツは何といってもサッカーであるが、バレーボール、バスケットボールは全国の約30のスポーツクラブで行われている。そのほかにも陸上競技、バドミントン、体操、卓球、柔道、レスリング、ボクシング、ウエイトリフティング等は、全国約10の地方スポーツ連盟が直属で行っている。

遅れる学校体育の充実

日本のような学校単位でのスポーツは行われていない。もっとも学校の施設が足らず、ほとんどの小・中・高校が午前と午後の2部制で、生徒も教師も入れ替わる。つまり週の前半は午前で後半は午後の部と、その逆の部に分かれ、一緒に運動することは学校の管理下ではできない。

学校でさえそのような状況なので、他のスポーツ施設なども少ない。サッカーと陸上競技のできるスタジアムと体育館がそれぞれ国内に10程度で、水泳プールはホテルのものを除けば5つ以下であろう。しかもその3分の1が首都のダマスカスに集中している。私のいるラタキアでは、市内唯一の体育館である女子体育師範学校の体育館を、2つのスポーツクラブが使用している。

学校でスポーツを行わないので、運動を始める年齢も時期もまちまちである。また、経済的理由で働く子どもも多いし、宗教がら娘に運動させたがらぬ親も多い。男子の徴兵も運動中断の一因である。

シリアにきて、実際に指導して感じることは、サッカー以外の運動経験がまったくないようで、とても不器用だということである。前転・後転・壁倒立、そしてスキップまでもまともにできる選手は少ない。日本では学校体育や就学前の遊び等で当然経験しているはずの、マット運動、鉄棒、跳び箱、縄跳び、キャッチボール、ドッチボール等の経験がないのである。

学校での体育の授業は週1時間（45分間）だけで施設もなく、遊びもサッカーだけなのである。道路や空き地、狭いガレージなどいたるところでサッカーをしているのを見かけるが、夏の海や川での泳ぎ以外、ほかのスポーツで遊んでいるのを見た覚えがない。初めて運動をするのに、10歳程度から15歳までならなんとかなるが、それ以上の年齢の初心者はいつまでも動きに柔らかさがなく、ぎこちなくなり、上達に時間がかかる。

私の指導している男子選手の中に、2人のナショナルチームのメンバーがいる。マット運動や縄跳びをさせると最初は2人ともほとんどできなかったが、1人は3週間で倒立や二重跳びができるようになった。成人過ぎ（23歳前後）の初体験の運動の結果で、これがどうとはいえないが、ナショナルチームのメンバーでさえ経験がないので初めはできない。その後練習によりできるようになる者とならない者がいるが、できるようにならなかった者も、もっと若い時期に経験していればできていた可能性もあるわけで、もしそうならば、本職のバレーボールも今以上に上達していたかもしれない。これからは学校体育の充実がシリアのスポーツ発展にかかせない。

サッカーに偏るスポーツ経験

トレーニングの全面性の原則から、1つのスポーツだけでなく、シーズンオフなどに他のスポーツを行うことは良いと言われている。その面では、シリアのサッカー選手は他の運動の経験はないだろう。しかしシリアのサッカーは強いのである。

今年2月、サッカーの全日本代表チームが来たが、シリアチームに破れ、地方のクラブチームと引き分けの0勝1敗2分けだった。応援していた私はとても残念だった。技術的なことはよくわからないが、サッカーとは特殊なスポーツなのではないかという疑問を持った。用具が少なく試合形式の練習だけで強くなるのである。何と途上国向けのスポーツであろう。

私の経験からも、野球やバスケットボールの経験者は他のスポーツをやっても上達が速く感じられるし、いろいろなスポーツの監督からも、野球、バレーボール、バスケットボールの選手はつぶしがきくとよくいわれる。これはそれぞれのスポーツの持つ応

用性、または発展性という特性らしい。このことを調べていけばサッカーとは逆に、あるスポーツに対し明らかに経験したほうがよい、他の特定のスポーツがある可能性もある。帰国後の課題としたい。

好きになることが継続の第一歩

スポーツを継続させるためには、動機付けといった情緒的･精神的なはたらきかけ（指導）がかかせない。しかしそれが言葉とともに大きな障壁である。

試合前数週間しか練習しないチームが多いのが現状で、どんなに質の高い練習をしても選手が次の練習に来なければ無意味である。どんな内容の練習でも伸びるレベルなので、とにかく練習を続けさせることが第一である。そのためには、まず興味を持たせ、次にそのスポーツを好きにさせ、そして試合に負けた悔しさ、勝つ喜びを知らせ、練習の必要性を感じさせることだろう。選手は、私が外国人コーチということで興味は示しているので、今は、いかにして次の段階に進めるかで毎日頭を悩ましている。

（了）

吉水直保 Naoya Yoshimizu

派遣国：グァテマラ
職　種：バレーボール
隊　次：平成元年度1次隊（活動期間1989年7月～1991年7月）
出身地：福井県
初　出：「月刊バレーボール」1991.3.15（日本文化出版(株)）

グアテマラの思いはいつまでの熱く

わたしは、青年海外協力隊員の一員として、オリンピック委員会に配属となり、男子ナショナルチームおよびジュニアチームのヘッドコーチとして指導を行っています。グアテマラに赴任して5カ月ほどたった某日。わたしたちのチームは、メキシコ・タパラュラ市選抜チームとの親善試合のために、グアテマラ市の宿舎に向け早朝出発しました。

とにかく暑い。余興でビーチバレーを行うが、砂に足はとられるし、ものの2、3分で汗が滝のように流れ出てしまうのです。ビーチバレーの予選が終わったあとは、さすがラテンの踊りの国。夜までダンス大会があり、選手たちはこぞって参加。練習中の様子とは違った選手の一面も見られ、へぇーと思っていると、「ナオヤ（わたしのこと）！お前も踊れよ！」と誘ってきました。「踊りは苦手でダメだよ」と言ってもダメ。結局ひっぱり出され踊るはめに‥。

翌日、親善試合の行われるメキシコ・タパチュラ市に向けて出発しました。当初、バスでの移動という話でしたが結局バスは出ず、時間のロスを気にしながら選手の車での移動となりました。

グアテマラをひたすら北上、そして、国境が近づく。生まれて初めての陸路の国境通過です。1つの川を挟んで2つの国が存在する。両側には検問所。すぐ近くには軍隊・国境警備隊がいる。不思議な光景でした。

メキシコ入国の際のこと、検問所員がバレーボール連盟の用意した書類を一読。その後、彼は、わたしと東洋系の顔だちの選手だけにパスポートの提示を求めてきました。ちょっと変だなと思っていると、彼は「この書類はグアテマラ人のみ有効であって、彼（わたしのこと）は日本人であり、適用できない」とのことでした。

選手たちは口々に「彼はナショナルチームのコーチであり、現在はグアテマラに住んでいる。問題ないじゃないか」と言うが、検問所員は「ダメだ！」と首を横に振り、議論すること20分。内心メキシコへ入国できないのではないかと不安になってきたところ、やっとOKが出て入国となりました。国境通過後1時間。5時間近くの行程の末、18時ごろタパチュラ市に到着しました。

先の試合時間が延び、男子の試合が21時ごろとなってしまい、試合前の練習を見ているところがまた弱い。結局、ものの1時間でグアテマラチームの楽勝となりました。

初めての公式戦であったこともあり、勝利の安ど感と、5時間近くもかけてこんなチームとの対戦では、というむなしさが入り交じった複雑な心境でした。

宿舎に着いたのが午前3時半過ぎでした。「あすは10時より練習！」と選手たちに言うと、「本気かよ」というような選手たちの渋い顔。それでも疲れの中で、口々に冗談を言って笑いながらの就寝となりました。

次の日、眠い目をこすりながらも予定どおり10時開始。屋外の練習となり、持久走にダッシュと走りまくりました。

午後はビーチバレーの応援に出かけ、ナショナルチームの代表として、参加した2組の決勝戦となり喜んでみたものの、どちらかを応援するわけにもいかず困ってしまいました。

優勝した選手の顔はすばらしく、水を頭からかぶりビールをかけ合う姿に勝つことの意義をあらためて感じ、身が引き締まる思いでした。

移動が多く暑さも加わり疲労が激しかったのですが、あの夜の踊りと美しい星空、国境通過の出来事など、日本では経験できない多くの忘れ難い、よき思い出となった2泊3日の遠征でした。

（了）

西　智弘 Tomohiro Nishi

派遣国：グァテマラ
職　種：ソフトボール
隊　次：平成元年度3次隊（活動期間1990年3月～1992年5月）
出身地：大阪府
初　出：「電気計算」1991.9.12（(株)電気書院）

グアテマラ共和国は、日本の四国と北海道を合わせたよりやや大きい位で、人口は中米5ヶ国最大となっている。また、地理的には北はメキシコ、東はベリーズとカリブ海、東南部はエル・サルバドルとホンジュラスと国境を接し、南西岸は太平洋に面している。国土の半分以上は山岳地帯であり、気候は一年中温暖であるが、日中と朝、晩の気温差は、高地では厳しい。

主な農産物は、コーヒー、トウモロコシ等でこの国の経済を支えている。また、多くの火山や風光明媚な湖があり、更にマヤ文明が栄えた当国では、いたる所に当時の遺跡が残り、原住民の手織で作られるグアテマラ織りと共に豊かな彩りとなっている。思えば、私が協力隊に参加した動機は単刀直入に言うと「役に立ちたい」「とにかく行きたい」「得た経験を今後の人生に生かしたい」ということであった。

私の任地は首都のグアテマラシティーで、標高1500メートルの位置にあり中米No.1の都市である。通りはバスが行き交い、活気に満ちているが人々は中南米の例にもれず陽気で、時間はゆっくりと流れている。気候が温暖であるためか、スポーツは特に盛んで、サッカー、バスケット、バレーボールに人気がある。ソフトボールも盛んで、体育協会・ソフトボール連盟には男子112チーム、女子42チームのクラブチームがあり、格リーグに分かれ年間を通じてリーグ戦が行われている。

赴任当時から、特に女子の底辺の拡大、レベルアップをして将来につながるような活動をしてほしい、との連盟からの要請を受け、1,2部リーグある女子の、特に2部のリーグのチームの指導をしてきた。また、普及活動においては、まだまだ地方ではソフトボール自身あまり知られていなくチームも持っていないので、リーグ戦を地方遠征で行ってソフトボールの拡大を計った。まず驚いたのは、こちらの女性は15歳で日本の成人式と同じ儀式を終え、もうすっかり大人になっているのである。したがって化粧はもちろんのこと、指輪、ネックレス、イヤリングなど、おしゃれに余念がない。

2部リーグでは、5チーム約100名の15～22歳位までの選手で構成され、正直に言って、1部リーグと比べて実力はかなり劣るが、まだまだ若いチームだけにこれからが楽しみである。

練習においては、まず基本プレーが大切であるが、特にソフトボールは投手が重要なポイントなので、将来1部リーグのチームで活躍できる投手を指導する。打撃面においては、右打者よりも左打者の方が有利であるため、本人と相談のうえ、何人かの選手を左打者に変える事にした。

また、作戦面においては、日本のような小技プレーも取り入れながら、接戦に強いチーム、選手を育成する。が、この様に指導しながらも、やはり日本との文化の違い、習慣の違いを考えさせられる事が多かった。しかし、日本と比べる事はいけないと思い、こちらの良いところを伸ばすように心掛けた。ホンジュラスの人達は、とにかく"楽しむ"という事が非常にうまい。

子供達は素足で走り廻っているし、若者達は上半身裸でボールの様な物（ちゃんとしたボールではない）を蹴ってサッカーに興じている。とにかく明るいのである。

現在、体育協会ソフトボール連盟の外国人スタッフ、コーチは私一人であるが、体育協会とは独立してオリンピック委員会があり、主にオリンピック委員会が選抜チームの選手強化に努め、体育協会が普及、底辺の拡大、リーグ戦の運営に努めている。が、残念な事に、リーグ戦の運営においても精一杯の状態であり、予算面においてもオリンピックの協会に比べて体育協会の方が非常に苦しい状況であるように思われる。

教材面でも、各チームがバット、ボールを所有しているものの、グランド状態が悪いためか、消耗が早く変形している物も多い。また、安全確保のヘルメット、プロテクターなどの用具も充分でなく、協力隊からの援助で賄っている。

このように、まだまだ不十分な点はあるが、スポーツが人間の人格形成上、必要な物であり、楽しいだけがスポーツではなく、日本が大切にしている精神面、心構えをわかってもらうと共に、先にも述べたようにグアテマラの人達の長所を生かしながら、スポーツの心を伝えるように努力していきたい。

（了）

村井洋介 Yosuke Murai

派遣国：ジンバブエ
職　種：野球
隊　次：平成4年度1次隊（活動期間1992年7月～1994年8月）
出身地：愛知県

初　出：「みんなのスポーツ」1994.7.1（（株）日本体育社）

ジンバブエののどかなコミュニケーション

きょうも意味不明のショナ語（ジンバブエの現地語）の叫びと笑いの声の中、およそ野球とは言い難い野球を子供達と共にプレイする。ここは、ハイデンシティと呼ばれる人口密度は高いが、貧しい地区である。人の通り道だけ草がなく、グラウンドというより野原に近い空間が私達の練習場だ。

ここはガラスの破片、石、ゴミなどがあるにもかかわらず、子供達は平気で素足で走り回る。しかし、心配しているのは私ひとり。不思議なことに、それらでけがをする子供はいない。

現在私は、ジンバブエナショナルチームコーチと並行し、3つのハインデンシティ地区の19の小学校を中心に野球の指導をしている。ここに住む子供達は、おそらく初めて日本人にお目にかかったのだろう。最初のうちは警戒して近づこうともしなかったが、今では道具運びを手伝ってくれたり、帰る時はバス停まで送ってくれるようになった。バス停に向かう私の周りには多くの子供達の輪ができる。大人達はこの行進を不思議そうに眺めている。

野球とは呼べない野球指導にあけくれて…

練習が始まる。まずは軽いランニング。そしてストレッチ体操。「子供は体が柔らかい」という概念があった私は、まずここで驚いた。なんと、ほとんどの子供が柔軟性に乏しいのだ。よくよく調べてみると、ここではスポーツの前に準備運動もしないで、いきなりプレーに入ることが多い。そのために、外傷でないけがも多いのだ。

という訳で、まず準備運動の徹底を図った。早くボールを投げたくてしょうがない子供達の気持ちを抑えて、ストレッチ体操を教えるのは大変だ。しかし数週間後、数人の子供達がストレッチ体操のメニューのほとんどをキチンとこなし始めると、そこから子供どうしの競争が始まった。みんな柔らかさを競い合い始めたのだ。そして、現在ではほとんどこの子供が、柔軟体操のメニューをこなせるまでになった。

次はキャッチボール。極端な道具不足のためボールの数が足りず、そのためキャッチボールは順番制となっている。

キャッチボールが終わると、次はフィールディングの練習。子供達が各ポジションにつき、私の投げるゴロやフライを取る練習だ。

今でこそ少し様になってきたが、最初にこの練習を始めたときのハプニングをご紹介したい。ゴロを投げてそれを捕球するのは、まあまあのようだ。「じゃあ、次はフライボールだ」ということでフライを投げたところ、全員ポカンとして顔でボールが地面に落ちるまで目で追っているだけ。「私の説明不足だった。フライボールが上がったら、それが地面に落ちる前に捕球しなさい」と言ってフライを投げたところ、今度は全員が一斉にそのボールに向かって走り出して取り合う始末。真剣な子供達には申し訳ないと思いつつ、自分の説明不足を棚に上げ、大笑いしてしまった。

そして、待ちに待ったバッティング。これは、まず打順を決めるのが大変だ。みんなバッティングが大好き。しかし、バットを持ったらとにかく周りも気にせず振りまくる。危険このうえないので「まず、自分と周りの安全を確認してから振りなさい」という基本中の基本からの指導。もちろん、グリップの握り方や、打ったら、それに満足しないで次に走ることまで詳しい指導が必要だ。

子供達にとって野球とは？

ジンバブエの子供達。まだまだ野球というには遠いが、みんな元気にプレーしている。「私は野球をしている」と自信たっぷりに自慢してはばからない。野球をしているほんの短い時間、彼らは貧しさという現実から離れ、無心にボールを追っているように感じる。この子供達のために、残りの青年海外協力隊任期を捧げる。

国際大会にて

1992年11月12日から14日の3日間、ジンバブエ共和国においてアフリカ4カ国（南アフリカ、ナイジェリア、ナミビア、ジンバブエ）対抗野球リーグ戦が行

われた。

この大会は、Inaugural African Championships と銘打つ、アフリカで初めての大きな国際大会である。4か国ナショナルチームおよびジンバブエと南アフリカのユースチームの計8試合が行われた。

ジンバブエナショナルチームコーチ、ユースチーム監督兼コーチをしていた私は、おそらく初めてアフリカの野球大会を体験・観戦した日本人ではないかと思う。

そこでその体験・観戦記として、私の率直な感想を述べたい。

まずは結果から報告すると、1位・南アフリカ（3勝0敗）、2位・ジンバブエ（2勝1敗）、3位・ナイジェリア（1勝2敗）、4位・ナミビア（0勝3敗）であった。ユースチームは、南アフリカ2勝、ジンバブエ2敗という結果に終わった。

チーム別総評は、南アフリカが傑出していた。というのも、南アフリカには早くからリトルリーグやシニアリーグがあり、他国と比較して環境、用具等の面も充実しており、野球そのものが確立されている。

ジンバブエは、すべてが元ソフトボール選手であり、ある程度はこなすものの、まだ野球としては確立されていない。しかし、今大会では健闘した。

ナイジェリアは、野球を始めて約2年半、諸外国（野球先進国）からコーチを招き、野球の普及ならびに技術向上に取り組んでいる。今大会のチームは若いが、良くまとまった好チームであった。

ナミビアは、ソフトボール選手がそのままチームを組んできたということであった。

スポーツを楽しむのに人種の問題が…

大会全体を通じて得た感想は、驚いたことに、ナイジェリアチーム以外の3チームには全く黒人選手が存在しないことである。南アフリカチームには数名の混血の選手がいるものの、ジンバブエ、ナミビアにいたっては全員白人選手なのだ。その背景には、野球というスポーツが大変お金のかかるスポーツだということが挙げられ、事実ブラックアフリカと呼ばれる南部アフリカの国々でも、白人選手のみで現れた。また、ここにも白人と黒人の融和せざる人種としての側面が顔を出した。公平な立場として見ていた私にも、明らかにそれは感じられた。全員が黒人のナイジェリアチームに対して、南アフリカチーム以外の2チームの選手および審判、観客の一部には、アンフェアな態度があったことは否定できない事実であった。

しかし、ナイジェリアチームの選手達は、本当にすばらしかった。プレー、試合態度、マナー、どれをとっても立派だったと思う。選手たちのほとんどが18歳前後で、コーチはキューバから招かれた方であった。そのコーチもとても立派な方で、何よりもこれだけのチームを約8ヵ月の短期間でまとめ上げたことには敬意を表する。

大会終了後、ナイジェリアチームの選手達や関係者は、私が日本人ということで正直にいろいろと話をしてくれた。その中で最も悲しく感じた話は「このような環境で野球をしたくない。とてもひどい仕打ちだ」と言っていたことである。白人でも黒人でもない立場の私から見て、スポーツの場にも人種差別が存在することは、非常に残念に思った。

同一民族がほとんどの日本に住み、野球をしていた私には初めて見る、初めて味わう現実の光景であった。

さいごに

話が野球から離れるが、我々日本人が近隣諸国の人々に、このような差別意識を持っていないだろうか？日本を離れた今、アフリカの思わぬ所で痛切に感じた。

この大会は大きな溝と、多くの問題を残して終わったかもしれない。青年海外協力隊隊員として、野球コーチとして、どうしたら一番良いのか？　私個人の力のなさが悔しい。漠然としているが、今後、私は少年少女達、リトルリーグの選手達に、白人黒人を問わず、スポーツとして野球をすべての人々が楽しめるよう、普及活動および指導に当たりたい。私は、政治的なことを言っているのではないし、白人批判をしている訳でもない。今後の野球発展を願うだけである。いつか、人種問題の壁を超えた時、きっと多くのすばらしいチームが生まれると思う。

（了）

笠井義晃 Yoshiaki Kasai

派遣国：グァテマラ
職　種：野球
隊　次：平成元年度1次隊（活動期間1989年7月～1992年1月）
出身地：大阪府
初　出：「海外新聞」1990.12.25（（社）日本海外協会）

日本には日本のすばらしさ

ーチームプレイ・思いやり精神などー

グァテマラ共和国という国を一体どのくらいの日本の人たちが知っているだろうか？

私も協力隊に参加するまで、このグァテマラという国についてはほとんど知ることもなく、遠いよその国の一つという印象しかなかった。そして派遣が決定してから、あわてて世界地図や図鑑を調べ、この見も知らぬ国グァテマラについてあらゆる情報収集につとめたものだった。本当にそんな所で野球をやっているのだろうかと随分思いをめぐらせながらやって来たグァテマラ。到着して受けた衝撃は今も覚えている。

さすがに中米で一番といわれる程に大変都会的で私が想像していた協力隊のイメージ、つまり電気も水道も無いといったイメージが一瞬にして吹き飛んでしまった。特に私が現在活動しているグァテマラシティーではそうであろう。ある程度、物質的な面でも恵まれているし、電気も水道もちゃんと備わっている。しかし、ここは日本ではなくグァテマラ共和国なのである。言葉の違いはもちろんのこと、文化や考え方の違いによって苦労させられる場面が、日常から仕事に至ってまで多々ある。スポーツ隊員は特に対象が人間であるがゆえに様々な場面で衝突や意見の食い違いが生じる。しかし、そういったことの繰り返しの中で共に喜び、苦労をわかちあえることのすばらしさを、私自身がこれからも学び続けようと思う。一時期私は自分の職種（野球）について思い悩んだことがあった。もともと野球なんてものは直接グァテマラの経済発展に関係することも無いのに、なぜ協力隊の派遣が必要であるのかと。しかし私は思う。今、私が指導している選手達が野球を通じて、チームプレーの大切さや、思いやりの精神など、様々なことを学び、やはてすばらしい人格を持った人間を育てる。すなわち人づくりの一環を担っているのだと。グァテマラの次の時代を築いて行く人間を預かっていることを非常に誇りに思い今日も練習に励んでいる。

グァテマラ着任後1年が経過した今、連盟が私の活動を認めはじめたのか、ナショナルチームや選抜チームのコーチとしての仕事が増えはじめた。そんな中で先日はメキシコで中学生選抜の世界大会が開催された。日本、キューバをはじめ12カ国が参加したこの大会は日本が見事優勝を飾り、グァテマラは初参加ではあったがペルー・ニカラグアに勝ち9位であった。この大会では結界以上に得たものが多く選手達も同様、世界を見せつけられた大会であった。特に今回は、日本が優勝したこともあり選手達の感心も多くが日本に向けられていたように思う。全日本の強さはどこにあるのか。自分達と何が違うのか、日本の選手は皆礼儀作法が良くグランドでも宿舎で好評であった。大会中に、こんな出来事があった。グァテマラはその日、午後に試合を終えた、夕食をとった後に買い物ツアーに出かけた。それぞれ土産や食料品などを買い込み宿舎に戻った。バスから降りるとそこには、全日本の選手達が汗を流しバットを振っていた。グァテマラの選手は自分達の買い物袋と全日本の選手が真剣にバットを振る姿をかわるがわる見つめたものだった。次の日の朝、朝食をとっていた私達の横を全日本の選手達が通っていた。その後すぐに練習に行く様子だったが、この日全日本の試合は夜の7時からである。グァテマラの選手達は口々に何故日本はあれほど練習をするのか、私に質問を投げかけてきた。そこに全日本の強さがあるのではないかと私が答えると、彼らは複雑な表情をしながらもうなずいていた。大会最終日、全日本が優勝を果たし閉会式でトロフィーを受け取るのを見ながらグァテマラの選手達は、来年は自分達の番だと言うが、彼らはまだ知らないことが多すぎる、全日本の選手達が、ここにたどり着くまでにどれだけの汗と涙を流してきたのかを、しかし、このことはこれから私が少しずつでも教えてゆかねばならないことであろう。大会後私は選手と話す機会が多くあったが、その度に強いチームの選手達はただ野球が上手なだけではない。気持ちのこもった野球ができる選手なのだと話し続けた。これからの選手達の取り組み方を見守ってゆこうと思う。そして、いつの日か球場バックスクリーンのポールにグァテマラの旗を揚げる時がくるような、努力を惜しまないつもりでいる。ラテンにはラテンのすばらしさがあり、日本には日本のすばらしさがある。互いの良い面を合わせたグァテマラ独特の野球をつくりだそうと、私は新たに計画を立て始めたところである。

小林裕次 Yuji Kobayashi

派遣国：ニカラグア
職　種：野球
隊　次：平成3年度3次隊（活動期間1992年4月～1995年6月）
出身地：栃木県
初　出：「体育科教育」1994 9.1（（株）大修館書店）

ニカラグアの子どもたちと野球

－青年海外協力隊の指導を経験して－

気温の高さに閉口

私が中米のニカラグア共和国に野球隊員として派遣され帰国してから、早くも1年以上が経過した。ニカラグアはアメリカとキューバの影響を強く受けているためか、野球の歴史は古い。それを裏付けるように、野球がサッカーを凌いで国内で一番人気のあるスポーツであり、そのレベルも高い。コーチも、日本の水準以上の知識と技術を持つ人ばかりで、当初は不安を感じた。

赴任した当初は、この国の暑さに閉口した。朝から夜まで気温が下がらず、夜中も熱帯夜のような日々で寝苦しい。しかし、この暑さにも慣れてくると、外での仕事はクーラーの効いた部屋で働くよりは、気温差がないだけ健康的だ。練習後は汗をかき喉が乾くので、選手達と一緒に生水を飲んだが、腹痛も起こさなかった。

明確になった目標

仕事をはじめて3ヵ月を過ぎたころから、だんだん問題点が見えてきた。と同時に、目標も次第に明確になってきた。

(1) ニカラグアの少年野球への軟式野球の導入と普及

(2) 野球指導を通じての教育効果の拡充という2つの目標であった。

雨の多いニカラグアではゴム製の軟球は、革製の硬球よりも耐久性があると思われる。毎年日本で軟式野球の世界大会が開催されており、ニカラグアの子どもたちに日本を見せてやれるチャンスがあることも大きな魅力だ。

それに、安全面での効果が大きい。この国のスポーツ安全に対する意識は残念ながら低い。野球は楽しいが危険なスポーツだ。ヘルメット着用の義務は野球協会の規約に明記されているが、大きな大会でもヘルメットを使わないチームがある。経済的な理由もあるが、安全管理は怠ってはならないことである。

日本の常識は通用しない

ニカラグアの野球は試合に勝てば総てよしといった雰囲気で、あまりにも勝敗を重視しすぎているように思われる。試合中に敵味方関係なく野次を浴びせ合う監督やコーチ・選手たち。そして観衆に至るまで全く耳を覆わんばかりだ。確かに勝負に勝つことも大切だが、青少年期におけるスポーツの意義はもっと他にもあるはずだ。健康な身体をつくる。友達をたくさんつくる。規律を身につける等々‥。

健康、友達という意識は、日本人と共通のようであるが、規律の意識の違いには悩まされることがしばしばある。もちろん日本の規律をニカラグアにそのまま持ち込むことは無理がある。

例えば「決められた時間、約束を守る」ということ。これは、私が教えた少年野球教室の規則にもうたわれているが、時間通りに始まることはほとんどない。また、そのことを注意するコーチもいない。私はこの状況に不満を覚え、コーチ陣に進言してみたが、何ら変わることはなかった。

そんな毎日を過ごしているうちに、次第にこの国の現状も見えてきた。ニカラグアでは、野球は国民に根づいたスポーツだが、私の教えている子どもたちの多くは時計さえ持っていない。それどころか、時計のない家庭も多い。

交通事情も悪く、グラウンドに来るにも何本もバスを乗り継いでくる子どももいる。それなのに、練習時間に遅れて来たからといって、叱るのは良いことだろうか？　叱られたことで、野球に対する興味を削いでしまわないだろうか？

ニカラグアという国に少しずつ慣れていく過程で、人々は時間を贅沢に使っているのではないかと思うようになった。

そのことが良いのか悪いのかは、未だによくわからない。だが、時間に追われていた日本の生活を思うにつけ、ニカラグア人々の時間の使い方にうらやましさを感じた。

未来を担う子どもたちのために

しかし、その生活をそのまま残したいと願う半面、何か違うぞと思ったりもする。

ニカラグア国内だけの付き合いで一生を終えるのであれば問題はない。しかし国際社会のなかで国を発展させるためには、先進国との付き合いを無視するわけにはいかない。そこで約束の時間を破ったりしたら信頼されず、対等な関係を築くのは難しい。

私が求めるものは、野球を通じて社会性のある大人に成長して欲しいということであった。野球に限らないがスポーツには社会性を育てる十分な要素があると信じている。私が指導したのは、将来のニカラグアを担う子どもたちなのだ。

彼らがニカラグアの発展に大きく寄与してくれることを心から望むが故に、私も悩みながら毎日グラウンドでボールを追い掛け、ニカラグアを去る日まで子どもたちの尻を叩き続けた。

（了）

辻　敏彦 Toshihiko Tsuji

派遣国：バングラデシュ
職　種：サッカー
隊　次：平成3年度2次隊（活動期間1991年12月～1993年12月）
出身地：福岡県
初　出：「電気計算」1994 4.12（（株）電気書院）

忘れられぬＯＢの言葉

私が協力隊の参加を決めた理由の１ひとつに、協力隊のＯＢの言葉があります。説明会の席で、そのＯＢは任国で起きたエピソードや活動を面白おかしく語ってくれました。そして話の締めくくりとして、ゆっくりとした口調でこう切り出したのです。

「遠い国で、飢えた人々が水を欲して死にものぐるいで井戸を掘っていたら、あなたはどうしますか？

大それた道具などいりません。スコップ一つで助けてあげてください。スコップがなければ手でもかまいません。一緒になって掘ってあげてください。肝心なのは物でもお金でもなく、あなたたちが心の奥で感じているものを"行動"に移せるかどうかなのです。」

私は「ハッ」とした思いで、その言葉を受け止めました。

試合中に横切る奇妙な物

私にはこれといった資格もなく、まして英語の試験があると聞いた時には、「ゾッ」としましたが、何はともあれ「行動だ！」という気持ちで受験、それがアレヨアレヨという間に二次試験までパスしてしまい、その後、駒ヶ根訓練所での77日間の辛くて楽しい語学訓練を経て、晴れて隊員となりました。

派遣国のバングラデシュは、けっして良いイメージの国ではありません。しかし、実際に住み始めて見ると、日本で騒がれているほど悲惨な状態ではなく、今ではとても有意義な毎日を送っています。

さて、私の活動であるサッカーですが、やはり途上国らしさと言いましょうか、試合中に牛や物売りがグランドを横切ったり、あちらこちらに牛のフンが落ちていたりと、見ている方はハラハラドキドキの連続です。また、とても日本ではお目にかかれないような珍プレー？が見られたり、半ば楽しんで活動していますが、その反面なかなか技術を身につけてくれず、はがゆい思いをすることも事実です。

当初この国の生徒達は、サッカーに関してかなりのハイレベルと聞いていたのですが、いざ、指導してみると技術もルールも知らず、悪く言えば草サッカーをしていた子供が、そのまま大きくなったという感じを受けました。しかし基本を中心に、ボールコントロールや基礎体力作り、イメージトレーニングを行うと共に、個人の性格プラス学校側のスケジュール調整を行ない、根気よく指導を続けています。

今後は、個人レベルの差もどんどん開いてくることと思われますが、全体の中でどのように個性を伸ばすことができるか、長い目で見てゆきたいと思っています。

「心」の貧しさと豊かさ

私たち協力隊員の活動は、多額の資金や機材を使った「大掛かり」なプロジェクトとは違い、一般の民衆の中に溶け込んで、お互いの文化・風習を尊重しながら「共に考え、共に学び、共に生きる」ことに重点を置いています。

それはただ物を与えたり、作ったりの一方的な援助だけでは、本物の意味での国の発展につながらないからです。途上国の中でも一番苦しんでいるのは、やはり民衆です。その民衆と生活レベルと同等にした時、初めて見えてくる物があります。民衆が何を考え、何を悩んでいるかを自分自身が知り、それを感じた時こそ本当の始まりであり、「草の根レベル」という小さな小さな種を蒔くことができるのです。そしてその種が途上国の自助努力によって大樹となり、立派な実をつけるに至るのです。

私たちの活動は、目に見える結果がなかなか出にくいものです。確かに、途上国の抱えている問題は様々な形で複雑に絡み合っており、それを解決するのは並大抵ではないでしょう。しかし、隊員の2年間の活動は本当に短いものであり、たとえ私たちの活動で結果が出なかったり、成果が目に見えてこなかったとしても、後に続く隊員がいつの日かきっとやり遂げてくれることと信じています。

私たち隊員は2年間の活動を終えると「豊かな国、日本」に帰ることができます。しかしこの国の人々、いえこの国に限らず世界の開発途上国の人々は環境が変わらない限り、死ぬまでずっと苦しい生活のまま暮らしてゆかなければならないのです。

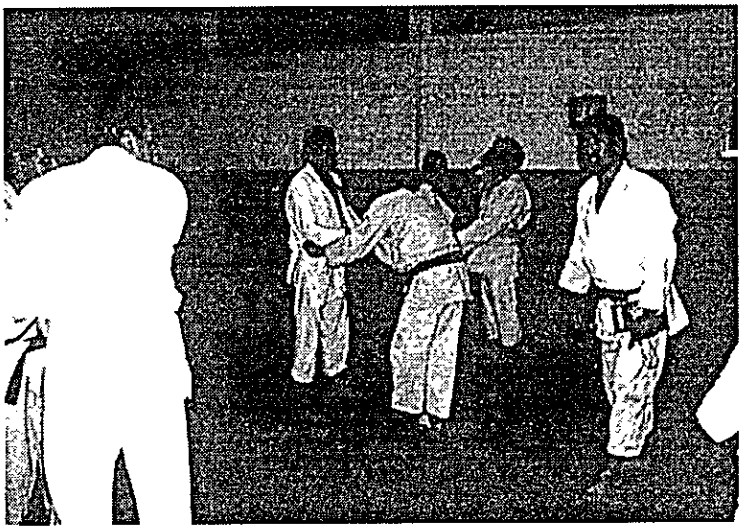
ここバングラデシュに来て、本当の心の貧しさは物ではなく「心」の貧しさであることを知りました。

そして私たちの活動により、表面的なものではなく、「心」も豊かにすることができた時、バングラデシュは本当の意味で発展してゆけるのだと感じました。小さな力でいいのです。彼らを支えてあげてください。肝心なのは物でもお金でもなく、あなたが心の奥で感じているものを行動に移すことである‥と。

(了)

Japan Overseas Cooperation Volunteers

柔　道



〈柔道〉年度別・国別派遣実績

国　名	88年度まで	89年度	90年度	91年度	92年度	93年度	94年度	95年度	96年度	97年度	98年度	総　計
バングラデシュ	3	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	4
カンボディア	3	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	4
中国	1	0	0	0	0	0	0	0	0	1	2	4
インドネシア	1	2	1	2	2	2	2	0	2	0	0	14
ラオス	6	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	7
マレイシア	36	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	37
ネパール	5	1	0	0	0	0	1	0	0	0	0	7
フィリピン	15	0	1	0	0	0	0	1	0	0	0	17
スリ・ランカ	1	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	2
〈アジア地域〉	71	3	3	2	2	3	3	2	3	2	2	96
ジョルダン	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	1
モロッコ	1	0	2	0	0	0	0	0	0	0	0	3
シリア	5	0	0	0	0	0	2	0	0	0	1	8
チュニジア	5	1	0	0	0	1	0	0	0	0	0	7
イエメン	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	1
〈中近東地域〉	11	1	2	0	0	2	2	1	0	0	1	20
ガーナ	2	1	0	1	0	1	0	0	1	1	0	7
ケニア	16	2	0	0	0	0	1	1	0	0	0	20
ニジェール	1	1	0	0	0	0	0	1	0	0	0	3
タンザニア	0	0	0	0	0	1	0	0	1	0	0	2
ザンビア	15	0	1	0	0	2	0	0	2	0	0	20
〈アフリカ地域〉	34	4	1	1	0	4	1	2	4	1	0	52
ボリヴィア	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	1
コロンビア	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1
コスタ・リカ	5	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	5
ドミニカ共和国	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1
エクアドル	0	0	0	0	0	0	1	0	1	0	0	2
エル・サルヴァドル	6	0	0	0	1	1	0	0	0	0	1	9
グァテマラ	0	1	1	0	0	0	1	0	1	1	0	5
ホンデュラス	2	1	0	0	0	1	0	0	0	1	0	5
ジャマイカ	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	1
ニカラグァ	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	1
パラグァイ	2	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	3
〈中南米地域〉	17	2	2	1	1	2	2	0	3	2	2	34
フィジー	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	1	2
パプア・ニューギニア	2	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	3
サモア	1	1	0	0	0	1	0	0	1	0	0	4
〈オセアニア地域〉	3	1	1	0	0	1	0	1	1	0	1	9
ブルガリア	0	0	0	0	2	0	1	0	0	1	0	4
ハンガリー	0	0	0	0	1	0	1	0	0	0	1	3
ポーランド	0	0	0	0	1	1	0	0	1	0	1	4
ルーマニア	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	1
〈ヨーロッパ地域〉	0	0	0	0	4	1	2	0	1	2	2	12
合　計	136	11	9	4	7	13	10	6	12	7	8	223

安斎俊哉 Toshiya Anzai

派遣国：インドネシア
職　種：柔道
隊　次：昭和63年度1次隊（活動期間1988年7月～1991年8月）
出身地：神奈川県
初　出：「武道」1993.4.1（（財）日本武道館）

オリンピックに行こう!

日本の斉藤仁選手が表彰台の頂上に立ち、君が代をバックに胸には金メダルが輝く。「ついにやってくれた」1988年の夏、私は赴任したばかりのジャカルタ郊外の警察学校内の合宿所で、選手達とソウルオリンピックのＴＶ観戦をしていた。柔道競技が始まってから連日「日本が勝つから良く見ておけ」と選手達に言ったものの金メダルが取れない。「やっぱり日本の柔道が一番ですね」と彼達に言わせたい、思い知って欲しいのに、果たされないこの気持ちは赴任直後の私を「俺もダメかも知れない」と不安にさせていた。
最終日、感動の金メダル獲得によって溜飲を下げた私は漠然と、しかし確固たる決意で「俺も頑張ってオリンピックに行こう」と考えていた。

郷に入れば郷に従え方式

預かった教え子達は非常に多岐にわたっていたので、3つのクラスを設定した。まず私と共に通年合宿生活を送る現役インドネシア人2名、同強化選手4名（いずれも警察官）、各地から集めた高校選手（警察官の子弟）6名をインドネシア代表を目指す強化グループＡ、次に自宅から通勤の警察学校の教官チーム（約15名）を全国大会上位入賞を目指す強化グループＢ、そして年間400名を越す警察学校の生徒達と常時50名以上の一般愛好者だ。
日の出から日没まで完全な絶食を行う回教徒の苦行である断食期間でも練習は継続した。一般の部の子供達は断食開けの行事の後、午後9時頃からいつもよりは軽めではあるが皆で集まって楽しく汗を流していた。しかし強化グループは通常通りのメニューで練習していたので、とても楽しめる状態ではなかったと思う。
一日続く断食に備え午前4時前には朝食をとる。お祈り後の午前5時には、すでにトレーニングが始まっている。トレーニング後も喉を水で潤すことができない。喉が乾き、空腹感が募る頃、断食終了2時間前稽古が始まる。
力も出ない、動きも鈍くなってくる。いつもはできることができない。「バカヤロー、なんでできないんだよ、おい、気合い入れて行けよ！」怒鳴る私。最古参の選手が冗談めかして言う。「断食中に怒るなんて人間が小さいと思われますよ」全くその通りである。いくら一緒に断食して稽古しているとは言え、先生である私と彼達の疲労度が違うわけがない。皆きついのは同じなのである。彼らはこのムチャクチャな先生を立ててくれたのである。彼らの方がよっぽど人ができている。
400名の警察学校の生徒達は軍隊的規律の中で生活させられ、教練は非常に厳しそうに見えた。警察護身術／逮捕術は全教練の中で最も時間数が多かったので、当局も重視しているのだろうが、3時間半を一気にやってしまう教官がいたのにはビックリした。教え方は基本に忠実で良いのだが、遊びがない。教官が教官なら生徒も生徒である。2、3時間も受け身の練習ばかりで良く音をあげないものだと感心してしまう。それだけ上位の者には従うという階級制度が浸透しているのだろう。ここでは警察官も第4軍隊なのだと痛感する。
しかし生徒達は初めて接する柔道に興味を持ち、きつい授業も「これがあたり前」と思って頑張っていた。彼らの中には卒業後、地方の配属先でも柔道を続けている者が多く、巡回指導などで地方を尋ねると懐かしい顔に出会ったりする。彼らの話を聞くと地方での柔道普及にかなりの貢献をしているようだ。

頑張る選手達

こうして活動環境の整備をしながら稽古に励んでいたが、同時にナショナルチームのコーチをする機会に恵まれ、柔道協会や代表選手の方針や希望などを知ることができた。私がコーチになった当初のインドネシアは東南アジア大会で勝つことを最重点目標にしており、他の国際試合は重要視されていなかったが、3年がかりで実績を作り北京でのアジア大会、大阪でのアジア柔道大会、福岡国際等のメジャーな試合に少しずつ参加していった。
結局、そうした積極的な活動と成果が体育協会に認められオリンピック参加（男子選手2名、女子選手2名）が決まった。選ばれた女子選手1名（警察官）と男子選手1名（高校生）は強化グループＡの教え子達だった。

「選手が敗れたらそれはコーチの責任。選手が勝ったらそれは選手自身の力によるものだ」と考える私は、全く逆の考えをするコーチ陣とは、試合に勝とうとする気持ちは一緒ではあるが、なかなか意見が合わなかった。代表選手の選考でも遠回しに「アンザイ先生の選手はこれまで実績がないから」と否定されたこともあった。かわいそうなのは選手達であったが、私は悔しくて悔しくて「誰にも文句の言わせない実績を作って見返してやろう」とスローガンを掲げ、やたら練習した。そうして、とうとうオリンピックにも選ばれるまでになったのだ。がんばった選手達には素直に頭が下がる。出来の悪い先生を立派な生徒達が助けてくれたのだ。

練習の成果を実感した時

この4年間でいちばん嬉しかったことをひとつあげるとすれば、1990年の全国大会のことであろう。大会2日目、すでに優勝していた52kg以下級の女子選手スギアティに無差別級にエントリーしてあることを告げた。「絶対通用するから、おもいっきりやってみろ！」と渋る彼女にはっぱを掛けて送り出した。試合は苦戦が多かったが常にポイントを取得して準決勝まで勝ち進んだ。その準決勝は2試合共通、同門対決となり52kg対72kg、61kg対66kg級の組み合せとなった。試合はそれぞれ上の階級の選手が決勝に進み、アジア大会3位の72kg以下選手が優勝した。3位決定戦に回ったスギアティ選手は72kg超級の優勝者と対戦し、体重差30kgをものともせず積極的に攻撃したが、背負投げを掛けては潰されるという繰り返しである。残り時間は1分ぐらいだったが、背負投げを潰して上から締め技にくる相手を、素早く体を翻し関節を取りにいったのだ。「うまい」練習通りだ。このあとがすごい。関節が決まらないと見るや四つん這いの相手の上方につくと、何と三角絞めに攻めたのだ。後帯を持って、引きだして、足をフックして、ゴロリと横倒しにすると素早く柔道衣を利用して相手の手を制する。「うーん、さすがだなぁ」。まるで打込みをするように1、2、3、　と手順通りに三角絞めから抑込技への連絡技が完成していった。皆で研究した松村茂也先生のお手本通りではないか。30秒後の一本勝ちに会場からはため息が聞こえ、やがて「おお」というどよめきが起こっていった。この時のベスト4が1年後の東南アジア大会では全員優勝し、無差別級をも手中にするのである。この試合のように練習した成果がはっきりと現れた時が、やはりいちばん嬉しいものだ。

次なる頂上

私は中学時代に鈴木満先生、大学時代に恩田東周先生という良き師に巡り会い、近年は自分には恐れ多い程の立派な先生方からご指導を承っているが、「はたして自分はインドネシアの教え子達にとって良き先生だったのだろうか？」と先生方の姿を拝見するたびに思うのである。先の例のように、松村先生の技は選手の身になっているが、私の指導を受けたことで何がしかの身のなる木でも見つけてくれただろうか。

1992年夏、私はバルセロナの柔道会場にいた。試合結果は予想通りであったが、選手は一生懸命戦った。私もやれるだけのことはやったと思うが、数ヵ月たった今は冷静に考えられるので、反省点や新たなアイディアも浮かんで来ている。4年前の大目標は現実のものとなり、充実感あり満足もしている。しかし実際は、苦労して頂上まで来たら、登らなければならない高い頂きが幾つも目前にそびえていた。参加はしたが初勝利はいつか？入賞するのは？メダルを取るのは？そして金メダルは？　まだまだやらなければならないことが腐るほどあるのだ。私など考えが甘すぎるのだ。世界の頂点に立つための道のりは立った人しか分からないのだから。だが、どこまで行けるか試してみるだけでも意義は大きいと思う。もし機会があれば、もう一度挑戦してみたいものである。

（了）

金子　晃 Akira Kaneko

派遣国：ネパール
職　種：柔道
隊　次：昭和59年度2次隊（活動期間1984年11月～1989年2月）
出身地：広島県
初　出：「武道」1989.11.1（(財)日本武道館）

ネパールの柔道を指導して

今年の3月末、4年3ヵ月に及びネパールでの生活に別れを告げた。ヒマラヤに抱かれた王国に赴任したとき、青空から大歓迎してくれた白い峰々も、離れる時は雨季遠からぬ季節で、すでに厚い雲に隠れてしまっていた。

在任中、青年海外協力隊員としてずっと柔道を指導したが、それ以前は平凡なサラリーマンを続け、海外へ出たことはなく、また出ようとも考えなかった。ひょんなことから青年海外協力隊の存在を知り、募集要項のなかにあった柔道という職種、発展途上国で指導する、ということに妙に興味をかき立てられた。

オリンピック競技として定着し、世界中に広まった柔道であるが、発展途上国といわれる国々は、あまり表舞台に登場してこない。

「これらの国では一体どんなふうに柔道が行なわれているのだろうか」という素朴な疑問が発火点となった。学生時代は選手生活を送りながら自慢できるような戦績を残せず、社会人になってからも趣味として細々と続けるばかりだっただけに、よけい新鮮に感ぜられたのである。「もし柔道不毛の地であれば、自分の力が最大限に試されるのではないか」－夢は膨らんでいった。

募集説明会の会場に足を運び、シリアで指導されたOB隊員の体験談をきいて参加の意志は固まった。試験にも運よく合格し、3ヵ月の訓練を受け、1984年12月に他の職種12人の仲間と共にネパールの土を踏んだのである。

ネパールの柔道は1969年に警視庁の坂入7段（故人）が紹介してから幕を開ける。以来、協力隊員が指導を受け継ぎ、私で5代目となったが、この国では長い間、民間人が柔道や空手を習うことが禁じられ、その指導は警察内の訓練のみに限られていた。それが近年解禁となり、私の赴任前には柔道協会も発足したという情報も得ていた。新しいスタートに関われるという意気込みで乗り込み、警察官相手の指導を続けながら、将来へ思いをめぐらせた。

しかし、発足したはずの柔道協会は実は全く動いていなかった。関係者に尋ねても歯切れが悪く、一時は絶望しかけたが、それなりの準備はなされていたと知って救われる思いだった。中心人物は国内でも力のある人で、1985年2月の講道館巡回指導をきっかけに、マットや柔道衣の試作品が出来上がり、当面のプランが話し合われた。赴任半年あまりして、民間での訓練がスタートを切ったのである。

しかし用具の不備に加え、柔道そのものがよく理解されていなかった。香港製カンフー映画のようなものが習えると思っていた者が大勢いた。学校体育は確立されておらず、食糧事情も悪いためか運動能力が低く、これも指導をやりにくくする原因となった。また「こんな貧しい国で喧嘩の仕方なんか教えて何になる」といった声も聞かれた。新聞やテレビを使い、セレモニーの機会を利用して柔道を紹介し、理解を深めてもらうように努力した。生徒への指導もいかに技術体系を理解させ、興味を持たせるか、練習方法の工夫が必要だった。思い返せば、現地人の固定観念に対する戦いが活動の大きな側面だった。

さて、新生の柔道協会による初のネパール選手権が開催されたのは1985年10月だった。民間訓練生はキャリア不足で警察官ばかりの大会となったが、一般に門戸を開いたことは画期的なことで、同時に国際舞台進出にも希望をつなぐこととなった。

この間、日本からさまざまな援助を受け、次第に体裁を整えながら翌年8月には第2回大会が開かれた。財政的な理由で計画倒れとなった海外遠征の代わりとして、インドのカルカッタから選手を招待した。9月の韓国ソウルにおけるアジア競技大会には2人の選手が国際試合初参加を果たした。その前には講道館での3週間のトレーニングが実現する。ソウルでは翌年3月の第1回南アジア選手権ネパール開催が決定された。

もちろん紆余曲折は多かった。こちらがよかれと思って提案あるいは実行しようとしたことがわかってもらえぬもどかしさ。それが往々にして相手のペースやリズムを無視した一人よがりであることを知るのには時間がかかった。協力隊員の多くが経験する大きな壁に私も突き当たったわけである。

1988年のソウル五輪にネパール柔道が初参加し選手2人が派遣された。大舞台での初戦敗退は仕方がない。それよりも世界規模の大イベントへ参加したこと、5～6月と大会直前に2度も日本でトレーニングしたことは貴重な体験であった。これを生かして今後

よき指導者になってくれるよう願っている。日本では講道館をはじめ大学や私営道場の方々が快く練習場を提供してくださったが、感謝にたえない。

柔道を通じた「仲間」のありがたさはネパールでも体験した。この国にはヒマラヤをめざして世界中から観光客が訪れるが、道場にもさまざまな柔道愛好者が一緒に汗を流したいと訪れ、旧知のような交流ができたものである。

日本での滞在中も各方面からの心温まる交流があり選手たちに強い印象を与えたようである。講道館で開かれた大会を見学したとき、それが中学生だと知ってネパールの選手が目をむいた。「日本人は小さいのに、柔道の選手だけは今の年齢でこんなに大きいのか。これじゃあ、オレたち追いつけないよ。ネパールはたべものもよくないしなあ」と嘆息したものである。

ともあれ、赴任当初を思えば大変な躍進ぶりである。ところが、早いテンポの進展が次第に歴史や底辺を無視した過剰な期待にもつながった。好成績を要求され、そのため一部の選手に強化が集中しがちとなって新たなジレンマが生まれたのである。「広く大衆に柔道の正しい効用を伝えたい」という当初の意気込みは現地の事情がわかってくるにつれ、また国際的に進出するようになって重く肩にのしかかってきた。アジア選手権を観戦した役員は、中近東の選手がタックルで小ポイントを稼いで勝つのを見て、「ネパールの選手もあれを覚えなくてはダメだ」と言った。スポーツとして割り切り、国際試合で好成績をあげて人気を集め、五輪競技をアピールして競技人口が増えればよしとしなければならないのであろうか。私には反論できなかった。勉強不足と言葉の足らなさが歯がゆかった。

日本に対するネパール人の憧れは想像以上である。日本の伝統文化としての側面を伝えるのが協力隊員の役目ではないか。勝った負けたを教えるだけなら、いまさら日本人だけの指導者でもあるまいに‥。異国の空の下で、いろいろなことを考えた。理想と現実に挟まれて、結局は技術だけを伝えて（それも十分とは言えず）終わってしまったというもどかしさは残る。

民間に普及し、国際試合に出場することは先達の隊員の人々の悲願であった。その苦労の積み重ねを土壌に、ネパール柔道はいま新たな出発期を迎えていると思う。今年7月には国際武道大を卒業したばかりの若い後任者が6代目として出発した。活躍を見守りたい。5年後には私の郷里である広島でアジア大会が開かれる。ネパールの柔道選手はやってくるだろうか。さまざまの思いにとらわれながら4年余の滞在をふりかえるこの頃である。

（了）

高橋一男 Kazuo Takahashi

派遣国：フィリピン
職　種：柔道
隊　次：昭和61年度2次隊（活動期間1986年12月～1988年12月）
出身地：岩手県
初　出：「武道」1990.7.1（(財)日本武道館）

羽ばたけ比国柔道

昭和62年12月6日、小雪の舞う岩手から羽田空港へ向かう新幹線の車中で、私の頭の中は異国の生活についての期待と不安でいっぱいだった。柔道整復師として勤める斎藤整形外科（岩手県北上市）のみなさんの協力で2年間休職し、青年海外協力隊に参加することになったのである。

任地はフィリピンの首都マニラの北方250キロ、高原の町バギオである。YMCAを中心に活動することになったが、ここの柔道場は前任者の努力で日本製の畳50枚が敷きつめられており、質量とも申し分ない。私は3代目にあたるが、午後4時ごろから初心者クラスのアドバイザーとして、同6時～8時は上級者クラスを直接指導した。

到着して1ヶ月後、最初の指導が始まった。久しぶりの柔道着に気持ちが引き締まる。だが、乱取りが始まると、黒帯の連中が私の技で簡単にふっとんでしまうのだ。こんな実力で本当に国際選手に育てられるのだろうか。次の日、上級クラスに顔をみせたのは、たった3人だった。「ほかの者は？」と聞いても「わからない」という。

こんな日が数日つづいた。休まずやってくる3人を相手に身体づくり中心のトレーニングを続けた。ある日、練習後に3人を食事に誘った。ジェリーとダニーとマイルズ。黙々と食べるだけの3人に対し「2年間は私を信じてついてきてほしい。柔道をやっていてよかったと、必ず思えるようになる」と訴えた。3人は黙ってうなずいた。

その後も苦しい練習の日々がつづいたが、日を追うごとに1人、2人と生徒が増えていった。教えることの難しさを痛感した日々であった。

3ヶ月たったころ全フィリピン選手権がマニラで開かれた。私の心は不安でいっぱいだった。「練習が裏目に出たら彼らは不信を持ち柔道を離れてしまうのではないか」「いや、きっといい試合をやってくれる」ー開会式のあと選手全員を集め、手を握り合って「かならず勝つ」と気合を入れた。

最初の試合はダニーだった。いままで1回戦ボーイだった彼の相手は前回優勝のナショナルメンバー。主審の「始め！」の声が消えぬうち、ダニーの目の覚めるような一本背負いが決まって相手は宙を舞い、会場がどよめいた。この1勝が他の選手を奮起させ、なんと金メダル4、銀メダル2、銅メダル2という信じられぬような結果を生んだのだった。

ジェリーもみごとだった。決勝戦で相手に技有をとられ不利な戦いになったが、私が口ぐせに言っていた通り、攻めて攻めて攻めまくり、終了8秒前に見事な内股1本を決めて大逆転劇を演じたのだ。

また、ひ弱なマイルズは、がんばって3位決定戦まで進んだ。微妙な判定勝負になったが、わずかの隙をつかんで大きな体の相手を裏技に引き込み、小さな体を精いっぱい使って30秒間抑えこんだのだ。涙をあふれさせ、ワーワーと大声で泣きながら私にしがみついてきたマイルズ。引っ込み思案の彼も一気に明るい世界へ飛び出したようだった。

バギオへ戻って練習再開。彼らの輝きは昨日のそれではない。ある者は1時間も早く道場に姿を見せた。私も心新たに指導に打ち込んだ。そのころ、マニラからナショナルメンバーが遠征にやってきた。ところが、合同練習会で私たちの内容の濃い練習についてこられず、試合もせずに帰ってしまった。「なんだ、あんな程度なら明日から練習しなくても大丈夫だ！」ー見くびった生徒の中から、こんな声が聞こえた。私は烈火の如く怒った。「そんなことはオレを投げとばしてから言え！ナショナルメンバーより強いからといって天狗になるな。目標は日本だ。オレより強いのがいっぱいいる日本柔道なんだ」

その後も日本からビデオを取り寄せるなどして練習の大切さを教えた。

6月になって松前杯柔道大会がビゴールで開かれ、台湾からも選手が参加した。国際大会と言うことで観衆も多かった。バギオからは7人が参加した。体重60kgのダニーが無差別級に出場し、デカい相手を破って見事優勝、「これが柔道だ」ということを見せつけた。フィリピン選手の入賞は6人だったが、全員バギオ勢が占めたのであった。バギオに戻った私たちは市民の大歓迎を受け、練習にもますます熱が入ってきた。

そんな有る日、私の友人数人がバギオに遊びにきた。話しているうち、名案を思いついた。生徒たちと試合をしてもらおうというのだ。「オレたちは素人だよ、相手になるわけないじゃないか」と友人たちは尻ごみしたが、日本人の姿をぜひ彼らに示したい

のだというわたしの熱望を断りきれずOKしてくれた。試合の結果は言うまでもない。日本チームの全敗だった。試合後、友人の1人は生徒たちに「私たちは中学と高校の体育の授業で柔道のまねごとをしただけです。みなさんに負けるのを覚悟して、挑戦しました。熱心に稽古している姿に心を打たれたからです。いつの日かみなさんの中からオリンピック選手が生まれるよう望みます」と感想を述べた。生徒の中で年長のローリンは「相手が黒帯の日本人なのでビビりました。日本人のチャレンジスピリットは立派です。日本柔道に少しでも近づけるようがんばります」と言って固い握手を交わしたのだった。

きつい練習が続いた。やがて柔道協会から吉報が届いた。8月の東南アジア大会に出場する5選手のうち、バギオから3人を出すという。60kg以下級ジェリー、65kg以下級フレドリック、71kg以下級ローリー、そしてコーチとして私が同行することになった。

試合会場はインドネシアのジャカルタ。初日にフレドリックが出場したが、練習中に痛めた肩の故障がひびいて敗れた。2日目のローリーはスタミナ切れでダウン。最終日はジェリー。快進撃をつづけて決勝へ。練習通り粘り強い柔道をみせ、横四方固で勝って堂々の優勝を飾った。フィリピン国歌を表彰台で聞いたあと、彼は私の胸にとびこんで泣き崩れ感動をかみしめていた。

やがて全フィリピン団体選手権が開かれた。1チーム7人のトーナメント。バギオからはA、B2チームが参加した。Bチームは2回戦で姿を消したが、Aチームは競り勝って決勝へ進んだ。相手はナショナルメンバーをそろえ、バギオを倒す目的で編成された強豪チーム。引き分けが続く大接戦の中で中盤、貴重な1ポイントをバギオが奪い、大将戦もがんばって引き分け、ついに初の栄冠を獲得した。私が赴任して10ヵ月、苦しい練習を積んでチャンピオンの座をつかんだ生徒たち。苦しみに耐えたあとの喜びの大きさを実感したのではなかろうか。

選手権を終わって12月のクリスマスイブ。町はひっそりし、教会で祈りをささげる。部屋で1人、ポツンと故国を思い出していたときチャイムが鳴った。なんと暗闇の中に20人ほどの顔が並んでいた。まさしく生徒たち。美しいクリスマスソングのプレゼントだった。私は涙が出そうになった。

新年を迎えて私の任期も残るところ10ヵ月余になった。英語学校に通い、士官学校や市内の高校で柔道を教え、友人の輪は広がっていく。心あたたまる思い出が多くできた。

バギオの進撃は止まらない。全フィリピン選手権で28人の選手を送り22人入賞。次の国内試合はバギオ勢が優勝を独占した。

柔道人口が増え、柔道着の痛みも激しくなった。新品を買えばサラリーマンの1ヵ月分の給料がとんでしまうほど高価な柔道着。私は日本に事情を訴えた。先輩から、海外協力隊を育てる会から、たくさんの中古柔道衣が贈られてきた。生徒の喜ぶ顔を見ながら深く感謝した。

任期もあと半年。全フィリピン団体戦に連覇することと、決戦はバギオ同士で行なうことを目標に掲げた。「生涯の思い出に」という私の要望に彼らもうなずいてくれた。強化合宿の猛練習を積み、万全の状態でマニラへ乗り込んだ。

彼らの目つきは変わり、気合が充実していた。A、B両チームとも破竹の勢いで準決勝まで勝ち進んだ。だが、ここでBチームが僅差で敗れ3位。目標の1つが消えた。だがAチームは完璧の勝利だった。優勝を決めた瞬間、試合場で私を胴上げした。汗と涙で顔をくしゃくしゃにして　。私の生涯に深く刻みこまれた瞬間だった。

帰国は昭和64年1月6日に決まった。彼らに知らせるべきか迷ったが、結局だまって出発することにした。そして1人1人に心をこめた手紙を書くことにした。親友のリチャードに頼みタイプを打ってもらった。

出発の前日、普段のように練習した。そのあと「あすから3日間は練習休み。帰国前に小旅行したい。お別れパーティーのプランでも考えておいてくれよ」とウソをついた。

バギオ出発の日は1人で道場に入った。正面に嘉納治五郎師範の肖像、両脇に日比の国旗、そのまわりに思いで深いトロフィーや写真。愛着の思いが私を包む。手紙を1つ1つ、一列に並べていった。そして正座し、目を閉じた。

最後の日、マニラから電話した。電話口に出たジェリーは泣き声だった。空港にはリチャードが1人で待っていた。「これ、みんなからの手紙だよ」と大きな袋を渡してくれた。ゲートをくぐった瞬間、リチャードが叫んだ。「結婚して嫁さんを見せに来いよ！」ー思わず吹き出した。いままでの重苦しい感じがスッと消えた。大きく手を振って飛行機に乗り込んだ。

私にとっては出来すぎの2年間だったと思う。選手権で2連覇し、ジェリーは東南アジアのチャンピオンになった。彼はソウル・オリンピックにも行き、1回戦29秒で負けたが、大きな精神力を身につけたと思う。フィリピンでは柔道が強くても社会的地位が上がるわけではない。1クラブチーム員として会費を払って苦しい練習を続けた。この経験が彼らの人生に役立ってくれれば、と願う日々である。

（了）

岩井貴人 Takahito Iwai

派遣国：モロッコ
職　種：柔道
隊　次：平成2年度2次隊（活動期間：平成1990年12月～1992年12月）
出身地：岐阜県
初　出：「武道」1994 6.1（（財）日本武道館）

カスバの国の柔道

乾いた風が迷路のように入り組んだ路地の中を吹き抜けてゆく。舞い上がる砂埃、荷を引くロバを横目で追いながらカフェで甘いミントティー。伝統的なアラブ文化と西欧文明が渾然と溶け合い、過去と現在が交錯する大地、北アフリカ。

ここは地の果てモロッコ。首都ラバトより海に沿って約100キロ下った国際都市カサブランカ。この地で私は青年スポーツ省カサブランカ支局に柔道指導員として配属され、2年間にわたって市内の柔道クラブで指導する機会を得た。

モロッコでは国民的な人気を誇るサッカーに比べると、残念ながら柔道の人気・知名度はあまり高いとは言えない。とは申せ柔道連盟の中には過去地中海大会やアフリカ大会で優勝経験を持つ指導者も何人かおり、彼らの中には日本の講道館や東海大学、天理大学といった日本柔道の精髄の地を訪れた人もいるから、その指導水準は決して低いものではない。もっとも、そうした指導者がたくさんいれば私の出る幕はないわけで、全体的に見ると、いろいろ問題は多い。

悪条件の中の情熱

私は市内で3つの柔道クラブを掛け持ちしていたが、選手（子供も含めて）の柔道に対する取組は非常に真剣だった。豊かな日本に生まれ育った私達には、あまりピンと来ないかも知れないが、モロッコでは日本のように学校教育としての柔道というものがなく、人々（子供から大人まで）は月謝を払って柔道場に通ってくる。だから彼らには月謝代はもちろん、それ以前に柔道着を買えるだけの金銭的余裕が必要なのだ。

また、こちらでは畳のあるクラブは少なく、道場が狭いうえ、たいてい足の滑りやすいマット、ひどいところになるとコンクリート製の柱（一応マットでくるんであるが）が立っていたりする。さしたる困難も感じることなく柔道着を手にして広い畳のある道場で存分に稽古できる私達に比べると、彼らモロッコ人は金銭的、環境的な障害を幾つも乗り越えなければならない。だからこそ、強くなることへの憧憬、情熱は純粋で深いものがあるように感じられた。

練習に耐えた彼ら

そんなある日、私が指導しているクラブから、2人の生徒が20日後に迫った昇段審査会で初段を受ける旨を知らされた。私には初耳だったので、どんな「形」なのか目の前でやらせてみてびっくり、あまりにも下手である。

「投の形」は順序は良いとしても、個々の技はバラバラで、技の理合いなどあったものではない。当然、日本人指導者のいるクラブとして、どんな「形」を行なうのか否応なしに他のクラブの注目を浴びることは間違いない。加えて審査会までの時間が少ないので、いきおい指導はかなり厳しいものになった。

同じ間違いに対しては容赦なく怒鳴り散らし、私自身が「投の形」の「取」と「受」を何度も何度も繰返し演じ、説明した。また講道館からいただいた英語で書かれた写真の豊富な柔道の本から「投の形」の部分をコピーして渡し、名称と全体の動きがわかるようにした。

彼らの「形」を通して「なんだ日本人の指導者がいても、こんなものか」と言われるのを恐れ、日によっては、つきっきりで2時間半、休憩なしで「形」の練習をしたこともあった。2人の生徒も最初は私の要求する動きが細部にわたって厳しい上に、叱責が激しいので頭が混乱し、幾度となく同じ間違いを繰り返したが、コピーの紙をしっかり読み、指摘を頭の中で整理するようになり、当日の3日前くらいには急速に上達していった。

さて昇段審査会の当日、彼らには「とにかく自信を持って今まで通りの"形"をしなさい」と励まし、隣の会場で彼らが行なう「投の形」をまるで自分が受けるような気持ちでドキドキしながら見ていた。しかしながら、本番は2人の呼吸も良く合って、1つ1つの技も正確で堂々としており、他の受験者の「形」を圧倒するものになった。すべてが終了した後、生徒達は一目散に私のところに駆け寄り、興奮した顔で「みんなが僕達の"形"を最高だと誉めてくれた」「試験官が途中で紙の上にボールペンを投げ、僕達の"形"に見とれていたと友達が教えてくれた」な

ど、喜々とした笑顔で早口にまくしたてる。そして「先生のおかげで合格できました。心から感謝します」と何度も言われた時、私の胸につかえていた黒い雲が切れ、無上の喜びが膨れ上がったのである。

想いは海を越えて

モロッコで過ごした柔道の日々に想いをめぐらす時、私の胸には尽きることのない感慨が次から次へと沸き上がってくる。道場へは誰よりも早く着き、稽古が終わっても最後の1人が帰るまで畳を離れぬよう心がけた。日々の稽古も一期一会。厳しい稽古も終われば彼らの家に招かれて、モロッコの代表的な料理「クスクス」を食べながらモロッコ人の好きな宗教談義に耳を傾ける。イスラム教の素晴らしさについては、耳にタコができるくらい教えてくれた。

日本へ帰った後も時々思い出したように手紙をくれる彼ら…。自分を暖かく受け入れてくれたモロッコの人々への感謝の思いと共にモロッコ柔道の発展を心から願っている。

（了）

山本竜正 Tatsumasa Yamamoto

派遣国：ケニア
職　種：柔道
隊　次：昭和62年度2次隊（活動期間1988年1月～1990年4月）
出身地：広島県
初　出：「武道」1989 9.1（（財）日本武道館）

青年海外協力隊員は現地の人々と同じ言葉を話し、同じところに住み、同じものを食べ、自ら利益を求めることなく、ひたすら開発途上国の新しい国づくりに協力している。派遣職種はさまざまな分野にわたり、それぞれ活発な活動を展開している。今回はその1つ、ケニアでの柔道の指導に活躍している隊員のレポート。

＊　＊　＊

ケニアの印象

昭和63年1月11日の早朝、私は青年海外協力隊員としてケニアに到着しました。空港から首都ナイロビへ見渡すかぎり草原が続きます。ナイロビに近づくにつれ、人々がどこからともなくあふれだし、自分の職場へと歩いていくのですが、これがまたすごい数。満員電車ならぬ満員ウォーカーズとでも言いましょうか。同市には近代的ビルが林立しビジネスマンがあふれています。

ケニアは赤道直下ですが、ナイロビを中心としたセントラル地区は標高が1700メートルほどなので1年を通してすごしやすい気候です。言語は英語とスワヒリ語。それと部族語があります。また東アフリカの玄関口になっているだけあって、生活に不便を感ずることはまずありません。しかし、一般庶民の平均年収と物価をみると生活は楽ではなく、途上国の常としてみられる"貧富の差"があるようです。

刑務官学校

ナイロビから北へ30キロほど行ったところに私の任地、Prison Staff Training College（刑務官学校）があります。ここはもう"立派な田舎町"です。野菜を買うにも、家から5キロ先に行かなければなりません。スワヒリ語で「ポレポレ」という言葉がありますが、意味は「ゆっくりゆっくり」。社会全体が「ポレポレ」なのです。

さて、ここでの仕事は約600人の刑務官候補生に授業で護身術を教え、刑務官の柔道部員に柔道を指導しています。仕事の中心は、授業よりも、このクラブです。

ここでエピソードを1つ。任地に入った日から稽古があったのですが、体調が悪かったので1週間ほど自主トレを行ってから彼らと乱取りなどを始める予定にしていました。基本が出来ていない彼らに、初日は打ち込みとトレーニングだけを行ったのですが、それが不満らしく、はじめ素直だった彼らが、午後になると何やら文句を言いだしたのです。

彼らは私に不信感を抱いてる様子でした。「仕方ない。こんな文句ばかり言われ続けては」と思い、翌日の稽古から乱取りを開始しました。体の大きな順に2、3本ずつ投げたのですが、1番文句を言っていた部員に「乱取りをしよう」と声をかけると、「私はまだ基本が出来ていないので先生とは乱取りが出来ない」と言います。稽古が終わる前に打ち込みをし、彼にも前日と同じアドバイスをしました。なんと、大きな声で「イエッサー」。文句を言うどころか「サー」づきの返事です。「代わり身の早さは3段なんだけどなァ」と妙な関心ををしたものです。

盲人学校での指導

私は刑務官学校のほかに盲人高等学校でも柔道を指導しています。ケニア隊員OGから「任地の近くに柔道をやっている学校がありますよ」と聞いていたのでさっそく行ってみました。数少ない部員の半数が手製の道着で、畳の替わりにズタ袋をマットにしています。せまい教室の1つを道場にしているため"乱取りはあぶないな"と考えていたのですが、それほど問題ではなかったのです。ここの部員たちはほとんどが全盲なのですが、部屋の広さを肌で覚えているらしく、乱取りを行っても事故はありません。このThika High School of Blind（盲人学校）へ行くようになって約1年ほど過ぎたころ、私のためにパーティーを開いてくれました。デモンストレーションと懇親会がありましたが、練習試合の際、小さな事件が起こりました。最後まで勝ち残った生徒は、柔道部のメンバーの中で1番小さくて軽く、しかも全盲です。しかし、彼は私が教えた背負い投げで皆を投げ飛ばしたのです。私自身、この生徒がここまで頑張るとは思っていませんでした。よく考えてみれば、彼は稽古を1度もサボったことがありません。他の生徒は稽古に来ないことがよくあるのです。

"継続は力なり" という言葉がありますが、まさに「これだ」と強く感じた出来事でした。

その後の懇親会で、私は生徒たちに聞いてみました。「柔道とは何ぞや」ー彼らは口々に「強くなるため」「楽しむためだ」などと答えました。私は「柔道を行うこと1個の人間を創るための1つの道なんだ。いま君たちが勉強していることも、他のスポーツを行なうことも、とても大切なんだ。もちろん私も未完成の段階で君たちと同じなんだよ」と語りかけたのですが、話を聞いて喜んだのは校長先生だけで、生徒たちにはピンときていない感じでした。

ケニアの柔道

昨年のソウル・オリンピックに、ケニアからは4人の選手が出場しました。結果はみごとに初戦負け。この時は私と久米貴志4段（OB）とキム氏（ケニア柔道ナショナルコーチ）の3人でナショナルチームの指導にあたりました。が、本人たちの自覚の無さが手伝って、あまり満足のいく練習はできませんでした。

私の任地では年が明けて学校長が代わってから少しずつよくなっています。前の校長はスポーツが嫌いだったらしく、稽古のための時間をもらえませんでした。しかし、あきらめずに続けてきたことがよかったと思います。最近では、私のまわりにいる人たちが皆で頑張って柔道部を強くしようと動いています。ケニアの友人たちは、貧しくともいつも笑顔であふれています。"物" に恵まれすぎた日本に思いをはせ、心の豊かさについて考えこんだりします。

（了）

山本竜正 Tatsumasa Yamamoto

派遣国：ケニア
職　種：柔道
隊　次：昭和62年度2次隊（活動期間1988年1月～1990年4月）
出身地：広島県
初　出：「武道」1990.1.1（（財）日本武道館）

ケニアの柔道指導

私はケニアに来て、2年近く柔道の指導をしているが、最近強く感じることがある。それはシステムの違いである。先進国だと、自分が始めたいことがあれば、ほとんどの物事はすぐに始められる。しかし、ケニアではそうはいかないということ。

このシステムの違いは柔道の指導にも響いてくる。たとえば柔道着である。日本だと、近くの運動具店か武道具店に行けばすぐに手に入る。しかし、ここでは売っていない。柔道着に似たような物を作ってみようと思ったが、生地の値段が高すぎて無理だ。結局、日本から送ってもらった（柔道着をケニアに送っていただいた早川繊維工業・徳山大学には深く感謝しております）。それを、出来るだけ他のクラブにも分けたのだが、その後「先生うちにも柔道着をもらえないだろうか」という声がたくさん出て来て困ってしまった。彼らケニア人たちは、映画などの影響で日本の武道に対し大変興味をもっているのである。

システムの違いといえば、私の任地Prisons Staff Training College（刑務官学校）もそうである。授業の必須科目として武道（柔道・空手）を取り入れているが、時間割りがメチャクチャ。なにしろ柔道の稽古は1週間に3時間という枠しかもらえなかった。生徒数は600を越えているのに、この時間割りだと、まともに指導出来ない。そこで担当者に時間割りをきちんと作るよう相談したのだが「次の候補生から」と言われ、安心したのが間違いのもとだった。

私がこの学校に来て2度目のコースも同様の時間割。この時はついに頭に来た。しかし、怒っても仕方がないので、説明に説明を重ね、やっと3回目のコースでよい時間割りをもらうことが出来た。1クラス40名で週20時間。今回は800名の生徒だ。このように、ここではインストラクターだけではなく、コーディネーターも兼ねなければならない。システムを作るのも重要な仕事の1つだと思った。

任地のほかに、盲人高等学校（Thika High School of blind）で週2回柔道指導をしているが、2年近く教えてやっとこのたび昇級試験が行なえる運びとなった。色帯のことは恥ずかしながら知識が無い。日本から色帯を送ってもらったので、自分勝手に白・黄・オレンジ・緑・紫・青・茶と段階をつけて渡すことにした。部員数は14人。さすがに休まず稽古をしてきた者は、青や茶帯を手にすることになった。だが、白帯のままの者もいる。「先生、もっと頑張って稽古するから、また昇級試験をしてね」と言ってきた。「ようし、これから一緒にもっと頑張ろうな」と一声掛けると、「オス！」と元気ある声が返ってきた。

12月には上級生6名が卒業し、またそれぞれの道を歩むことになるのだが、柔道の稽古で頑張ったように、これからの仕事でもぜひ頑張ってもらいたいものだ。

ここの生徒の中でも印象深く、私の頭に浮かんでくるのはムトゥメ君だ。昨年の8月末に日本から柔道の使節団がケニアに来た。菅原先生を団長に、射手矢5段、八戸5段、今川5段と錚錚たる顔ぶれである。形のデモンストレーションを始め、いろいろ教えていただいた後、ケニア人選手による試合を行なった。その時、ムトゥメ君は堂々3位に入賞したのである。閉会式も終わり後片付けをしている時、彼に「おめでとう」と声をかけに体育館裏に行った。「先生、アサンテサーナ、アサンテサーナ」と泣きながらくりかえし言っていたのを思い出す。"アサンテサーナ"とは、スワヒリ語で"ありがとうございます"という意味だ。

ケニアでは、月に1度の割合で柔道の試合が行なわれており、そのほとんどの会場が首都ナイロビにあるデザイ・メモリアルホール。出来るだけ他の町でも試合を開き、柔道というものを知ってもらいたいのだが、なかなか会場選びが難しい。実際、他の町でも開こう思えば出来ないことはないのだが、連盟の中心になっている人たちが皆、ナイロビに住んでおり、そういう調整をしたくないだけなのだ。加えて何か行なう場合でも、すべてのアレンジがルーズなのだ。試合日なども前日に変更したりすることがしばしばある。試合当日、会場に行ってみると人っ子1人いない。ーそんなことも何度かあった。

つまり、ケニア柔道の問題はケニア柔道連盟にもある。昇段などもいい加減で、料金さえ払えばなんとかなる、に近いくらいお粗末なもの。昨年8月に日本からの使節団が来た時も、連盟は何のサポートも

しなかった。グチっぽくなったが、事実だから仕方ない。そして、選手たちや各クラブのコーチたちも現状に不満をもっているのも事実である。

私がケニアに来た当初、どうしても連盟のメンバーに加えてもらえなかった。その理由は別として、最近は状況が変わってきた。各クラブの選手、コーチ、連盟の中心となっていないメンバーたちが、現状改善のため、私をナショナル・コーチに加えようと動き出したのだ。連盟の中心人物と近く話し合いを行なう予定になっており、もし私がメンバーになり、そして今年7月中旬にKENYA Police Collegeの柔道インストラクターとしてケニアに来た内田昌男4段も一緒に連盟をサポート出来れば、ケニア柔道発展により力を出せるのだが、結果はどうあれ、残る任期を悔いのないよう頑張りたいと思う。

(了)

山本竜正 Tatsumasa Yamamoto

派遣国：ケニア
職　種：柔道
隊　次：昭和62年度2次隊（活動期間1988年1月～1990年4月）
出身地：広島県
初　出：「柔道」1989.8 1（（財）講道館）

青年海外協力隊としてケニアに来て早1年半。柔道の指導以前の問題が山積みされていて、それを1つ1つ崩していくのに任期の半分である1年もの月日を費やしてしまいました。私の任地Prison Staff Training College（刑務官学校）は、首都ナイロビより北に約30km離れた所に位置し、気候は日本の軽井沢を思わせます。1年を通じて過ごしやすい所です。

さて、私の仕事の内容ですが、刑務官の柔道部及び、刑務官候補生に柔道の指導をしています。候補生が作っているクラブの方は毎夕のように練習が行なえるので問題ないのですが、授業（護身術）の方が問題。というのも650名の候補生に対し、週2時間しか枠をもらえず、1度に300名以上の候補生に対し指導するわけです。この8月から新しく600名の候補生が入ってきますが、何とかきちんとしたクラス分けをしないと、十分納得のいく授業ができません。担当者は「うまく時間割を作る」と言ってますが、蓋を開けてみないことにはわからないのです。その時になってみないとわからないということは、いつものことです。1つ例を挙げてみましょう。

今年の5月20日に寄付集めのデモンストレーションをナイロビのニヤヨスタジアムという所で行いました。なぜ行ったかというと、学校にも、省庁にもお金が無く、合宿などをやりたくても出来ないからです。前もってケニア日本大使館と三菱商事より寄付をしていただき、これを機にPrison Sportsの復活を目指して、デモンストレーションを行い、更に寄付を集めるという予定でした。ケニアのスポーツは警察、刑務所、アトミーが中心で、中でも刑務所のスポーツは群を抜いて強かったのです。現在でも、ボクシング、空手、レスリングなどは強いのですが、全体的に見て、プリズンスポーツはダウン気味。各スポーツクラブが練習を行うためには十分な食事が必要なのですが、なにしろお金が無いので、合宿など行えないのです。

このデモンストレーションが成功すれば、どのクラブも十分な練習が行えるはずです。ところでデモンストレーション自体はうまく行えたのですが、驚いたことに省庁のコミッショナーを始め、副コミッショナー、今回の責任者である当校のコマンダント、それに私と一緒に中心となって動いていた省庁の担当者達が、当日見事に1人も来なかったのです。最初の予定日は5月6日でした。しかし、コミッショナーに仕事の用事が入ったため20日に日を替えたのですが　。何のために自分が動いていたのか。彼らが来なければ寄付してくれと誰にも言えるはずがないのに。

「心の支えはブラインド・スクール」

私の任地から更に20km程行った所にThika High School of Blindという盲人高校があります。ここに柔道部があり、今は週に2回行ってます。1日は勤務地が休みの土曜日。もう1日は候補生の授業がない水曜日。全盲の子供達に英語で技をうまく説明できるほど英語が出来ないのですが、そのような時は、私の体に触らせ説明しています。。前記のデモンストレーションの際、私はここの生徒達もメンバーに加えました。うまく寄付が集まれば、この生徒達にも何らかのサポートが出来ると思ったからです。当日の集合時間、会場へ来ていたのは、私とブラインド・スクールの生徒達だけでした。大の大人達よりも彼ら高校生の方がしっかりしている。情けない話です。

先日、私にとって初めてショックな事件が起きました。それまでは、どんなことがあっても「今からが勝負」と自分に言い聞かせ、やってきました。が、さすがにこの時ばかりは放心状態に落ち入ったのです。その事件とは私が任地に入ってから柔道部に入り、仕事の関係で外のプリズン ステーションへ移ったスタッフの者を稽古のため、私のうちに住ませ、寝食を共にし、稽古を一緒ににしていたのですが、その彼が、私のカメラを盗んで逃げたのです。彼とはそれまで兄弟のように付き合ってきただけに、本当にショックでした。しかし、私の“やる気”を呼びもどしてくれたのは、このブラインド スクールの部員達でした。プリズンの他の部員達が、私に気を使ってくれるのは嬉しいのですが、今一つ気分が晴れず、2週間家の中に閉じ込もっていました。すると、ブラインド・スクールの柔道部担当の先生から電話が入り、「今度の体育祭で、柔道部がデモンストレーションを行うことになったので、そのアレンジに来てほしい」というのです。そんなことぐらい、彼ら

で出来るのに？と思ったのですが、この2週間行ってないので、行ってみることにしました。行って道場に入ると、皆が拍手で私を迎えてくれました。どうやら、私が来ないことを心配してのことらしいのです。確かに体育祭で、デモンストレーションは行ったのですが、ただ試合をしただけのことなのです。

この日を境いに、私はまた「やる気」がもどってきました。任期も残り数ヶ月ですが、最後まで頑張ってみたいと思っています。

（了）